

博士論文

中国語を母語とする日本語学習者における「テ形」の誤用に関する研究

—動詞を中心に—

廖 琳

広島大学大学院人間社会科学研究科
国際教育開発プログラム

2023年3月

中国語を母語とする日本語学習者における「テ形」の誤用に関する研究
—動詞を中心に—

D200735

廖 琳

広島大学大学院人間社会科学研究科
国際教育開発プログラム
博士論文

2023年3月

広島大学大学院人間社会科学研究科
国際教育開発プログラム

論文名: 中国語を母語とする日本語学習者における「テ形」の誤用に関する研究
—動詞を中心に—

学位の名称: 博士(学術)
学生番号: D200735
氏名: 廖琳

令和5年2月15日

審査委員会

委員長・教授

佐藤 暢治

佐藤 暢治

教授

高永 茂

高永 茂

教授

荒見 泰史

荒見泰史

関西学院大学

大学院言語コミュニケーション文化研究科 教授

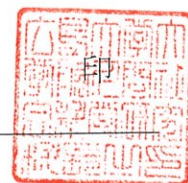
于 康

于 康

令和5年3月9日

研究科長

S. Kobayashi



目次

第一章 序論	1
1.1 研究の目的	1
1.2 研究資料	3
1.3 研究方法	4
1.4 用語の説明	4
1.4.1 「テ形」と「テ」	4
1.4.2 誤用、誤用類型、誤用傾向.....	4
1.4.3 不使用、過剰使用、混用.....	5
1.5 本研究の構成.....	5
第二章 先行研究	7
2.1 「テ形」の活用形に関する先行研究.....	7
2.2 「テ形」の統語的機能についての分類	8
2.2.1 「述語形成機能のテ形」に関する先行研究.....	9
2.2.2 「接続機能のテ形」の意味用法に関する先行研究.....	10
2.2.3 「副詞的機能のテ形」に関する先行研究.....	11
2.2.4 「文末機能のテ形」に関する先行研究.....	11
2.3 「テ」と「中止形」、及び他の接続助詞との使い分け	12
2.3.1 「テ」と「中止形」の使い分け.....	12
2.3.2 「テ」と理由の接続助詞「カラ、ノデ、タメニ」の使い分け.....	14
2.3.3 「テ」と条件の接続助詞「ト」の使い分け.....	14
2.4 「テ形」の誤用に関する先行研究.....	15
2.4.1 「テ形」の活用形	16
2.4.2 「テ」の不使用と過剰使用：「テ」と「中止形」	16
2.4.3 「テ」と他の接続助詞.....	17
2.4.3.1 「テ」と理由の接続助詞「カラ、ノデ」	17
2.4.3.2 「テ」と条件の接続助詞「ト」、「タラ」、「バ」	18
2.5 先行研究に見られる問題点と本研究の位置付け	19
第三章 動詞の「テ形」の誤用実態	20
3.1 はじめに	20
3.2 動詞の「テ形」：形式上の誤用実態.....	20
3.3 動詞の「テ形」：統語上の誤用実態.....	21
3.4 まとめ.....	26

第四章 「テ形」の活用形の誤用	27
4.1 はじめに.....	27
4.2 動詞の活用別における「テ形」の誤用分布.....	27
4.3 一段動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向.....	29
4.4 サ変動詞とカ変動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向.....	30
4.5 五段動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向.....	31
4.5.1 五段動詞の「テ形」の誤用分布.....	31
4.5.2 語尾が「る」で終わる五段動詞.....	32
4.5.3 語尾が「う」で終わる五段動詞.....	33
4.5.4 語尾が「く」で終わる五段動詞.....	34
4.5.5 語尾が「む」、「ぶ」で終わる五段動詞.....	35
4.6 まとめ.....	37
第五章 「述語形成機能のテ形」の不使用と過剰使用	39
5.1 はじめに.....	39
5.2 「述語形成機能のテ形」の誤用分類と誤用実態.....	40
5.2.1 「述語形成機能のテ形」の誤用分類.....	40
5.2.2 「述語形成機能のテ形」の誤用実態.....	40
5.3 「述語形成機能のテ形」の不使用の傾向.....	41
5.3.1 「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用.....	41
5.3.2 「受益におけるテ」の不使用.....	43
5.3.3 「V1 テ V2 におけるテ」の不使用.....	45
5.3.4 不使用の傾向のまとめ.....	46
5.4 「述語形成機能のテ形」の不使用の発生要因.....	46
5.4.1 五段動詞よりも一段動詞に「テ形」の不使用が多く現れる理由.....	47
5.4.2 「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用において「V2」に 移動動詞が多く現れる理由.....	47
5.4.3 「受益におけるテ」において「V2」が非尊敬語動詞のとき 「テ」の不使用が生じる理由.....	48
5.4.4 「V1 テ V2 におけるテ」の不使用において「テ」の不使用が 生じる理由.....	48
5.4.5 要因のまとめ.....	48
5.5 「述語形成機能のテ形」の過剰使用.....	49
5.5.1 「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用の実態及び傾向.....	49
5.5.2 「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用の要因.....	51
5.5.3 まとめ.....	51

5.6	おわりに	51
第六章	「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用：「テ」と「中止形」	53
6.1	はじめに	53
6.2	「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用	54
6.3	過剰使用の誤用の詳細	55
6.3.1	過剰使用のスケッチ	55
6.3.2	過剰使用の詳細	56
6.3.3	過剰使用における形式上の傾向	58
6.3.4	過剰使用のまとめ	58
6.4	不使用の誤用の詳細	59
6.4.1	不使用のスケッチ	59
6.4.2	不使用の詳細	60
6.4.3	不使用における形式上の傾向	61
6.4.4	不使用のまとめ	62
6.5	おわりに	62
第七章	「接続機能のテ形」の混用：「テ」と理由の接続助詞	64
7.1	はじめに	64
7.2	「テ」と他の理由の接続助詞における混用の実態	65
7.3	理由を表す「テ」の成立条件	66
7.4	誤用の詳細	67
7.4.1	「*テ→ノデ、カラ、タメニ」のスケッチ	67
7.4.2	「*テ→ノデ、カラ、タメニ」における誤用パターン	68
7.4.3	「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」のスケッチ	69
7.4.4	「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」における誤用パターン	70
7.4.5	まとめ	71
7.5	使い方の違いの要因	72
7.5.1	「*テ→ノデ、カラ、タメニ」	72
7.5.2	「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」	72
7.5.2.1	「*ノデ→テ」	72
7.5.2.2	「*カラ→テ」	73
7.6	おわりに	73
第八章	「接続機能のテ形」の混用：「テ」と逆接の接続助詞との混用	74
8.1	はじめに	74
8.2	「テ」と逆接を表す接続助詞の混用の誤用実態	74
8.3	「テ」と「ガ」の意味用法	76

8.4 「*テ→ガ」	78
8.4.1 「*テ→ガ」のスケッチ	78
8.4.2 「*テ→ガ」における混用パターン	79
8.4.3 「*テ→ガ」の「前置き」における前後件の文脈の特徴	79
8.4.4 「*テ→ガ」に「前置き」が最も多く現れている要因	80
8.4.5 まとめ	81
8.5 「*ガ→テ」	82
8.5.1 「*ガ→テ」のスケッチ	82
8.5.2 「*ガ→テ」の詳細	83
8.5.3 「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」 における前後の語の関連性	84
8.5.4 「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」 において「ガ」を使用している理由	85
8.5.5 まとめ	87
8.6 おわりに	87
第九章 「接続機能のテ形」の混用：「テ」と条件の接続助詞との混用	88
9.1 はじめに	88
9.2 「テ」と条件の接続助詞との混用実態	89
9.3 「テ」と接続助詞「ト」の混用の誤用実態	91
9.4 「テ」と「ト」の意味用法	92
9.5 「*テ→ト」	92
9.5.1 「*テ→ト」のスケッチ	92
9.5.2 「*テ→ト」の詳細	93
9.5.3 「*テ→ト」の「発見」における前後件の主語及び述語の特徴	95
9.5.4 まとめ	98
9.6 「*ト→テ」	98
9.6.1 「*ト→テ」のスケッチ	98
9.6.2 「*ト→テ」の詳細	99
9.6.3 「*ト→テ」の「因果」における前後件の主語及び述語の特徴	100
9.6.4 まとめ	102
9.7 おわりに	103
第十章 結 論	104
10.1 本研究のまとめ	104
10.1.1 「テ形」の活用形における傾向と要因	104
10.1.2 「述語形成機能のテ形」における不使用と過剰使用の傾向	

と要因	105
10.1.3 「接続機能のテ形」における不使用と過剰使用の傾向と要因	106
10.1.4 「テ」と理由の接続助詞との混用における傾向と要因	106
10.1.5 「テ」と逆接の接続助詞との混用における傾向と要因	107
10.1.6 「テ」と条件の接続助詞との混用における傾向と要因	107
10.2 動詞の「テ形」における学習者独自の捉え方	108
10.3 学習者独自の捉え方が生じる理由	110
10.4 今後の課題	111
参考文献	113
謝辞	119

図の目次

図 1-1	品詞ごとの「テ形」の誤用	1
図 3-1	動詞の「テ形」の誤用実態	20
図 3-2	動詞の「テ形」の誤用：統語上の誤用実態	21
図 3-3	「述語形成機能のテ形」の誤用類型	22
図 3-4	「接続機能のテ形」の誤用種類	23
図 3-5	「接続機能のテ形」の混用実態	24
図 3-6	第四章から第九章で考察する動詞の「テ形」の誤用	26
図 4-1	動詞の「テ形」の誤用分布	28
図 4-2	五段動詞の「テ形」の誤用分布	31
図 6-1	「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用	54
図 7-1	「テ」と理由の接続助詞における混用実態	65
図 7-2	日本語母語話者と学習者における使い方の違い	72
図 8-1	「テ」と逆接の接続助詞の混用における誤用実態	75
図 8-2	「*テ→ガ」と「*ガ→テ」における学習者の捉え方	87
図 9-1	「テ」と条件を表す接続助詞の混用における誤用実態	90
図 9-2	「テ」と「ト」の混用における誤用実態	91
図 9-3	「*ト→テ」と「*テ→ト」において最も発生しやすい 誤用パターン	103
図 10-1	「*ノデ/カラ/タメニ→テ」と「*ノデ/カラ→テ」における 学習者の捉え方	109
図 10-2	「*テ→ガ」と「*ガ→テ」における学習者の捉え方	109
図 10-3	「*ト→テ」と「*テ→ト」における学習者の捉え方	110
図 10-4	「*テ→Y」における学習者の捉え方	111
図 10-5	「*X→テ」における学習者の捉え方	111

表の目次

表 2-1 本研究における「テ形」の統語的機能の分類 (例文は白川 2009:143 による)	9
表 2-2 「述語形成機能のテ形」の分類	10
表 2-3 「接続機能のテ形」の意味用法の分類 (日本語記述文法研究会 2008 による)	11
表 2-4 「テ」と「中止形」の使い分け	13
表 2-5 「テ」、「ノデ」、「カラ」と「タメニ」の使い分け	15
表 2-6 「テ」と「ト」の異同点	16
表 4-1 一段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」	29
表 4-2 一段動詞の誤用パターンとその数	29
表 4-3 サ変動詞とカ変動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」	31
表 4-4 サ変動詞とカ変動詞の誤用パターンとその数	31
表 4-5 語尾が「る」で終わる五段動詞の 「辞書形」と「マス形」と「テ形」	32
表 4-6 語尾が「る」で終わる五段動詞の誤用パターンとその数	32
表 4-7 語尾が「う」で終わる五段動詞の 「辞書形」と「マス形」と「テ形」	33
表 4-8 語尾が「う」で終わる五段動詞の誤用パターンとその数	33
表 4-9 語尾が「く」で終わる五段動詞の 「辞書形」と「マス形」と「テ形」	34
表 4-10 語尾が「く」で終わる五段動詞の誤用パターンとその数	35
表 4-11 語尾が「む」、「ぶ」で終わる五段動詞の 「辞書形」と「マス形」と「テ形」	36
表 4-12 語尾が「む」、「ぶ」で終わる五段動詞の誤用パターンと その数	36
表 4-13 動詞の誤用パターンとその数	38
表 5-1 「述語形成機能のテ形」における誤用パターンの分布	41
表 5-2 「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用パターンとその数	41
表 5-3 「受益におけるテ」の不使用パターンとその数	43
表 5-4 「V1 テ V2 におけるテ」の不使用パターンとその数	45
表 5-5 「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用の誤用パターンと	

その数	50
表 6-2 「接続機能のテ形」の過剰使用における誤用パターン	56
表 6-3 「接続機能のテ形」の過剰使用における形式上の傾向	58
表 6-4 「接続機能のテ形」における誤用のパターン	60
表 6-5 「接続機能のテ形」の不使用における形式上の傾向	61
表 7-1 「*テ→ノデ、カラ、タメニ」における誤用パターン	68
表 7-2 「*ノデ、カラ→テ」における学習者の捉え方	70
表 8-1 「テ」と「ガ」の相違点	77
表 8-2 「*テ→ガ」における混用のパターンの詳細	79
表 8-3 「*テ→ガ」の「前置き」における混用のパターン	80
表 8-4 「*ガ→テ」における誤用のパターン	83
表 8-5 「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」 における前後の語の関連性	85
表 9-1 「*テ→ト」における混用の誤用パターンの詳細	94
表 9-2 「発見」における前後件の主語及び述語の特徴（豊田（1978）、 前田（2009）を参考に作成）	96
表 9-3 「*テ→ト」の「発見」における混用の誤用パターン	96
表 9-4 「*ト→テ」における誤用のパターン	99
表 9-5 「*ト→テ」の「因果」における形式上の傾向	101

第一章 序 論

1.1 研究の目的

「テ形」は日本語学習の初期に導入される重要な文法項目の 1 つであり、動詞、イ形容詞などに後接し、さまざまな用法を表す。日本語の中で使用頻度が高く便利なものであるが、その簡便さに頼りきってしまうことで、日本語学習者が用いる日本語には「テ形」をめぐりさまざまな誤用が生まれている。

『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver. 10（以下、『YUK 作文コーパス』）¹から「テ形」の誤用 1473 例すべてを抽出し、前接の品詞に従い分類すると、図 1-1 のようになる。「テ形」の前に現れる品詞に応じて、動詞の「テ形」などのように呼ぶ（「n」は総例数を示す。以下、同様）。

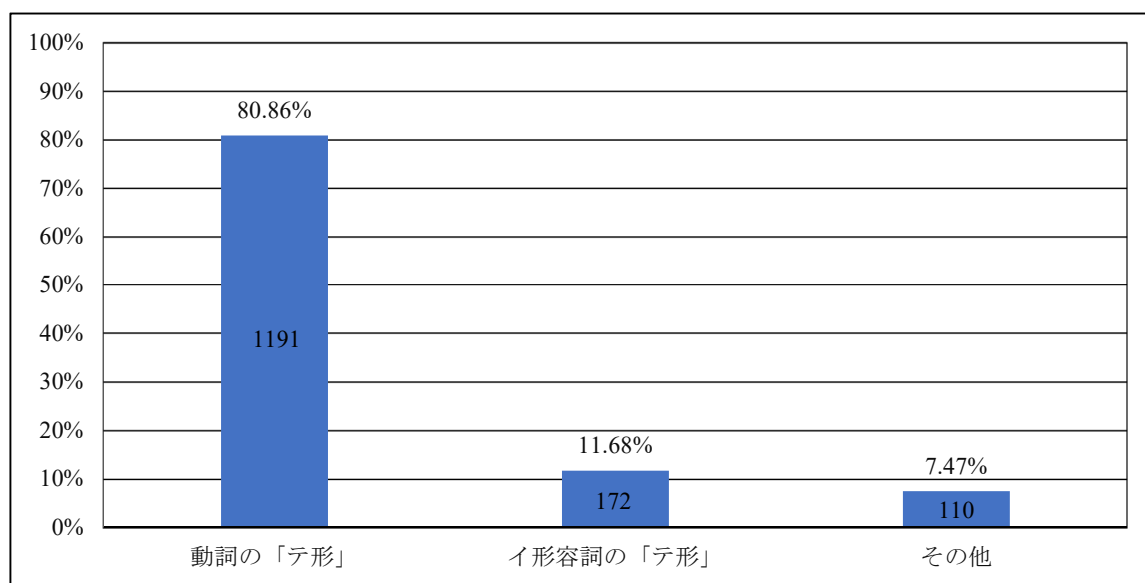


図 1-1 品詞ごとの「テ形」の誤用 (n=1473)

図 1-1 から分かるように、「テ形」の誤用は動詞の「テ形」が全誤用数の 8 割を超える 1191 例認められ、圧倒的な数を占める²。学習者が「テ形」で誤用を起こしやすいのは、動詞の「テ形」となる。

動詞の「テ形」の誤用として、『YUK 作文コーパス』には、以下のような誤用が認めら

¹ 『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』についての詳細は、『日本語誤用と日本語教育研究会』のホームページを参照されたい。URL は、<http://yukang.org/index.html> である。

² 動詞の「テ形」の誤用例はすぐ後に紹介される。イ形容詞の誤用例を紹介しておく。

イ形容詞の「テ形」:

日本女性は教育のレベルが<*高くて→高く>、普及率も高いが、性差がある程度に存在している。

れる（下線は筆者による。以下、同様）。

- (1) 今の若者たちは悪い生活習慣が普通に存在する。朝 10 時、11 時まで<*寝って→寝て>、そして、朝ごはんを食べない。
- (2) 誕生日の日に、友達と一緒に公園で写真を撮って、遊園地で<*遊びて→遊んで>、とても楽しかった。
- (3) 番組を見<*て→〇>終わると、言葉だけではなく、メールや論文の偽装を指していることが分かった。
- (4) 居酒屋としての酒店は、民国期までは確かに存在したが、だんだんその姿が消え<*〇→て>しまった。
- (5) そのため、本論文は竹慣用句の由来によって分類し<*て→〇>、日本人の竹のイメージを探求してみる。
- (6) 突然ですが、調子が悪く<*なりまして→なりましたので>、今日のゼミを休ませていただけませんか。誠に申し訳ございません³。

(1) と (2) は、活用形に関する形式上の誤用である。(1) は「寝る」という一段動詞であり、その「テ形」は「寝て」が正しいが、「寝って」のように不必要な促音が入っており、誤用と判断されている。(2) は「遊ぶ」という「ぶ」で終わる五段動詞であり、その「テ形」は「遊んで」のように撥音便化した形が正しいが、その撥音便化が認められず、誤用と判断されている。(3) と (4) は、動詞と動詞を複合的に繋げる際に生じた統語上の誤用である。(3) は「終わる」の前に「中止形」が来なければならないが、「テ形」が現れており、誤用と判断されている。(4) は補助動詞の前に「テ形」が現れておらず⁴、誤用と判断されている。(5) と (6) も、節と節を繋げる際に生じた統語上の誤用である。

(5) は、前件と後件の繋がりから、「分類して」よりも、中止形の「分類し」が適切と判断された例である。(6) は前件で理由を表すが、「テ」より「ノデ」が適切と判断された例である。動詞の「テ形」に関するこのような形式上、あるいは統語上の誤用が『YUK 作文コーパス』に多く現れ、しかも多岐に渡っているのは、動詞の「テ形」を正しく運用することが学習者にとって難易度の高い学習項目であることを示している。

本研究の目的は、以上のような観点から、『YUK 作文コーパス』から抽出した動詞の「テ形」に関わる誤用に焦点をあて、その実態を明らかにすることにある。中国語を母語とする日本語学習者(以下、学習者)によって生じた「テ形」に関する誤用にどのような誤用パターンがあるのか、その誤用パターンにどのような傾向が認められるのか、そして誤用の発生要因が何であるのか、これら 3 点を明らかにしたい。その上でさらに学習者

³ 動詞の「テ形」には、「名詞+になる」と「イ形容詞+くなる」などの複雑述語も含まれている。

⁴ 補助動詞の詳細については、2.2.1 節で述べる影山 (2021:146) を参照されたい。

が「テ」に持っている日本語母語話者とは異なる独自の捉え方を明らかにしたい。

本研究の意義としては、日本語教育からの観点になるが、次の 2 点を指摘することができる。第一は、誤用分析を通じ誤用を生み出す原因を明らかにすることができれば、学習者を正しく理解できるように導くことができ、誤用を減少させる道に繋がり得ることである。第二は、誤用分析によって明らかにされたことを教育の場で活かすための方策として、新しい教育方法の導入や教材開発が期待できることである。

1.2 研究資料

本研究では、資料として既に述べた『YUK 作文コーパス』を利用する。これは関西学院大学の于康研究室によって開発されたものであり、誤用研究を目的とした大型のタグ付き誤用コーパスである。収集されたデータは中国の大学 60 校で日本語を第一外国語として履修する学部生及び大学院生によって書かれており、その内容は論文、随筆、レポートなどの硬い文章から、日記、メールなどの柔らかい文章までの幅広いジャンルに及んでいる。そして、それぞれの文章は日本語教育に携わる日本語母語話者 2 名によって添削されている。

「テ」に関する誤用例は、ファイル数:7,986、文字数:8,329,184、タグ数:436,720 を数える。このような膨大なデータ量を有するコーパスは他に類がなく、しかもデータは学習者に限定されている。そのため、学習者が産出した誤用の傾向、そしてその誤用の要因の解明を試みる研究においては、有意義なコーパスと言える。

他方で、このコーパスに収集された「作文」のジャンルは、上に述べたように書き言葉の一定の範囲にとどまっており、話し言葉を含んだ全文体には及んでいない⁵。また、誤用の添削方法について、于(2011:81)は、誤用の判断は添削者によって異なり、また修正された箇所が作者の本来の意思を十分に表しきれていないという課題があることも指摘している。

『YUK 作文コーパス』には、このように研究資料として限界があるが、その一方でこれを資料に使用することで多くの研究成果が得られている。博士論文では、たとえば唐(2019)が「添加型」の接続詞に関する誤用の研究をし、朴(2015)が動詞述語文の主文末に見られるテンス・アスペクトに関する誤用の研究をしている。そのほかにこのコーパスを用いた誤用研究の論集もあり、浙江工商大学出版社から『日語複合助詞的偏誤研究上・下』(2019)、『日語格助詞的偏誤研究上・中・下』(2016-2018)、『日語副詞的偏誤研究上・中』(2020-2021)が刊行されている。

⁵ 于(2012:36)は、「感想文、研究計画書、レポート、宿題、メール、翻訳、外交通訳の録音資料、卒業論文、修士論文、といった文章化されたもので、話し言葉の記録ではないもの」と述べている。

1.3 研究方法

研究方法は、以下の通りである。

- ① 『YUK 作文コーパス』から「テ形」に関する誤用例をすべて抽出し、抽出した誤用例を「テ」の前の品詞に従い、動詞の「テ形」、イ形容詞の「テ形」、ナ形容詞の「テ形」、名詞の「テ形」に分類する。そして、学習者が最も誤用を起しやすなのが動詞の「テ形」であることを明らかにする。
- ② 動詞の「テ形」には、形式上の誤用として「活用形の誤用」、統語上の誤用として「述語形成機能のテ形」、「接続機能のテ形」、「副詞的機能のテ形」があるが、統語上の誤用では「述語形成機能のテ形」と「接続機能のテ形」に誤用が生じやすいことを明らかにする⁶。
- ③ 学習者が生じやすい誤用例を取り上げ、それを考察し、学習者の誤用パターン、傾向、要因を明らかにするとともに、学習者が日本語母語話者と異なるどのような捉え方をしているのかを明らかにする。

誤用かどうかの判別は、『YUK 作文コーパス』の判定基準に従っている。ただし、第五章では不使用とされている例すべてがそう判断できるかどうか再検討の余地があり、この基準に従っていない。

1.4 用語の説明

1.4.1 「テ形」と「テ」

ハイコ（1998）は、活用形とは語幹に活用語尾が付いたものであると述べている。この見方に従うと、「テ形」は「語幹+活用語尾テ」という「テ」を伴う形態であり、1つの活用形をなすものと認められる。それに対して、内丸（2005:16）は、学校文法では「テ」は接続助詞であるため、「テ形」という形態は活用形とは見なされず、「連用形+接続助詞テ」に分類されると指摘している。他方で、佐伯（2015:82）は、「テ形」は本質的に活用形であるが、接続助詞の機能を合わせもつものと見なしている。本研究では、佐伯（2015:82）の見方に従う。そのため、他の接続助詞などとの機能の違いを表す際には「テ形」は用いず、「テ」を用いる。

1.4.2 誤用、誤用類型、誤用傾向

本研究で用いる誤用、誤用類型、誤用傾向といった用語について、以下のように定義する。

誤用：

⁶ 「述語形成機能」と「接続機能」については、2.2節を参照されたい。

于等（2017:3）に従う。誤用とは、「①日本語母語話者が認定していない表現、②使用すると日本語母語話者に不自然に思われる表現、③文法上は間違いではなくて意味も通じるが、日本語母語話者の使用習慣に合わない表現、④使用条件に違反している表現（翻訳は筆者による）」となる。

誤用類型：

『YUK 作文コーパス』から抽出した動詞の「テ形」の誤用は、「不使用」、「過剰使用」と「混用」の3種類に分類できる。この3種類を総括して誤用類型と呼ぶ。

誤用傾向：

誤用が形式上、あるいは統語上特定の方向に傾くことを示す。

1.4.3 不使用、過剰使用、混用

不使用、過剰使用、混用は以下のように定義する。

不使用：

「*○→テ」：「テ」を使用しなければならないにも関わらず、学習者が使用しないことによって生じた誤用。

過剰使用：

「*テ→○」：「テ」を使用してはいけないにも関わらず、「テ」を使用することによって生じた誤用。

混用：

「*テ→Y」：「Y」（他の接続助詞）を使用するほうが適切にも関わらず、「テ」を使用することで生じた誤用。

「*X→テ」：「テ」を使用するほうが適切にも関わらず、「X」（他の接続助詞）を使用することで生じた誤用。

1.5 本研究の構成

本研究は十章で構成されている。各章の内容は、次のとおりである。

第一章は序論である。本研究の目的、研究意義、研究資料、研究方法について述べ、本研究で用いる用語について説明する。

第二章は、動詞の「テ形」に関わる先行研究について述べる。「テ形」の活用形、「テ形」の統語的機能の分類、「テ」と「中止形」及び他の接続助詞との使い分け、「テ形」の誤用に関する先行研究を整理し、先行研究の問題点と本研究の位置付けを行う。

第三章は、動詞の「テ形」の誤用実態を述べ、第四章から第九章で動詞の「テ形」に関してどのような誤用を考察対象とするのかを示す。

第四章では、形態上の誤用である活用形の誤用例を分析し、誤用のパターンと誤用の

発生要因を明らかにする。

第五章から第九章は、統語上に関わる「テ形」の誤用を考察する。第五章と第六章は不使用と過剰使用、第六章から第九章は混用を考察する。

第五章では、「述語形成機能のテ形」の不使用と過剰使用を分析し、その誤用パターンと誤用の発生要因を明らかにする。不使用については「文法的アスペクトにおけるテ」、「受益におけるテ」と「V1 テ V2 におけるテ」を、過剰使用については「統語的複合動詞におけるテ」を考察する。

第六章では、「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用として、「テ」と「中止形」を考察し、その誤用パターンと発生要因を明らかにする。

第七章から第九章は「接続機能のテ形」の混用を考察する。第七章では「テ」と理由の接続助詞「ノデ、カラ、タメニ」との混用、第八章では「テ」と逆接の接続助詞「ガ」との混用、第九章では、「テ」と条件の接続助詞「ト」との混用をそれぞれ考察し、その誤用パターンと発生要因を明らかにする。

第十章は結論である。まず、第四章から第九章で明らかになったことを述べる。次に、その成果に従い、学習者が「テ」をどのように捉えているのか、つまり日本語母語話者とは異なる学習者独自の捉え方について述べる。そして、最後に今後の課題を述べる。

第二章 先行研究

本章では、動詞の「テ形」に関わる先行研究を整理したうえで、本研究で用いる基準を示す。2.1 節では「テ形」の活用形、2.2 節では「テ形」の統語的機能の分類、2.3 節では「テ」と「中止形」、及び他の接続助詞との使い分け、2.4 節では「テ形」の誤用に関する先行研究をそれぞれ取り上げる。そして、2.5 節では先行研究の問題点と本研究の位置付けについて述べる。

2.1 「テ形」の活用形に関する先行研究

「テ形」の活用形に関する先行研究は、主に動詞の「テ形」の習得状況と習得方法をめぐって行われている。習得状況については、坂本（1993）、長友（1997）、小森・白井（1999）と初・玉岡・大和（2012）などがある。習得方法については、長友・久保田（1994）などがある。

「テ形」の習得状況について、坂本（1993）は英語を母語とする留学生を対象に辞書形から「テ形」に変換する筆記テストを行い、動詞タイプ別の誤答率から、高難易度・中難易度・低難易度という三段階の難易度階層を提案している。低難易度には *tu*、*su*、*mu*、*bu* で終わる五段動詞、中難易度には *iru*、*eru* で終わる一段動詞と (w) *u*、*ru* で終わる五段動詞が該当する。そして、高難易度には「テ形」への変換にイ音便に関わる *gu*、*ku* で終わる五段動詞が該当すると述べている。

長友・久保田（1994）は、坂本（1993）の調査結果を踏まえ、初級英語母語話者 9 名を対象に動詞の「辞書形」と「マス形」から「テ形」に変換させるという坂本（1993）と類似した調査を行っている。調査結果として、当初は既習語彙と未習語彙で正答率に差があったが、最終的には両者の正答率は同程度となったこと、動詞タイプ別の正答率は坂本（1993）による難易度階層とほぼ一致する結果が見られたことを指摘している。こうした結果から長友・久保田（1994）は、英語母語学習者はまず「テ形」をかたまりとして学習し、次第に規則化し、未習語彙にも適用できるようになるという習得方法を提示している。

長友（1997）は、長友・久保田（1994）の調査結果をより詳しく論じ、坂本（1993）で中難易度とされた *iru*、*eru* で終わる一段動詞を高難易度に位置付けている。そして、習得順序に 3 段階の階層が生じる理由として、音韻同化規則の有標性からの説明を試みている。

小森・白井（1999）は、長友（1997）が示した習得階層の検証を目的とし、中国語を母語とする初級学習者 30 人を対象に、筆記による「テ形」変換テストの調査を行ってい

る。その結果、3つの階層間の正答率に有意差はなく、長友（1997）の指摘は支持されなかったと述べている。また、正答率と誤答例を基に、促音の有無の判断を要する動詞は、そうでない動詞よりも「テ形」習得の難易度が高いと推測している。

初・玉岡・大和（2012）は、中国国内の外国語大学で日本語を主専攻としている初級学習者を対象に動詞の辞書形を提示し、それに対応する「テ形」を書いてもらうテストと文法能力テスト 2 種類のテストを行っている。その結果として、「って系」は習得が進んでおり、その後に「して系」と「て系」、さらに「いて・いで系」が続き、最も習得が難しいのは「んで系」であると述べている。そこには清音と濁音の区別がつかないという母語干渉の影響が強く反映され、そのほかにも教科書によるインプットの差が上のような結果が得られた理由であると述べている。

2.2 「テ形」の統語的機能についての分類

「テ形」の統語的機能の分類に関する先行研究について、草薙（1985）、森田（2007）、日本語記述文法研究会（2008）、吉永（2012）を取り上げる。

草薙（1985:22）は、「テ形」には、動詞と動詞、あるいは節と節を結び付ける純粋な文法的機能しかないと述べている。森田（2007）は、「テ」には、用言や助動詞など活用する語の連用形を受ける「文法機能上や語彙関連としてのテ」と、前後の句を繋げる役割を果たす「文の展開にかかわるテ」の 2 種類があると述べている。日本語記述文法研究会（2008:281）は、「テ形」は、補助的動詞・補助的形容詞と結び付き、複合的な述語を作る「複合述語の用法」もあれば、複数の事態を結び付けて 1 文にまとめる「複文の用法」もあると述べている。吉永（2012:82-84）は、「テ形」の機能を「述語形成機能」、「接続機能」、「副詞的機能」と「文末機能」に分けている。「述語形成機能」は、「テ形」がさまざまな述語成分に前接し、複合述語を形成する。「接続機能」は、「テ形」節と主節とがそれぞれの意味関係で繋がれている。「副詞的機能」は、「テ形」が副詞句となっており、修飾語としての性格が強い。「文末機能」は、「テ形」が会話では文末形式として用いられることを表す。

草薙（1985:22）、森田（2007）と日本語記述文法研究会（2008）はいずれも「テ形」の統語的機能を 2 種類に分けているが、それらは吉永（2012）が述べる「接続機能」と「述語形成機能」に対応するものである。従って、本研究では、吉永（2012）の分類を踏まえ、表 2-1 に示したように「テ形」の統語的機能を「述語形成機能」（以下、「述語形成機能のテ形」）、「接続機能」（以下、「接続機能のテ形」）、「副詞的機能」（以下、「副詞的機能のテ形」）と「文末機能」（以下、「文末機能のテ形」）の 4 種類に分類する。第三章からの分析は、この分類に従い行う。

以下で、表 2-1 に示した「述語形成機能のテ形」、「接続機能のテ形」、「副詞的機能のテ形」、「文末機能のテ形」4 種類の先行研究を見ておく。

表 2-1 本研究における「テ形」の統語的機能の分類（例文は白川 2009:143 による）

「述語形成機能のテ形」	さまざまな述語成分に前接し、複合述語を形成する。 例:分かっている／捨ててある／書いてやる
「接続機能のテ形」	「テ形」節と主節とそれぞれの意味関係で繋がれている。 例:雅子がピアノを弾いて明子が歌を歌った。
「副詞的機能のテ形」	「テ形」節は主節事態を副詞的に説明し、従属的な接続機能を持つ。 例:太郎は歩いて学校に行く。
「文末機能のテ形」	「テ形」は会話では文末形式として用いられる。 例:「すみません、成田まで蟹に取りに行ったら、渋滞に巻き込まれて。」

2.2.1 「述語形成機能のテ形」に関する先行研究

「述語形成機能のテ形」に関わる先行研究を概観する。動詞と動詞を繋げる「テ形」の先行研究として、ユリアニ（2005）と吉永（2012）を取り上げる。

ユリアニ（2005）は、「V1+テ+V2」は「V1+テ」の後ろに付いて使用される動詞が本来の意味を失うかどうかにより、2種類に分けることができると述べている。その1つは「V1+テ+V2」のV1とV2とが同じ文法的性質を持ち、その2つの動詞が文法的に同等の関係を持つ場合である。そして、もう1つはV2がV1の「テ形」の後ろに付いて本来の意味を失い、V1の意味を補助し、新しい意味を形成する補助動詞となる場合である。吉永（2012）も「テ形」はさまざまな述語成分に前接し、「分かっている」、「捨ててある」などの形式動詞に前接しアスペクトや授受表現などを形成したり、「読んでください」などの慣用的な述語を形成したりすると述べている。そして、他にも「～てまわる」、「～てのける」など多様な複合述語を形成すると述べている。

補助動詞の先行研究については、吉田（2012）と影山（2021）を取り上げておきたい。吉田（2012）は、補助動詞には「～てまわる」、「～てのける」などがあるが、授受を表す「てくださる」などの敬語表現なども補助動詞に含めることができると述べている。影山（2021:146）は、「テ形」に後続する補助動詞の用法は、意味機能から、①文法的アスペクト（「ている」、「てくる」、「ていく」など）、②将来を見越した話者の態度（「てみる」、「てある」、「ておく」など）、③受益（「てやる」、「てくれる/くださる」、「てもらう/いただく」）の3つに分けることができると述べている。

吉田（2012）に従えば、吉永（2012）が述べた「テ形」に後接する3種類の動詞はすべて補助動詞と見ることができる。そのため、本研究では「述語形成機能のテ形」の分類についてはユリアニ（2005）に従うが、補助動詞の基準については影山（2021）を援用する。表 2-2 を示しておく。

表 2-2 「述語形成機能のテ形」の分類

「V1+テ+V2」	①V1 と V2 が同じ文法的性質を持ち、文法的に同等の関係。 例：「起きて浴びる」。 ②V2 が V1 の「テ形」の後ろに付いて本来の意味を失い補助動詞となる。 例：「見ている」、「開けてある」、「開けておく」、「やってしまった」、「なってきた」など。
V2 が「補助動詞」	①文法的アスペクト。 例：「ている」、「てくる」、「ていく」など
	②将来を見越した話者の態度。 例：「てみる」、「てある」、「ておく」など
	③受益。 例：「てやる」、「てくれる/くださる」、「てもらう/いただく」

2.2.2 「接続機能のテ形」の意味用法に関する先行研究

節と節を繋げる「接続機能のテ形」に関する先行研究は、その多くが意味用法を中心に論じている。代表的な先行研究として、森田（1980）、日本語記述文法研究会（2008）、仁田（2010）、吉永（2012）、吉田（2012）などを挙げるができる。「接続機能のテ形」の意味用法の分類について述べた先行研究を通じ、本研究が用いる分類基準を示す。

森田（1980:313）は、接続助詞「テ」を「ある叙述から次の叙述へと移るときの橋渡しとして用いる繋ぎの語」と規定し、各用法の意味は前件・後件の内容によって分けられるとしている。そして、用法を「並列」、「対比」、「同時進行」、「順序」、「理由」、「手段・方法」、「逆接」、「結果」の 8 種類に分類している。日本語記述文法研究会（2008）は、「テ形」には前後件の事態と事態の関係により、「並列」、「対比」、「前触れ」、「継起」、「理由」、「逆接」、「順接条件」、「付帯状況」という 8 用法があると述べている。仁田（2010）は、「シテ」形接続に託され表示される主節への意味的關係の典型として「付帯状態」、「継起」、「並列」といった 3 類型を抽出し、連続し繋がっていることを認めながらも、「継起」を「時間的継起」と「起因的継起」に分けている。吉永（2012）は、「テ形」節の典型的な接続用法を「付帯」、「並列」、「継起」、「因果」の 4 種類に分けている。そして、「並列タイプ」と「先後タイプ」という 2 種類の概念タイプを設定し、「付帯」と「並列」は「並列タイプ」、「継起」と「因果」は「先後タイプ」にまとめている。吉田（2012）は、「テ形」の意味用法の中核は「前件と後件の時間関係」と指摘している。そして、前件と後件の発生が同時か、順序不問か、不可逆かにより、「テ形」の主な用法を「先行」、「並列」、「付帯状態」、「理由」の 4 種類に大別している。

日本語記述文法研究会（2008）の分類は、仁田（2010）、吉永（2012）、吉田（2012）の分類を細分化し、「対比」、「前触れ」、「逆接」、「順接条件」を加えたものである。また、森田（1980）の「結果」と日本語記述文法研究会（2008）の「順接条件」は両方ともある状況が成立し、自然にある結果になるといった意味を表す。さらに、日本語記述文法研究会（2008:286-287）の「付帯状況」は前後件が同時進行的に起こる場合もあれば、同

時的に付随する状況は手段や方法を意味する場合もあり、森田（1980）の「同時進行」と「手段・方法」に対応していると言える。従って、本研究では、「接続機能のテ形」の意味用法の分類については、日本語記述文法研究会（2008）に従う。分類の詳細は表 2-3 に示したとおりであり、本研究の第五章から第九章で行う「テ」と他の接続助詞との混用の分析に際しては、この表 2-3 の意味用法の分類を用いる。

表 2-3 「接続機能のテ形」の意味用法の分類（日本語記述文法研究会 2008 による）

「並列」	同時点で成立する 2 つの事態を並べることができ、前後の事態は対等な関係にあるので、入れ替えても意味が変わらない。 例:祖父の家には裏庭があって、大きな蔵が建っていた。
「対比」	共存して成立する 2 つの事態が反対の意味を表す。 例:弟は結婚していて、妹はまだ独身です。
「前触れ」	後件で述べる内容の趣旨を前触れ的に前件で述べる。 例:問題が 1 つあって、父は英語が話せないのである。
「継起」	時間の流れに沿って順に生起する複数の事態を表す。 例:手を洗って、おやつを食べた。
「理由」	前後件のどちらか、あるいは両方が無意志的な動きである場合、先に起こった出来事が原因である。 例:悲しい話を聞いて、涙がこぼれ落ちた。
「逆接」	前件から引き起こされると予測される事態が起こらず、逆の事態が成立している。 例:本当のことを知っていて教えてくれなかったらしい。
「順接条件」	主節の事態が従属節の事態が起こった場合にのみ発生することを表す。 例:歩いて 20 分かかる。
「付帯状況」	主体が同じで、前件の事態が後件の事態に付随して成立していることを表し、前件は、主体の様子を表し、姿勢を表す動詞、再帰的動詞、携帯を表す動詞が現れる。 例:立っておしゃべりをした。

2.2.3 「副詞的機能のテ形」に関する先行研究

「副詞的機能のテ形」に関する先行研究については、吉永（2012）が挙げることができる。吉永（2012:86）は、「副詞的機能のテ形」は「はっきり言って」、「無理して」、「目に見えて」などの慣用的な副詞句といった形式で現れ、連用形に変換しにくいものが多いと述べている。

2.2.4 「文末機能のテ形」に関する先行研究

「文末機能のテ形」に関する先行研究は、主に表現形式、成立条件及び用法を中心に行われている。表現形式については吉永（2012）を取り上げ、成立条件及び用法については白川（1990）を取り上げる。

吉田（2012）は、文末の「テ形」節は「～らしくて」、「～ようで」などのモダリティ要素や使役・受け身など多様な要素を取り込むことができ、会話では頻繁に文末形式として用いられる。また、「～てください」などの依頼表現も会話では「～て。」のような文末形式が多用されると述べている。

白川（1990）は、文末の「テ形」を「言いさし」の表現とし、「終助詞的」な用法と同価値であると述べている。そして、その「終助詞的」な用法の統語的・意味的な基準として、①文末で使われる、②文脈に依存しなくても、単独で、意図した意味を表すことができるといった2点を定めている。また、「言いさし」の「テ形」の用法として、①事情の説明、②感嘆、③陳謝、④感謝、⑤非難といった5種類の意味を列挙している。

2.3 「テ」と「中止形」及び他の接続助詞との使い分け

「テ」の機能は多義に渡っており、節と節を繋げる際、中止形や他の接続助詞¹と似ている点がある。「テ」と他の形式の使い分けを論じた先行研究は、「中止形」、理由の接続助詞「カラ、ノデ、タメニ」、条件の接続助詞「ト」に集中している。以下、それぞれ代表的な研究を詳述する。

2.3.1 「テ」と「中止形」の使い分け

「テ」と「中止形」の使い分けについては、生越（1988）、林（2007）、益岡（2013）と中俣（2015）を取り上げる。ただし、生越（1988）、林（2007）、中俣（2015）では「中止形」ではなく、「連用形」、益岡（2013）では「中立形」が用いられている。

生越（1988）は、両者の使い分けについて、前後件が同時に起こる同時的用法と前後件が継起的に起こる継起的用法に分けて論じている。同時的用法については、「テ形」は前後件一体となって成立している「前件かつ後件」の関係にある、またはテーマ主導によって前後件の一体性が示されている「テーマによる一体性」である場合に使用される。他方、「連用形」は前後件がそれぞれ独立している「前件そのほかに後件」の関係にある、または前後件の述語が同じあるいは相反する語の場合に使用される。そして、継起的用法については、「テ形」の文では前後件は連続して起こるが、「連用形」の文では前後件は時間的間隔をおいて起こる。さらに、因果関係がある場合、後件に感情に関係する動詞、形容詞が来る時、また「連用形」が一音節になる動詞（「見る」、「来る」など）が前件の述語になる時、「テ形」が用いられると述べている。

林（2007）は、新聞・論述文・小説といった3種の文章タイプを資料とし、「連用形」の時に一拍になる動詞、「を通じて」などの機能語的表現などの場合に、「テ形」が偏って

¹ 接続助詞ではなく、接続語という用語が用いられることがある。たとえば庵他（2000）がそうであり、節と節を繋ぐ接続語を「付帯状況・並列」、「時間」、「理由・目的」、「条件」、「逆接」の5種類に分けている。「付帯状況・並列」には「テ」、「中止形」、「ながら」、「たり」、「し」など、「時間」には「とき」、「ときに」、「てから」など、「理由・目的」には「カラ」、「ノデ」、「タメニ」など、「条件」には「ト」、「バ」、「タラ」、「ナラ」、そして「逆接」には「テモ」、「ノニ」、「ガ」などがあると述べている。

出現する。他方、「ある」、「される」などの副詞的用法の場合には、「連用形」が偏って出現することを明らかにしている。

益岡（2013）は、「中立形」接続は並列を基本とし、場合によって継起・因果の意味を含蓄する。他方、「テ形」接続は並列・時間継起・因果・容態の意味を表す。また、継起・因果の領域では「テ形」接続が優先され、並列の領域では「中立形」接続が優先されると指摘している。

中俣（2015）は、並列を表す「テ」と「連用形」の形式及び意味に着目し、「テ」は同一場面に存在する事態同士を結合できる「結合提示」であり、前後件の述語が同形式である時には使用しにくい。他方、「連用形」は同一場面に存在しない事態であっても並列できる「分離提示」であり、前後件の述語が同形式であっても使用できるといった点を明らかにしている。

これらの先行研究に従い、「テ」と「中止形」の異同点をまとめると、表 2-4 のようになる。括弧内は当該用法の略称である。

表 2-4 「テ」と「中止形」の使い分け

	テ	中止形
生越 (1988)	同時的用法: ・前後件は一体となって成立している (「前件かつ後件」) ・テーマ主導により前後件の一体性が示される (「テーマによる一体性」)	同時的用法: ・前後件はそれぞれ独立している (「前件そのほか後件」) ・前後件の述語が同じあるいは相反する。 (「形式的類似性」)
	継起的用法: ・前後件は連続して起こる (「前後に連続性あり」) ・因果関係があり、感情の述語が後件に来る (「因果関係あり」)	継起的用法: ・前後件は時間的間隔をおいて起こる (「前後に連続性なし」)
	音節: ・連用形が一音節になる動詞が前件の述語になる (「連用形が一音節」)	
林 (2007)	連用形の時に一拍になるもの (「連用形が一音節」)	「ある」、「される」などの副詞的用法 (「副詞的用法」)
	「～を通じて」などの機能語的表現 (「機能語的表現」)	
益岡 (2013)	因果の領域でテ形が優先 (「因果関係あり」)	並列の領域で中止形が優先 (「並列で中止形が優先」)
中俣 (2015)	並列の意味用法: 同一場面に存在する 2 つの事態を結合する (「結合提示」)	並列の意味用法: ・同一場面に存在しない 2 つの事態を結合する (「分離提示」) ・前後件の述語が同形式であっても使用できる (「形式的類似性」)

2.3.2 「テ」と理由の接続助詞「カラ、ノデ、タメニ」の使い分け

「テ」、「カラ」、「ノデ」と「タメニ」はいずれも理由を表すが、先行研究ではそれらの使い分けを、主に、モダリティ制約、述語の意志性の制約、因果関係の度合いといった3点から論じている。

モダリティ制約については、鈴木（1976）と于（1998）が論じている。鈴木（1976）は「カラ」、「ノデ」の後件にモダリティの使用が可能であるのに対して、「テ」には制限があると述べている。于（1998）も同様の指摘をし、さらに「タメニ」文にもモダリティが現れにくいと述べている。

述語の意志性の制約についても、鈴木（1976）と于（1998）が論じている。鈴木（1976）は、「テ」の後件文末には意志的な動作は現れにくい、「ノデ」、「カラ」はそれが可能であると述べている。于（1998）は、「タメニ」は積極的に動作の結果状態を作り出し、主節の原因にすることができるが、「テ」はできないと述べている。

因果関係の度合いについては、滝井（1998）、吉田（1994）と于（1998）が論じている。滝井（1998）は、「ノデ」、「カラ」を用いれば、必然性が薄くても前件を後件の理由として提示できるが、「テ」となると、必然性が高くなければ「テ」の接続文は自然文とはならないと指摘している。吉田（1994）は、「テ」は理由の機能を課すために、前後事態が因果性の強いなどの諸制約が必要であると述べている。于（1998）は、「テ」は2つの出来事の間存する因果関係が意味的な関連性によって表される表現であり、「タメニ」は形態的に原因と結果を明確に示す表現であると述べている。

以上に従い「テ」、「ノデ」、「カラ」と「タメニ」の異同点をまとめると、表 2-5 のようになる。－は、先行研究で言及されていないことを示す。

2.3.3 「テ」と条件の接続助詞「ト」の使い分け

「ト」形式の文の基本は、益岡（1993:14）に従うと、前件で表される事態と後件で表される事態とが継起的に実現するものとして分かちがたく結びついていることを表し、広義の順接並列の1表現となる。仁田（2010:249）も前後件の間に先行・後続の時間的關係を与えるのが、「シテ形」接続の最も基本的な解釈であると述べている。そのためか、「テ」と「ト」の使い分けについての先行研究は「継起」に集中している。

「継起」用法の「テ」と「ト」の使い分けについては、中島（2007）、金澤（2008）、前田（2009）が論じている。

中島（2007）は、「継起」の場合、「テ」は「ト」に置換できると指摘した上で、前件に始動、終結動詞が現れる場合には「ト」が許容され、「テ」は許容度が低いこと、他方で、後件にモダリティが来る場合には「テ」が許容され、「ト」は許容されないといった違いがあることを指摘している。また、「ト」は前後に切れ目があり、外的に描写するの

表 2-5 「テ」、「ノデ」、「カラ」と「タメニ」の使い分け

	テ	ノデ	カラ	タメニ	
共通点	理由を表す				
相 違 点	モダリティの制約				
	鈴木 (1976)	あり	なし	なし	--
	于 (1998)	あり	なし	なし	あり
	述語の意志性の制約				
	鈴木 (1976)	あり	なし	なし	--
	于 (1998)	あり	なし	なし	なし
	主従節の因果関係				
	滝井 (1998)	必然性が強い	必然性が弱い	必然性が弱い	--
	吉田 (1994)	因果性が強い	因果性が弱い	因果性が弱い	--
	于 (1998)	意味的 関連性に頼る	--	--	形態的に 明確に示す

に対して、「テ」は前後が切れず、内的に関係付けるという違いがあると述べている。

金澤 (2008) は、日本語教科書から「継起」の「テ」と「ト」の例を抽出し、前後件の主語と後件の述語を調べている。その結果、「テ」の場合は前後件の主語が同主語で後件の述語がほとんど他動詞、「ト」の場合は前後件の主語が異主語で、後件の述語が自動詞や形容詞類に偏るという対称的な関係にあることを指摘している。

前田 (2009) は、「連続」という用語を用いているが、「テ」は複数の動作が 1 場面で行われるのに対して、「ト」は 2 つの動作しか連続させることができず、その 2 つの動作を 2 場面に大きく分けてしまう。また、「ト」は「テ」とは異なり、一人称の動作を述べるには適当ではないといった指摘をしている。

先行研究に従い、「テ」と「ト」の異同点をまとめると、表 2-6 のようになる。

2.4 「テ形」の誤用に関する先行研究

「テ形」の誤用に関する先行研究は、主として、活用形、節と節を繋げる「テ」の不
使用と過剰使用（「テ」と中止形）、「テ」と他の接続助詞との使い分けに注目したもの
が多い。以下では、この 3 点から論じる。

表 2-6 「テ」と「ト」の異同点

		テ		ト	
意味用法		仁田 (2010)	付帯状況、継起（時間的 継起、起因的継起）、並列	中島 (2007)	「一般条件」、「継起」、 「発見」、「きっかけ」、 「トキ」、「過去の習慣」
		吉永 (2012)	「付帯」、「継起」、 「因果」、「並列」	前田 (2009)	「仮説」、「一般・恒常」、 「反復・習慣」、「連続」、 「きっかけ」、「発見」、「発見」
「継起」 用法上の 使い分け	中島 (2007)	<ul style="list-style-type: none"> ・前件に始動、終結動詞：不可 ・後件にモダリティ：可 ・前後件に切れ目のあるなし：なし ・事柄の描写：内的 		<ul style="list-style-type: none"> ・前件に始動、終結動詞：可 ・後件にモダリティ：不可 ・前後件に切れ目のあるなし：あり ・事柄の描写：外的 	
	金澤 (2008)	<ul style="list-style-type: none"> ・前後件の主語：同主語 ・後件の述語：ほとんどが他動詞 		<ul style="list-style-type: none"> ・前後件の主語：異主語 ・後件の述語：自動詞や形容詞類に偏り 	
	前田 (2009)	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の動作を1つの場面で描写 ・一人称も可 		<ul style="list-style-type: none"> ・2つの動作の連続のみ可 ・2つの動作を2つの場面で描写 ・一人称は不可 	

2.4.1 「テ形」の活用形

「テ形」の活用形の誤用を論じた先行研究として、長友（1997）と小森・白井（1999）を取り上げる。

長友（1997）は初級英語母語話者 9 名を対象にした長友・久保田（1994）の調査結果に従い、「テ形」の活用形において、「話して」のような母音添加は無標であるのに対し、「書いて」のような子音脱落は有標であり、習得されにくいと解釈している。そして、部分同化の過剰般化（例：<*急んで→急いで>、<*降んで→降って>など）、母音添加の過剰般化（例：<*吸いて→吸って>、<*なぐりて→なぐって>、<*さけびて→さけんで>など）のような誤用が多数観察されることを報告している。

小森・白井（1999）は、「日本語学習者作文コーパス」（大曾 1999）を用い 380 編の作文を分析した結果、誤用の約半数は促音化の有無に関するもの（例：<*おわて→おわって>、<*いって→いて>など）であったと指摘している。この結果について、促音は拍が異なるだけで音素であることは他と変わらないが、促音の有無の区別をしにくいことが「テ形」の形成に影響を及ぼしていると述べている。

2.4.2 「テ」の不使用と過剰使用：「テ」と「中止形」

「中止形」が関わる「テ」の不使用と過剰使用について、先行研究の注目は過剰使用にあり、不使用に注目したものはわずかしかない。過剰使用について論じたものとしては、田代（1995）、中野（1997）、秋口・鄭（2002）と市川（1997）がある。

田代（1995）は、中上級日本語学習者の表現における不自然さや不適切さが何によって起こされるのかを明らかにするため、日本語学習者と日本語母語話者にセリフのない漫画を見せて作文を書かせ、そこに現れた表現にどのような相違があるのかを考察している。母語話者は「テ」と連用形接続を合わせて使用するが、日本語学習者は「テ」を過剰にすること、1つの文で主語が交替する場合にも「テ」を用い、それが不自然さにつながっていることを明らかにしている。

中野（1997）は、日本人学生と香港・韓国の大学生を対象に、日本語母語話者と日本語学習者による「テ形」接続と「連用形」接続における使い分けの実態を論じている。日本語学習者のほうが母語話者より「テ形」の使用頻度が高いことを明らかにし、その理由として、日本語学習者が使用する「テ形」の意味機能は多岐に渡り、「テ形」を使用すれば間違いが避けられると思っていると指摘している。

秋口・鄭（2002）は、被調査者（中国語・韓国語・日本語母語話者）に3分程度の音声流れないビデオを見せ、その内容を書かせた作文を文字化し、文章表現の相違を考察している。その結果、母語話者は「テ形」接続よりも連用形接続を多く使用しているのに対し、日本語学習者は「テ形」を使う傾向が見られると報告している。

市川（1997）は、継起を表す動詞「テ」で並べ上げる場合、「～テ～テ～テ」と羅列すればよいと思ってしまう日本語学習者がいると指摘している。市川（1997）は不使用についても論じ、継起と付帯用法の場合、「テ形」を使用しないことを指摘している。

2.4.3 「テ」と他の接続助詞

「テ」と他の接続助詞に関わる先行研究は、主に「テ」と理由の接続助詞、「テ」と条件の接続助詞との混用に焦点を当てている。

2.4.3.1 「テ」と理由の接続助詞「カラ、ノデ」

「テ」と理由の接続助詞「カラ・ノデ」との混用を研究したものとしては、吉田（1994、1995）、滝井（1998）と加藤（2005）がある。

吉田（1994）は台湾の4大学で日本語を学ぶ学生の作文及び対話を文字化したものを考察し、日本語学習者の誤用として、「『テ』と似た役割を持つ接続助詞との混同²による誤り」と「『テ』に本来課せられ得ない接続機能を課した誤り」の2種類があることを指摘している。そして、構文能力が安定している3、4年生では、理由の「テ」に誤用が集中していることを明らかにしている。また、前後の述語を意志のムードにすれば「テ」でなく「カラ」、「ノデ」を使用し、他方、後件が話し手の感情を直接示す場合は「カラ」、「ノデ」で代用しないほうが良いといった誤用を避けるための留意点も示している。そし

² 吉田（1995）では、「テ」→「ノデ/カラ」の誤用のパターンについて、「混用」ではなく「混同」という用語を用いている。

て、吉田（1995）では、「テ」と「カラ」、「ノデ」との混同を避けるには、「テ」と「カラ」、「ノデ」の使い分けを明確にする必要があるという点から、次を理解することが不可欠であると述べている。「理由」を表す「テ」の文の後件に命令・要求などの意志動詞が来ないこと、前項動作・事態の受け手の視点を統一させるといった前後の因果関係を強めること、原因をはっきりさせないのなら制約の少ない「カラ」「ノデ」を使わせるほうが安全であること、「理由」節が二重になる時は「カラ」「ノデ」節の中で必ず「テ」を使わなければならないといったことが指摘されている。

滝井（1998）は、日本語学習者の非文を正用に訂正し、その訂正基準を前件の述語の意志性、後件の述語のテンス、後件の述語の文体、前後件における理由の必然性の程度といった 4 要素にまとめている。必然性の程度については、「テ」を使用すると不自然とされる例の場合、前件が後件の原因だと明確に認識させる以外、誤用を直していく方法は他にないとしている。そして、「テ」が不自然になる理由について、前件から後件が必然的に引き起こされるというほどの緊密な前後関係がないと、単に「テ」で繋いだけで原因として認識するには根拠が弱いと指摘している。

加藤（2005）は、理由を表す「テ形」接続文の正用文と誤用文とともに提示し、複文に現れる形容詞・動詞・モダリティの種類と文の構造及び意味との関係を考察している。中・上級の日本語学習者にもこの使い方に関する誤用が多く見られる理由の 1 つとして、「ノデ」、「カラ」を使用する複文は理由の意味が明確に現れないため、先に学習する継起的用法と混同され、誤用となるものが多い。それに加えて、理由を表す「テ形」の文は、その意味のみならず、継起的意味をあわせ持って使われる場合が多く、それが各意味間の線引きを曖昧にしていると述べている。

2.4.3.2 「テ」と条件の接続助詞「ト」、「タラ」、「バ」

「テ」と条件の接続助詞「ト」、「タラ」、「バ」との混用を研究したものとして、吉田（1995）と市川（1997）がある。そして、「テ」と「ト」との混用を研究したものとして、金澤（2008）がある。

吉田（1995）は、台湾人日本語学習者における「テ」と条件の接続助詞との混用の誤用例を分析し、「テ」に本来ない接続機能を課した誤りとして、「テ」と「ト」、「タラ」と「バ」の混用が認められると述べている。その中でも誤用は、「テ」と同様に「継起」の機能を持つ「ト」の「発見」との間に最も多く見られることを指摘している。そして、「ト」の「発見」との混用には「*テ→ト」と「*ト→テ」があることを指摘し、後件に意外性のあることが来ると継起性は認められないので「テ」は使えないこと、後件にサスペンス性もなく前件が軽い理由であれば「テ」を用いて差し支えないことを明らかにしている。

市川（1997）は、日本語学習者全般の観点から、「テ」と「ト」、「タラ」、「バ」の混用のパターンとして、「テ」と「ト」については「*テ→ト」と「*ト→テ」、「テ」と「タラ」については「*テ→タラ」と「*タラ→テ」が認められることを示している。他方、「テ」と「バ」の混用については「*テ→バ」しか認められないと述べている。「テ」と「タラ」の混同について、「タラ」と混同しやすい「テ」は理由を表す「テ」であることを明らかにし、それは「タラ」が理由を表すことができないことに要因があることを述べている。

金澤（2008）は、日本語学習者の誤用例「*テ→ト」に焦点を当てて考察している。日本語学習者が書いた2種類の作文から39文を取り出し、誤用例「*テ→ト」の共通特徴として、「前後件における主語（主体）の相違」と「後件における述語の無意志性」の2点を取り上げている。そのうえで、日本語教科書及び国語教科書における「テ」と「ト」それぞれにおける前後件の主語の関係（同主語＝「テ形」：異主語＝「ト形」）と、後件の述語の特徴（「ト」は無意志述語に偏り、「テ」はほとんど意志動詞）を示している。さらに、日本語学習者のレベルに関わらず、「ト」は継起の「テ」との誤用が広いことを明らかにしている。

2.5 先行研究に見られる問題点と本研究の位置付け

以上、「テ形」に関する先行研究の詳細を概観した。以下では、先行研究の問題点と本研究の位置付けについて述べておきたい。

先行研究は2.4節で見たように「テ形」の誤用に関して、多様な研究が行われている。しかし、問題点を3点指摘することができる。第一は、先行研究の多くは「テ形」の誤用を断片的に論じるだけであり、全般的な議論には及んでいないという点である。これまでの誤用分析は、誤用例を列挙することに中心が置かれており、誤用傾向そして発生要因を深く掘り下げることに欠けている。研究の幅と深さを広げるには、意味用法の分析に加え統語論的な特徴を考慮に入れ、誤用を産む日本語学習者の立場から誤用の発生要因を明らかにすることが求められる。

第二は研究資料の問題である。先行研究で研究対象として扱われたものは、主に、日本語学習者と日本語母語話者が作成した限られた文体のもの、あるいは限られた数の被調査者やアンケート調査から得たものであった。誤用の全体像及び誤用実態を把握するには、文体の幅広い大型コーパスを利用し、そこから抽出した日本語学習者の誤用例を用いた分析が不可欠である。

第三は日本語学習者の母語を視野に入れた研究に関わることである。これまでの先行研究は、日本語学習者の母語が特定されていないものが多く、特定されていたとしても多くの研究は少数の学習者に限られている。ある特定の母語話者に限定して誤用研究を行うことは、その母語話者の誤用にどのような傾向があるのかを詳細に探ることができ、その誤用がなぜ発生しているのかを分析していくうえで、まとめて有益であると言える。

第三章 動詞の「テ形」の誤用実態

3.1 はじめに

本章では、『YUK 作文コーパス』から抽出された動詞の「テ形」の誤用実態として、その全体像を見ていく。そして、第四章から第九章でどのような誤用が考察対象となるのかを示す。動詞の「テ形」の誤用数は第一章の図 1-1 で示したように 1191 例であり、その内訳は、図 3-1 のように形式上の誤用である「活用の誤用」が 243 例、「統語上の誤用」が 948 例である。

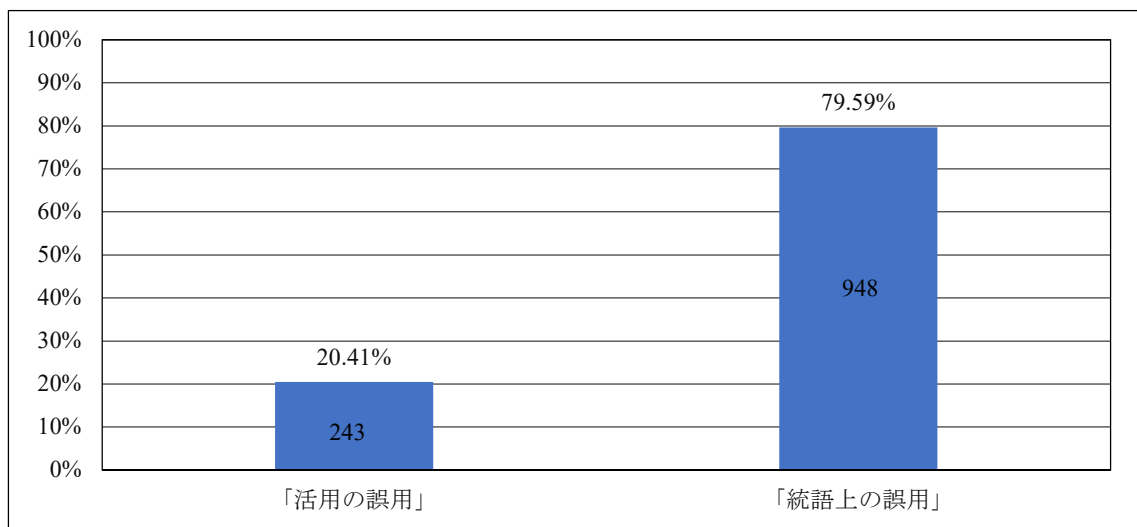


図 3-1 動詞の「テ形」の誤用実態 (n=1191)

以下、3.2 節では形式上の誤用である「活用の誤用」について述べる。3.3 節と 3.4 節では、統語上の誤用について述べる。そして、3.5 節では第四章以下で考察する誤用をまとめ、図に示す。

3.2 動詞の「テ形」：形式上の誤用実態

本節では、動詞の「テ形」の誤用実態について、形式上の誤用である「活用の誤用」について述べる。「活用の誤用」は図 3-1 にも示したように 243 例あり、この数字は動詞の「テ形」の全誤用 1191 例の約 2 割を占める。「活用の誤用」の例は第一章の (1) と (2) にも示したが、それとは異なる例をここでも示しておく。

- (1) 国というものは、国内の最大の集団であり、「ホテルの墓」で、全国民は団結し、<*争いて→争って>いる。日本人は集団のために、なんでもできる。

(2) 若者たちはいつも自分の携帯電話を見てばかりいる。それに対してお年寄りはいくら
べら<*しゃべて→しゃべて>、そして声も大きくて、とてもうるさいと思う。

このような「活用の誤用」については、第四章で詳細に議論する。

3.3 動詞の「テ形」：統語上の誤用実態

本節では、動詞の「テ形」における統語上の誤用実態について、2.2 節で見た動詞の
「テ形」の機能別分類に従い、整理しておく。図 3-2 のようになる。

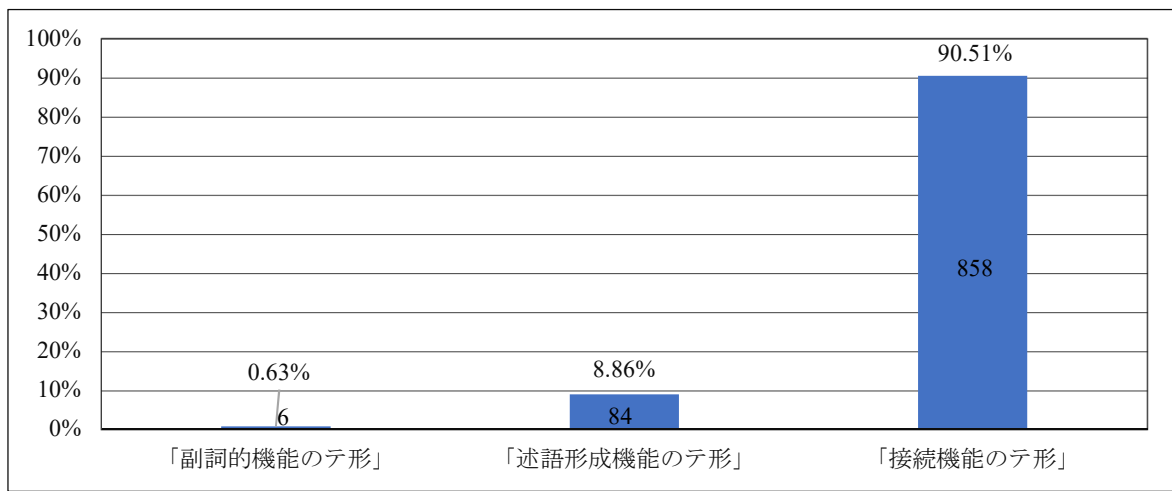


図 3-2 動詞の「テ形」の誤用：統語上の誤用実態 (n=948)

図 3-2 を見ると、「副詞的機能のテ形」、「述語形成機能のテ形」と「接続機能のテ形」
において誤用が生じた数値に大きなばらつきが認められる。「接続機能のテ形」の誤用は
858 例 (90.51%) で最も多く、全体の 9 割を超えている。他方、「述語形成機能のテ形」
の誤用は 84 例 (8.86%)、「副詞的機能のテ形」の誤用は 6 例 (0.63%) である。これら
の数値を見ると、動詞の「テ形」の誤用は「接続機能のテ形」に集中していると言える。
それぞれの誤用例を 2 例ずつ (3) から (8) に挙げておく。「副詞的機能のテ形」の誤用
が (3) と (4)、「述語形成機能のテ形」が (5) と (6)、「接続機能のテ形」の誤用が (7)
と (8) である。

「副詞的機能のテ形」

(3) 一般的に<*言ったら→言っ>て、若者は 12 歳から 18 歳までの人だ。

(4) 日本へ留学に行くか。卒業したら、勉強を続けるか。あるいは、仕事を探すか。ど
んな仕事がいいか。正直に<*言うと→言っ>て、私には分かりません。たぶん、その
日が来るとき、答えも出ます。

「述語形成機能のテ形」

- (5) 黒いカバーに金色で書いてある博論のテーマをじっと見つめました。気持ちは何でも入れ<*○→て>混ぜる鍋の調味料のようで、具体的な味は言えませんでした。
- (6) 「いつからバイトを始めようかな」と考え<*て→○>始める大学生も多いでしょう。「接続機能のテ形」
- (7) みんなは楽しかった。今日は新年の三日目だ。過去のことを忘れて、新年の計画を立てる。期末テストに<*当たって→当たり>、みんなに元気の出るセンテンスを贈る。やっても必ず幸せになるとは限らない。
- (8) 香炉峰、海拔三百五十四米。段階数は 1508 段である。この峰の頂上に、いくつかの寺があって、毎日山に<*登ると→登って>、寺の中の菩薩を拜む人が多いと言われる。

本研究では動詞の「テ形」の誤用実態を可能な限り把握することを目的としている。そのため、誤用例がわずか 6 例しかない「副詞的機能のテ形」を除いた「述語形成機能のテ形」と「接続機能のテ形」の誤用を考察対象とする¹。

その「述語形成機能のテ形」と「接続機能のテ形」の誤用はさらに下位分類できる。「述語形成機能のテ形」は図 3-1 のように 84 例認められるが、その内訳は不使用が 71 例 (84.52%)、過剰使用が 13 例 (15.48%) である。誤用数とその割合を示すと、図 3-3 のようになる。

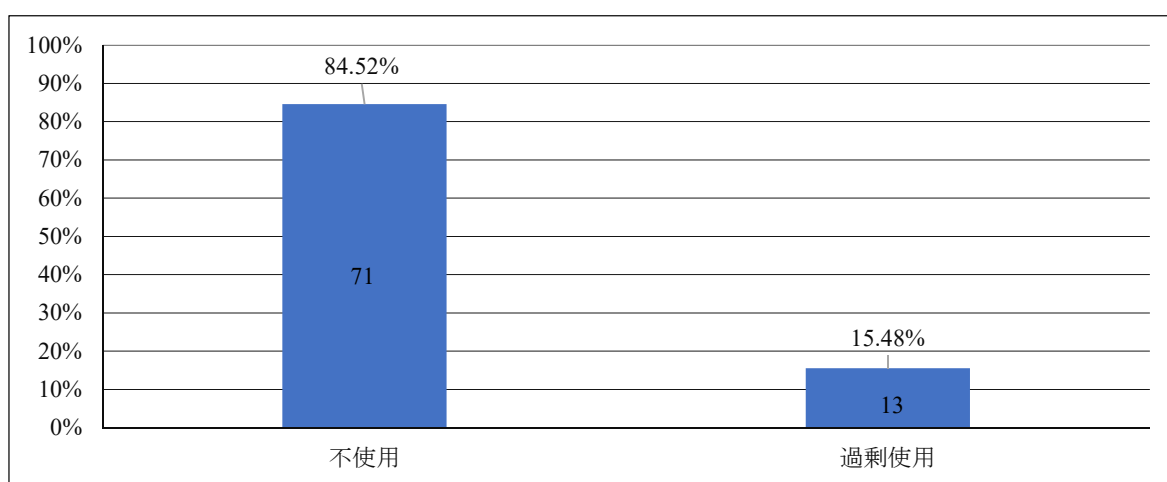


図 3-3 「述語形成機能のテ形」の誤用類型 (n=84)

¹ 2.2 節で見た動詞の「テ形」の機能別分類に従うと、「接続機能のテ形」、「述語形成機能のテ形」、「副詞的機能のテ形」のほかに、「文末機能のテ形」がある。この「文末機能のテ形」の誤用は『YUK 作文コーパス』に 1 例も現れていない。本研究で扱っている誤用例は『YUK 作文コーパス』のものに限られており、『YUK 作文コーパス』に誤用が認められないことが学習者に誤用が生じないことを保証するわけではない。

「述語形成機能のテ形」の「不使用」と「過剰使用」の例を 2 例ずつ挙げておく。「不使用」の例が (9) と (10) であり、「過剰使用」の例が (11) と (12) である。

不使用:

- (9) 時々、私たちは他人に冷遇されることもあります。いつでも、愛と夢を持って、この世界を信じ<*○→て>ください。
- (10) 私の心の中では、父親の大きな背中がいつでも思い浮かんでいます。月日は本当に矢のように過ぎ<*○→て>いきます。あっという間に、私もそろそろ 30 年代の人になります。

過剰使用:

- (11) 家事をする時、真面目に家中を掃除し、ほこりがあるところを繰り返しく<*て→○>腕いて拭き、きれいにしなければならない。
- (12) ほかのことのため、第二学期に、文芸部の活動に参加しく<*て→○>続けられなかった。したがって、クラブ活動は成功とは言えなかった。

この「述語形成機能のテ形」の誤用例については、第五章で議論する。

「接続機能のテ形」の誤用には、「不使用」、「過剰使用」、「混用」3 種類の誤用類型がすべて揃っている。「接続機能のテ形」858 例の内訳は、不使用が 25 例 (2.91%)、過剰使用が 301 例 (35.08%)、混用が 532 例 (62.01%) である。整理すると、図 3-4 のようになる。

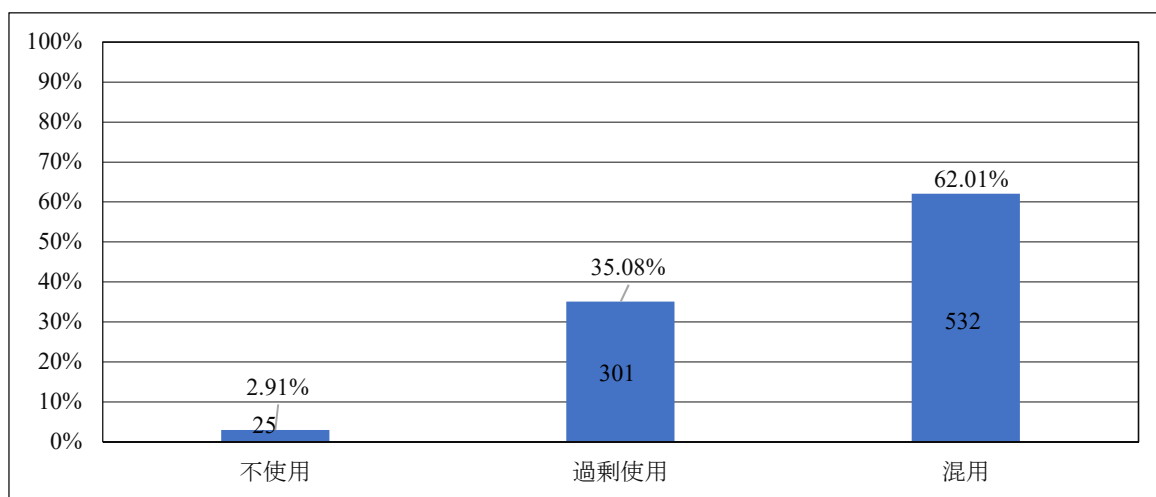


図 3-4 「接続機能のテ形」の誤用種類 (n=858)

「接続機能のテ形」の誤用例については、「不使用」と「過剰使用」、そして「混用」とに分けて見ておく。まず、「不使用」と「過剰使用」を見る。「不使用」の例が (13) と

(14)、「過剰使用」の例が(15)と(16)である。

不使用:

(13) 残念ですが、今ではこれらの大部分をもう捨て<*○→て>、音楽だけはずっと好きで、音楽についての仕事をする夢はずっと持ち続けています。

(14) 高校の時、テレビで大龍隆司さんを見て始め<*○→て>、日本人を真面目に考えました。大龍さんは卒業してから、日本から中国に環境考査に行つて来ました。

過剰使用:

(15) 「大逆事件」以来、日本の大部分の知識人たちは環境の抑圧を避け<*て→○>、精神的な悩みから脱するため、耽美主義に向かい、芸術に解脱と慰労を求めていた。

(16) ある若者は「他人の目を意識せずに好きなことをする」と<*思つて→思い>、ある若者は「公共の場では、やってはいけないことがある」と思っている²。

「不使用」と「過剰使用」の例は、「テ」と「中止形」に関わる誤用である。これについては第六章で議論する。

「接続機能のテ形」の中で最も誤用数が多い「混用」532例については、2.3節で見た接続助詞の分類に従い、「テ」と時間の接続助詞との混用が9例(1.69%)、「テ」と並列の接続助詞との混用が11例(2.07%)、「テ」と理由の接続助詞との混用が93例(17.48%)、「テ」と逆接の接続助詞との混用が96例(18.05%)、「テ」と条件の接続助詞との混用が323例(60.71%)に区分できる。「テ」と目的の接続助詞の混用は1例も現れていない。整理して示すと、図3-5のようになる。

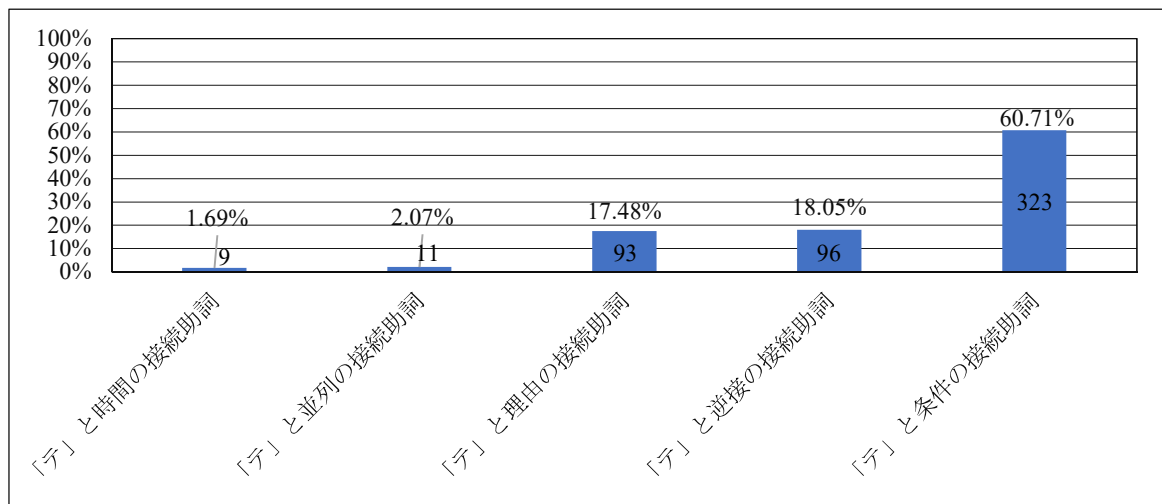


図 3-5 「接続機能のテ形」の混用実態 (n=532)

² 過剰使用と認められるものには、(15)のような避け<*て→○>と(16)のような<*思つて→思い>の2種類のパターンがある。この2種類の違いは活用によるものなので、本研究では同一に扱う。この点は「述語形成機能のテ形」の不使用と過剰使用、「接続機能のテ形」の不使用にも適用される。

「接続機能のテ形」の混用の例について、「テ」と時間の接続助詞との混用、「テ」と並列の接続助詞との混用、「テ」と理由の接続助詞との混用、「テ」と逆接の接続助詞との混用、「テ」と条件の接続助詞との混用をそれぞれ 2 例挙げておく。「テ」と時間の接続助詞の例が (17) と (18)、「テ」と並列の接続助詞の例が (19) と (20)、「テ」と理由の接続助詞の例が (21) と (22)、「テ」と逆接の接続助詞の例が (23) と (24)、「テ」と条件の接続助詞の例が (25) と (26) である。

「テ」と時間の接続助詞：

- (17) 私は外交学院の日本語学科の一年生です、出身は青海省です、ちょっと遠くて、電車で家へく*帰って→帰るとき、1 日かかりますよ。景色はとても美しいから、夏休みになったら、観光客が大勢で旅行に来ます。
- (18) 通行人の大多数がアンナノーへ関心を示した。しかし、アンナノーはきれいな服を脱いで、汚い服をく*着てから→着て、もう一度同じ場所で実験を行ったが、だれも彼女に問いかけなかった。

「テ」と並列の接続助詞：

- (19) キャッチコピーのポイントを明確にく*できて→できたり、婉曲にしたり、一つの単語を通してキャッチコピーに新たなニュアンスをつけることもできる。
- (20) 自分の習った知識を活用するのはいいなあとく*思っ→思ったし、それに、自分にとっても、基礎知識をもう一度復習できてよかった。

「テ」と理由の接続助詞：

- (21) 小学校と中学校で私の言語学の成績は一番劣りました。でも、日本語の学生にく*なっ→なったので、日本語の勉強を努力したいです。
- (22) 志賀直哉は西欧文学と自然主義末期の精神の影響をく*受けて→受けたため、初期の作品は頹廢的である。

「テ」と逆接の接続助詞：

- (23) 私は朝 8 時に長距離バスにく*乗って→乗ったのに、夜 8 時まだ途中だった。両親は忙しかったにも関わらず、電話で私を慰めてくれた。
- (24) 初級から上級へ進むにつれて、さまざまな文法項目の習得上の問題点がく*出てきて→出てくるが、その中で「もう」という時間副詞、特に「もう」と「まだ」の誤用に関する研究は重要な一環だと思われる。

「テ」と条件の接続助詞：

- (25) 時間の経つのが速い、あっという間に四年が経つ。大学生活をく*振り返って→振り返ると、楽しい時もあり、悲しい時もあり、本当に多彩な生活だったと思う。
- (26) 日本の最大の債権国としての中国は、日本の景気がよくく*なっ→なれば、国債の価値は上昇し、利益を上げることができる。

「混用」については、9 例しか認められない「テ」と時間の接続助詞との混用、11 例しか認められない「テ」と並列の接続助詞との混用は誤用数が少ないので考察の対象としない。それらを除いた「テ」と理由の接続助詞との混用、「テ」と逆接の接続助詞との混用、「テ」と条件の接続助詞との混用を考察対象とする。「テ」と理由の接続助詞との混用は第七章、「テ」と逆接の接続助詞との混用は第八章、「テ」と条件の接続助詞との混用は第九章で論じる。

3.4 まとめ

以上、動詞の「テ形」の誤用実態について、その全体像を論じた。第四章から第九章で考察する誤用を図で示すと、図 3-6 のようになる。

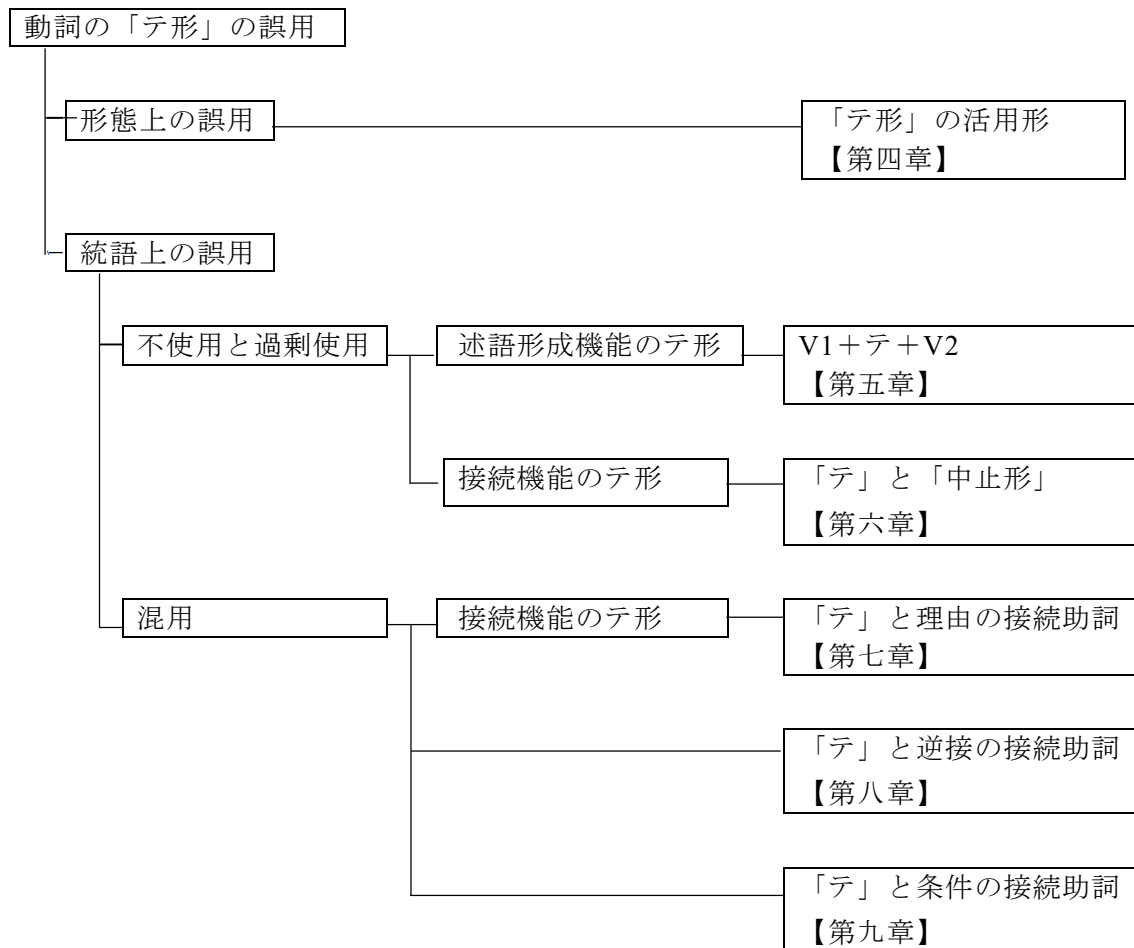


図 3-6 第四章から第九章で考察する動詞の「テ形」の誤用

第四章 「テ形」の活用形の誤用¹

4.1 はじめに

本章では、『YUK 作文コーパス』から抽出した動詞の「テ形」の活用形の誤用例を分析し、誤用のパターンと誤用の発生要因を明らかにする。『YUK 作文コーパス』には、動詞の「テ形」の活用形の誤用が第三章の図 3-1 で示したように 243 例あり、動詞の「テ形」の全誤用の約 2 割を占めている。その例として、(1)～(4)のようなものがある。

- (1) 学習に対しても、自分の習いたいことがまだある。大学の最初の二年間に、授業もたくさん<*あて→あつて>、活動も多くて、クラスの皆さんともずっと仲良くしていた。
- (2) 日本語の中に「萌え」という言葉がある。一方、中国語にもよく<*似つて→似て>いる「萌」がある。同じような感じがあるが、実際には違う由来、意味と用法がある。
- (3) 夏休みが<*きつて→きて>、家に帰りました。二年生の準備をしていました。ドラマを見たいです。日本語の勉強に興味を持っています。
- (4) ずっと一緒に授業に出て、生活<*しつて→して>、遊んでいます。

「テ形」の活用形に関する先行研究の中で学習者を対象としたものとしては、2.2 節で見た小森・白井 (1999)、初・玉岡・大和 (2012)、そのほかにも菅谷 (2014) などがある。しかし、これらの研究はすべてレベル別の「テ形」の学習方法や各動詞のレベル別誤答率に従い、習得難易度及び習得状況に焦点をあてたものである。

以下、4.2 節では、動詞の活用別における「テ形」の誤用分布を説明する。4.3 節では、一段動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向を考察する。4.4 節では、サ変動詞とカ変動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向を考察する。4.5 節では、五段動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向を考察する。そして、4.6 節では、本章で明らかになったことをまとめる。

4.2 動詞の活用別における「テ形」の誤用分布

本節では、動詞の活用パターンに従い「テ形」の誤用の全体像を概観しておく。第三章の図 3-1 で示した動詞の「テ形」の活用の誤用例 243 例は活用パターンにより、「五段動詞+テ」、「一段動詞+テ」、「サ変動詞+テ」、「カ変動詞+テ」の 4 種類に分けることができる。種類ごとの誤用例数と割合を整理して示すと、図 4-1 のようになる。

¹ 第四章は、廖 (2021) をもとに加筆修正したものである。

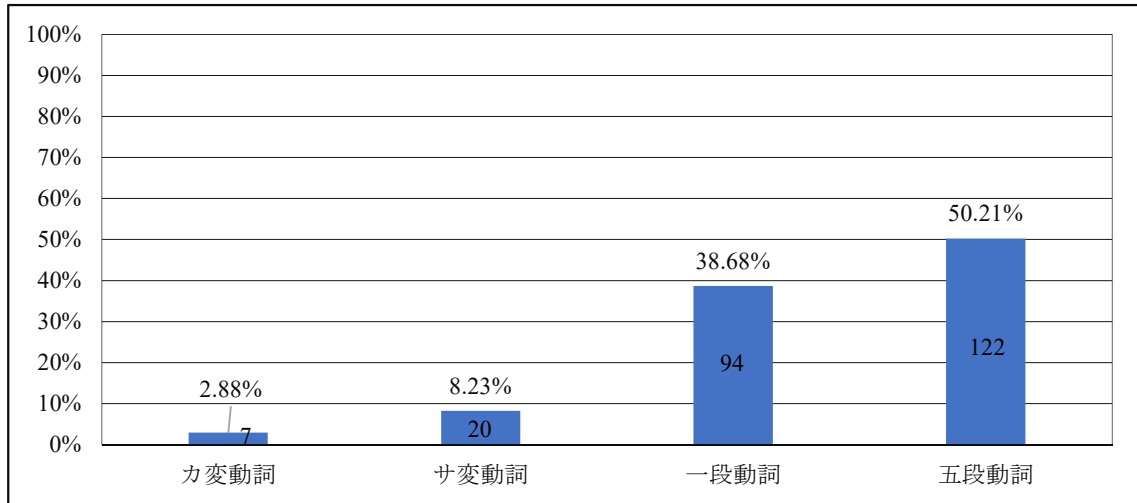


図 4-1 動詞の「テ形」の誤用分布 (n=243)

図 4-1 に示したように、「テ形」の誤用 243 例のうち、五段動詞の誤用例が 122 例 (50.21%)、一段動詞の誤用例が 94 例 (38.68%)、サ変動詞の誤用例が 20 例 (8.23%)、カ変動詞の誤用例が 7 例 (2.88%) 認められる。これらの数値から、誤用は五段動詞と一段動詞に集中していることが分かる。それらの誤用例を (5)～(8) に示しておく。

カ変動詞

(5) 月日の経つのは早いもので日本に<*きて→来て>、もう三週間たった。忙しくなったのでホームシックはなくなった。

サ変動詞

(6) 日本語も私の趣味です。日本語は発音がとても難しいです。でも、わたしは毎日努力<*して→して>日本語を勉強します。

一段動詞

(7) でも、今の正月は、私は自分の携帯、自分のパソコン、自分のテレビなどを<*見っ→見て>、それで、両親はとてもさびしいと思う。

五段動詞

(8) 時間が過ぎるのはとても速いです。私は大学に<*はいて→入って>、一学期間生活しました。大学の生活は忙しいですが、とても楽しいです。色んな人と出会えてよかったと思います。

学習者は、なぜ、活用形の誤用を起こしてしまうのであろうか。先行研究では、畑・山下(2010)に代表されるように、活用形の誤用は学習者が日本語の清音(無声音)と濁

音（有声音）を区別できないという母語干渉に原因があるとされることが多い²。この点は本章でも幾度か取り上げられるが、その他に誤用を起こす要因はないのであろうか。

「テ形」を作るとき、一段動詞は語尾の「る」を取って作る。サ変動詞は「する」を「し」、カ変動詞は「来る」を「き」に変えて作る。五段動詞は語尾によって「テ形」の作り方が異なる。以下、「テ形」の作り方が単純なものから複雑なもの、つまりは一段動詞、サ変動詞とカ変動詞、五段動詞の順に誤用を分析していく。

4.3 一段動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向

本節では、一段動詞の「テ形」の誤用 94 例を分析する。一段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」は、「着る」と「食べる」を例に示すと、表 4-1 のようになる。

表 4-1 一段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」

活用パターン	辞書形	マス形	テ形
一段動詞	着る	着ます	着て
	食べる	食べます	食べて

一段動詞の「テ形」の誤用 94 例を分類すると、「*って→て」が 79 例、「*で→て」が 10 例、「*して→て」が 5 例となる。これを整理したものが表 4-2 である。促音が現れる「*って→て」の誤用例が、一段動詞の誤用例全体の 8 割以上を占めていることが注目される。

表 4-2 一段動詞の誤用パターンとその数 (n=94)

活用	誤用パターンとその数		
	—って	—で	—して
—て	79 (84.04%)	10 (10.64%)	5 (5.32%)

(9)は、その「*って→て」の誤用例である。

(9) *似って→似て *受けって→受けて *重ねって→重ねて

(9)に促音「っ」が現れる理由として、2 つが考えられる。その 1 つは、日本語と中国

² そのほかにも、たとえば張（1989）が中国語を母語とする初級日本語学習者は日本語を勉強する際、清音と濁音の区別がつかないと指摘している。

語の音声上の違いが関与しているというものである。畑・山下（2010:29）は中国人学習者を対象としたカタカナ語のディクテーション調査の結果から得られた誤用分析の結果に従い、促音の現れについて、「特に、[k]、[p]、[t]、[ts]の前に促音『ッ』が挿入される誤用が多く見られた。これは、日本語には有聲・無声音の区別はあるが、中国語や韓国語のように有気・無気音の区別がないことに起因しているのであろう。呼気の出方によって語中の無声子音が有気音ととらえ、促音があるように聞こえていると考えられる」と述べている。同様の指摘は、促音の習得の難しさや促音の挿入の起こりやすさを論じた張（1989）、戸田（2007）、近藤（2012）にもある。また、木村・中岡（1990）は中国語話者及び英語話者による促音・撥音の生成について分析し、無声音の場合、閉鎖区間の伸びが必要以上となり、促音に聞こえてしまう傾向があることを指摘している。

他方で、もう 1 つの理由として、動詞の形を見ただけではそれが一段動詞なのか、それとも「る」で終わる五段動詞なのか容易に区別できないということが考えられるであろう。つまり、(9)に現れた「一って」は、一段動詞を「る」で終わる五段動詞として捉えたために引き起こされた誤用であるという可能性である。

次に、「*で→て」の例としては(10)がある。

(10) *出で→出て *切れで→切れて *変えで→変えて

(10)は、「て」と「で」の区別ができていない誤用である。これらの例でも学習者が日本語の有声音と無声音の対立を、自らの母語に存在する有気音と無気音の対立で捉えていることが関わっている。「*で→て」10 例のうち 9 例は終止形が`-eru`で終わる下一段動詞であり、`-iru`で終わる上一段動詞の誤用例はわずか 1 例（「いで→いて」）しかない。下一段動詞のほうが上一段動詞より、「*で→て」の無声音化が起きやすいようである。

他方、「*して→て」の誤用例としては(11)がある。

(11) *感じして→感じて *借りして→借りて *似して→似て *起して→起きて

(11)は、「連用形+して」という表現形式が用いられた誤用である。「勉強して」、「買い物して」などの表現がよく使われており、学習者の中に定着した「名詞+して」という表現形式がここでの誤用の要因に関与しているのであろう。

4.4 サ変動詞とカ変動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向

本節では、サ変動詞の「テ形」の誤用 20 例とカ変動詞の「テ形」の誤用 7 例を分析する。サ変動詞とカ変動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」は表 4-3 のようになる。

表 4-3 サ変動詞とカ変動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」

活用パターン	辞書形	マス形	テ形
サ変動詞	する	します	して
カ変動詞	来る	来ます	来て

サ変動詞とカ変動詞の「テ形」の誤用例は、表 4-4 のように、誤用例すべてが「*って→て」である。

表 4-4 サ変動詞とカ変動詞の誤用パターンとその数 (n=27)

活用	誤用パターン	例数
して	→って	20
来て	→って	7

(12) はサ変動詞の例であり、(13) がカ変動詞の例である。

(12) *しって→して (13) *来って→来て

サ変動詞とカ変動詞の促音化も、一段動詞に認められた促音化と同じ理由によって生じていると考えられる。

4.5 五段動詞の「テ形」の誤用実態と誤用傾向

4.5.1 五段動詞の「テ形」の誤用分布

本節では、五段動詞の「テ形」の誤用 122 例を見ていく。五段動詞は一段動詞、サ変動詞、カ変動詞とは違い、語尾が多様である。誤用数も、その語尾によって一様でない。その状況を表しているのが図 4-2 である。

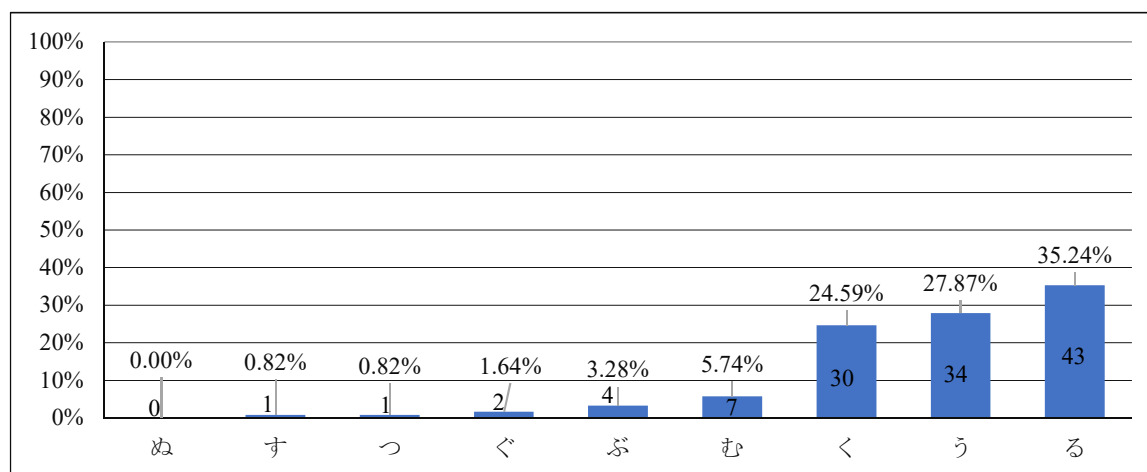


図 4-2 五段動詞の「テ形」の誤用分布 (n=122)

図 4-2 から分かるように、五段動詞の「テ形」の誤用数（誤用率）には、語尾によって大きな違いがある。語尾が「る」で終わる五段動詞の「テ形」の誤用例が 43 例（35.24%）で最も多く、全体の四割近くを占めている。次いで「う」の誤用例が 34 例（27.87%）、「く」の誤用例が 30 例（24.59%）と続く。そして、「む」の誤用例が 7 例（5.74%）、「ぶ」の誤用例が 4 例（3.28%）、「ぐ」の誤用例が 2 例（1.64%）、「つ」と「す」の誤用例がそれぞれ 1 例（0.82%）認められるが、この四者の誤用数をあわせても誤用全体の 10 分の 1 にも達していない。また、「ぬ」は 1 例も現れていない。

こうした状況から、五段動詞の「テ形」の誤用は「る」、「う」、「く」で終わる動詞に生じやすいと言える。本章では、誤用の頻度が高い「る」、「う」、「く」と複数回誤用が現れる「む」、「ぶ」を考察の対象とする。

4.5.2 語尾が「る」で終わる五段動詞

語尾が「る」で終わる五段動詞の「テ形」の誤用例は 43 例である。「る」で終わる五段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」は、「切る」を例にすると、表 4-5 のようになる。

表 4-5 語尾が「る」で終わる五段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」

活用パターン	辞書形	マス形	テ形
五段動詞	切る	切ります	切って

「る」で終わる五段動詞の「テ形」は、表 4-5 に示したように「辞書形」に基づけば、「る」を取って「っ」を付け「テ形」に接続する。一方、「マス形」に基づけば、「ます」を取って「り」を「っ」に変え、「テ形」に接続する。

語尾が「る」で終わる五段動詞の「テ形」の誤用例を見ると、その 43 例すべてが「*て→って」というパターンである。表 4-6 に示しておく。

表 4-6 語尾が「る」で終わる五段動詞の誤用パターンとその数（n=43）

活用	誤用パターン	例数
—って	—て	43

誤用例として、(14)がある。

(14) *広がて→広がって *入て→入って *分かて→分かって

小森・白井(1999)が指摘しているように、五段動詞と一段動詞における「テ形」の形成規則の難易度を比較すると、五段動詞より一段動詞のほうが低い。そのため、学習者は、語尾が「る」で終わる動詞が一段動詞なのか、それとも五段動詞なのかという判別ができないまま、五段動詞にも、より単純な一段動詞の「テ形」形成規則を使っている可能性が考えられる。

4.5.3 語尾が「う」で終わる五段動詞

語尾が「う」で終わる五段動詞の「テ形」の誤用例は 34 例である。「う」で終わる五段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」は、「買う」を例にすると、次のようになる。

表 4-7 語尾が「う」で終わる五段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」

活用パターン	辞書形	マス形	テ形
五段動詞	買う	買います	買って

「う」で終わる五段動詞の場合は、表 4-7 で示したように「辞書形」に基づけば、「テ形」に変えるとき「う」を取って「っ」を付ける。一方、「マス形」に基づけば、「ます」を取って「い」を「っ」に変え、「テ形」に接続する。

誤用のパターンとして、「*いて→って」が 19 例、「*て→って」が 8 例、「*いで→って」が 7 例である。表 4-8 に示しておく。

表 4-8 語尾が「う」で終わる五段動詞の誤用パターンとその数 (n=34)

活用	誤用パターン及び例数		
—って	—いて	—て	—いで
—って	19	8	7

「*いて→って」の誤用例には、(15) がある。

(15) *習いて→習って *争いて→争って *向かいて→向かって

「う」で終わる五段動詞には「テ形」を作るとき、「う」を「いて」に変える誤用が多数観察されるが、この「いて」という誤用例が多いという点は、長友(1997)とも一致する。

また、「*いで→って」の誤用例には、(16) がある。

(16) *払いで→払って *担いで→担って *笑いで→笑って

(16) の誤用は単に「マス形」の影響のみによって生じた誤用ではなく、有声音と無声音の混用という要因が絡み合っただけで生じた誤用であると言えよう。「う」で終わる五段動詞にはこのように「マス形」をもとにした誤用が 34 例のうち 26 例認められることになるが、他方で「辞書形」をもとにした「*て→って」の誤用例も認められる。(17) がそれである。

(17) *会て→会って *もらて→もらって *思て→思って

(17) のような誤用は、一段動詞の活用と混用されたために起きたものであると言える。

4.5.4 語尾が「く」で終わる五段動詞

語尾が「く」で終わる五段動詞の「テ形」の誤用例は 30 例である。「く」で終わる五段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」は、「書く」と「行く」を例にすると、表 4-9 のようになる。

表 4-9 語尾が「く」で終わる五段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」

活用パターン	辞書形	マス形	テ形
五段動詞	書く	書きます	書いて
	行く	行きます	行って

表 4-9 で示したように、「く」で終わる五段動詞の場合、「辞書形」に基づけば、「テ形」に変えるとき「く」を取って「い」を付ける。一方、「マス形」に基づけば、「ます」を取って「き」を「い」に変えて「テ形」に接続する。ただし、「行く」という動詞の「テ形」は例外的に「行って」となる。

「く」で終わる五段動詞の「テ形」の誤用例 30 例から、例外的な活用を持つ「行く」の誤用例を除いた 22 例を見る。「う」で終わる五段動詞には「っ」の不使用が圧倒的に多かったが、それとは異なり、「く」で終わる五段動詞には「っ」の過剰使用が 22 例のうちの 15 例を占めている。そのほかの 7 例は「*て→いて」である。表 4-10 に示しておく。

表 4-10 語尾が「く」で終わる五段動詞の誤用パターンとその数 (n=22)

活用	誤用パターンとその数	
—いて	—って	—て
	15	7

「*って→いて」の誤用例としては、(18)がある。

(18) *磨って→磨いて *咲って→咲いて *聞って→聞いて

「く」で終わる五段動詞には、(18)のように「っ」が過剰に使用される誤用が圧倒的に多い。「く」で終わる五段動詞にもかかわらず、イ音便ではなく促音便となるのは、使用頻度が高い「行く」の存在が関与していると考えられる。本来の動詞の活用形に似た別の動詞の活用形が本来の動詞の活用形よりも記憶上より際立っているとき、乗り換えが起きてしまうことを、森山(2000:76)が指摘している。「く」で終わる五段動詞の「テ形」に「いて」ではなく、促音便の「って」が現れる傾向があるのも、使用頻度が高い「行く」の例外的な活用に影響されたためと考えられる。

他方、「*て→いて」の誤用例としては、(19)がある。

(19) *磨て→磨いて *歩て→歩いて *着て→着いて

(19)は(17)のように、一段動詞と混用されたために起きた誤用と言える。

「行く」の誤用例は8例である。(20a)のように「行いて」という誤用が5例、(20b)のように「行きて」という誤用が3例認められる。

(20a) *行いて→行って (20b) *行きて→行って

「行く」は促音便化をする動詞として、「テ形」の中では例外的な活用をする。(20a)はその「行く」が「く」で終わる五段動詞と混同したため、促音便のかわりにイ音便が現れた誤用である³。他方、(20b)は「テ形」にも「マス形」の形成規則を使った誤用である。

4.5.5 語尾が「む」、「ぶ」で終わる五段動詞

語尾が「む」、「ぶ」で終わる五段動詞の「テ形」の誤用例は11例である。「む」、「ぶ」

³ 『YUK 作文コーパス』には、「ぐ」で終わる五段動詞の「テ形」の誤用例として、イ音便（*ぎて→いで）が現れる例が2例（*泳ぎて→泳いで」と*注ぎて→注いで）がある。

で終わる五段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」は、「読む」と「呼ぶ」を例にすると、表 4-11 のようになる。

表 4-11 語尾が「む」、「ぶ」で終わる五段動詞の「辞書形」と「マス形」と「テ形」

活用パターン	辞書形	マス形	テ形
五段動詞	読む	読みます	読んで
	呼ぶ	呼びます	呼んで

表 4-11 で示したように、「む」、「ぶ」で終わる五段動詞は「辞書形」に基づけば、「テ形」に変えるとき「む」、「ぶ」を取って「ん」を付け、「テ」を「で」に変える。一方、「マス形」に基づけば、「ます」を取って「み」、「び」を「ん」に変え、「で」に接続する。

表 4-12 語尾が「む」、「ぶ」で終わる五段動詞の誤用パターンとその数 (n=11)

活用	誤用パターン及び例数		
—んで	—んて	—び(み)て	—いんで
	5	3	3

「む」、「ぶ」で終わる五段動詞の誤用例 11 例の内訳は、表 4-12 のように「有声無声の混用」の 5 例、「マス形との混用」の 3 例と仮名を付加した 3 例である。

「有声無声の混用」の例としては、(21) がある。

(21) *進んで→進んで *読んで→読んで

「マス形との混用」の例としては、(22) のようなものがある。

(22) *遊びて→遊んで *読みで→読んで

仮名の付加例としては、(23) がある。

(23) *楽しいんで→楽しんで

(23) は、長母音と短母音の区別ができていないことによって生じた誤用である。この要因には、中国語の母音に長短の対立がないことが関与している。

4.6 まとめ

本章は、『YUK 作文コーパス』から抽出されたデータに基づいて、動詞の「テ形」の活用形の誤用を分析し、その傾向と発生要因を分析した。具体的な形式特徴をまとめたものが表 4-13⁴である（「/」は誤用が起こり得ない箇所を、空白は誤用が『YUK 作文コーパス』から見いだせていない箇所を、括弧内の数値は出現数を示す）。

本章で明らかになった点として、次の 2 点を特に指摘しておきたい。第一は、先行研究で述べられている「促音の挿入」（「*って→て」）に関わることである。「促音の挿入」は「行く」を除いた「く」で終わる五段動詞、一段動詞、カ変動詞、そしてサ変動詞に認められる。「—いて」あるいは「—て」が「テ形」として正用になるすべての活用パターンで、促音が現れている。その理由として、先行研究が述べる清音（無声音）と濁音（有声音）の対立を持つ日本語と、有気音と無気音の対立を持つ中国語の音声上の違いが考えられる。しかし、それだけですべてを説明することはできないであろう。使用頻度が高い「行く」の影響で「く」で終わる五段動詞の「テ形」にはイ音便ではなく、促音が現れた誤用例が認められた。ある活用パターンが他の活用パターンに影響を与えることも、十分に考えられることである。一段動詞の「促音の挿入」についても「る」で終わる五段動詞として捉えたために、促音を入れてしまったという可能性を考えてよい⁵。

第二は、五段動詞に最も多く現れている誤用パターンとして、「一段動詞との混用」と「マス形との混用」とが共存していることに関してである。ここには「テ形」の作り方、つまりは「テ形」を「辞書形」に基づき作ったのか、それとも「マス形」に基づき作ったのかという点に関わっている。「テ形」を作る際、「マス形」ではなく「辞書形」から作るほうが日本語学習の向上においてはるかに有益であることは幾度となく指摘されているが、それができていない学習者の存在を端的に示していることになる。

⁴ 表 4-13 には、「ぐ」で終わる五段動詞の誤用例についても含めてある。

⁵ 2.1 節で、中国国内の外国語大学において日本語を主専攻に学ぶ初級学習者を対象に、動詞の「テ形」の習得状況を論じた初・玉岡・大和（2012）を紹介した。研究の視点は習得と誤用と異なるが、初・玉岡・大和（2012）と本研究とでは結果が大きく異なる。初・玉岡・大和（2012）は、「テ形」の習得しやすさを順に「って系」、「して系」と「て系」、「いて・いで系」、「んで系」と述べている。しかし、『YUK 作文コーパス』の誤用数を見ると、「いて・いで系」と「んで系」は「って系」、「して系」と「て系」に比べ極めて少ない。『YUK 作文コーパス』のこの状況には、5.4.1 節においても同様の指摘をするが、五段動詞は一段動詞より変形規則が複雑なため、学習者の注意はそれだけ音便形に及び、1 つのかたまりとして覚えているといったことが考えられる。その際には、学習歴が関わっているのであろう。初・玉岡・大和（2012）が対象としたのは初級学習者であるが、『YUK 作文コーパス』の対象者は 1.2 節で述べたように学習歴には幅があり、学部生及び大学院生である。

表 4-13 動詞の誤用パターンとその数 (n=243)

活用パターン	語尾	活用	誤用パターンとその数								
			「促音の挿入」	「促音の挿入」 あるいは 「五段動詞と の混用」 (辞書形基準)	「一段動詞との 混用」 (辞書形基準)	「一くに行く の混用」	「マス形との 混用」 (マス形基準)	「有声無声の 混用」	「有声無声の 混用」と 「マス形との 混用」 (マス形基準)	「連用形 +して」	「母音の長短 の混用」
一段動詞	る	一て		一って (79)	/		/	一で (10)		一して (5)	
サ変動詞		一て	一って (20)		/		/				
カ変動詞		一て	一って (7)		/		/				
五段動詞		一って	/		一て (43)						
五段動詞	う	一って	/		一て (8)		一いて (19)		一いで (7)		
五段動詞	く	一いて			一て (7)	一って (15)	一きて (3)				
	行く	一って				一いて (5)					
	ぐ	一いで					一ぎて (2)				
五段動詞	む	一んで					一みで (2)	一んで (2)			一いんで (3)
	ぶ						一びで (1)	一んで (3)			
計：			27	79	58	20	27	15	7	5	3

第五章 「述語形成機能のテ形」の 不使用と過剰使用¹

5.1 はじめに

本章では、『YUK 作文コーパス』から抽出した「述語形成機能のテ形」の不使用と過剰使用を分析し、その誤用パターンと誤用の発生要因を明らかにする。『YUK 作文コーパス』には、次のような「述語形成機能のテ形」の誤用が認められる。

- (1) 美味しいかどうかわからないので、試しに食べ<*○→て>みます。
- (2) 実店舗でもネットスーパーでも、好きなものをまとめ<*○→て>買うと得です。
- (3) 土の中で冬眠している虫が太陽の光に誘われて、ゆっくりと自分の姿を見せ<*て
→○>始めた。

(1)と(2)は「述語形成機能のテ形」の不使用、(3)はその過剰使用の例である。つまり、(1)と(2)は「テ形」が正しい形式にもかかわらず「中止形」が使われ、(3)は「中止形」が正しい形式にもかかわらず「テ形」が使われている。

先行研究では、「テ形」が過剰に使用されやすいことがしばしば指摘されている。しかし、第3章の図3-3からは、「述語形成機能のテ形」の不使用の例は71例、過剰使用の例は13例と、不使用が過剰使用の6倍近くも多く現れ、「接続機能のテ形」と正反対の結果が得られている。「述語形成機能のテ形」の誤用は不使用と過剰使用をあわせても84例と少ないが、そこには特徴的な誤用が認められる。少数とは言え、誤用が起きたときにどのような誤用が起きるのかを知る手がかりを得ることができ、議論する価値がある。

他方で、「接続機能のテ形」の不使用とされている例がすべて不使用と判断できる例なのかどうかは、再検討の余地が残されている。(4)は、必ずしも「テ」の不使用と判断できる例ではない。語用論から、「お教えいただける」のような直し方も可能である。

- (4) 可能であれば具体的なやり方を教え<*○→て>いただけると、ありがたいと思います。

以下、5.2節では、「述語形成機能のテ形」の誤用分類と誤用実態を整理する。5.3節では、不使用の傾向を考察する。5.4節では、不使用の発生要因を考察する。5.5節では、

¹ 第五章は、廖（印刷中 a）をもとに加筆修正したものである。

過剰使用の傾向とその要因を考察する。そして、5.6 節では、本稿で明らかになったことをまとめる。

5.2 「述語形成機能のテ形」の誤用分類と誤用実態

5.2.1 「述語形成機能のテ形」の誤用分類

日本語の動詞の複合形態は、吉田（2012:104）に従うと、補助動詞と複合動詞に二分される。そして、その補助動詞は 2.2.1 節にも述べた影山（2021:146）に従えば、意味機能から、①文法的アスペクト（「ている」、「てくる」、「ていく」など）、②将来を見越した話者の態度（「てみる」、「てある」、「ておく」など）、③受益（「てやる」、「てくれる/くださる」、「てもらう/いただく」）の 3 種類に分けることができる。本研究では、①文法的アスペクトと②将来を見越した話者の態度はともにアスペクト性を備えているので、その 2 種類を文法的アスペクトと呼ぶ。複合動詞は、影山（1993:75）に従えば、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の 2 種類に分けることができる。ここまですべてを整理すると、(5) のようになる。

(5) 日本語の動詞の複合形態

補助動詞——文法的アスペクト:V+てくる、V+ていく、V+ているなど。

受益:V+てくれる、V+てあげる、V+てもらうなど。

複合動詞——語彙的複合動詞:洗い落とす、押し開く、殴り倒すなど。

統語的複合動詞:払い終える、喋り続けるなど。

文法的アスペクトの誤用例は(1)（以下、「文法的アスペクトにおけるテ」）、受益の誤用例は(4)（以下、「受益におけるテ」）、語彙的複合動詞の誤用例が(2)（以下、「V1 テ V2 におけるテ」）、そして統語的複合動詞の誤用例が(3)（以下、「統語的複合動詞におけるテ」）となる。

5.2.2 「述語形成機能のテ形」の誤用実態

『YUK 作文コーパス』には「述語形成機能のテ形」の誤用例が 84 例あり、不使用が 71 例、過剰使用が 13 例であることはすでに見た。不使用の内訳は、「文法的アスペクトにおけるテ」が 28 例、「受益におけるテ」が 24 例、「V1 テ V2 におけるテ」が 19 例である。そして、過剰使用は「統語的複合動詞におけるテ」の 13 例のみである。この誤用実態を表に示すと、表 5-1 のようになる。

表 5-1 「述語形成機能のテ形」における誤用パターンの分布 (n=84)

述語形成機能のテ形	不使用 (71)	過剰使用 (13)
「文法的アスペクトにおけるテ」	28	/
「受益におけるテ」	24	/
「V1 テ V2 におけるテ」	19	/
「統語的複合動詞におけるテ」	/	13

5.3 「述語形成機能のテ形」の不使用の傾向

本節では、「述語形成機能のテ形」の不使用の傾向を、それが最も認められるパターンを中心に考察する。「述語形成機能のテ形」の不使用は、「V1+テ+V2」の「テ」が使用されていないことを示す。その際、「文法的アスペクトにおけるテ」と「受益におけるテ」の「V1」は本動詞、「V2」は補助動詞である。それに対して、「V1 テ V2 におけるテ」の「V2」は補助動詞ではなく、「V1」とともに本動詞である。本研究では、「V1」は活用形、「V2」は意味関係に注目し考察する。ただし、「V2」については、それが不使用中に重要な役割を担う「文法的アスペクトにおけるテ」と「受益におけるテ」で考察の対象とする。

5.3.1 「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用

「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用は、表 5-1 に示した 28 例である。「V1」の本動詞は一段動詞が 24 例あるのに対し、五段動詞は 4 例しかない。「V2」の補助動詞を意味別に分類すると、移動動詞²が 16 例、動作動詞が 8 例、存在動詞が 4 例となる。具体的なパターンを表 5-2 に示しておく。

表 5-2 「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用パターンとその数 (n=28)

「V1」 (本動詞)	移動動詞 (16)		動作動詞 (8)		存在動詞 (4)
	くる (9)	いく (7)	みる (5)	しまう (3)	いる (4)
一段動詞 (24)	<*○→て> +くる (7)	<*○→て> +いく (6)	<*○→て> +みる (5)	<*○→て> +しまう (2)	<*○→て> +いる (4)
五段動詞 (4)	<*い→って> +くる (1) <*び→んで> +くる (1)	<*き→いて> +いく (1)		<*し→して> +しまう (1)	

² 吉田 (2012) では、「テ形」は、動詞の連用形に「テ」が接続した形であり、この「テ形」に後続する補助動詞は本来の意味により、「ある、いる」は存在動詞に、「いく、くる」は移動動詞に、「みる、しまう、おく」は動作動詞に属していると論じている。ただし、『YUK 作文コーパス』から、存在動詞の「ある」と動作動詞の「おく」の例は 1 例も見つかっていない。

「V1」は一段動詞、「V2」は移動動詞が最も多いことから想定できるように「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用は、表 5-2 が示す通り「一段動詞+移動動詞」のパターンが最も多い。(6)～(9)がその例である。

一段動詞+移動動詞 (くる/いく)

- (6) この曲を聞いたら、うれしいとか、悲しいとか、寂しいとか、さまざまな感情が出
<*○→て>きた。
- (7) 虫歯で歯が一本抜けてしまった。いつの間にか変なところから歯が生え<*○→て>きた。
- (8) 人はそもそも変わりたくない生き物です、一旦決まったら、諦めることなく、最後まで続け<*○→て>行きます。
- (9) こちらでの生活はすっかり慣れました。これからもここで生き<*○→て>行きます。

その他のパターンとしては「一段動詞+動作動詞」、「一段動詞+存在動詞」、「五段動詞+移動動詞」、「五段動詞+動作動詞」があるが、その例数は「一段動詞+移動動詞」の半数以下か数例にすぎない。その例として、(10)～(17)がある。

一段動詞+動作動詞 (みる/しまう)

- (10) 前に井上先生も同じような調査をなさっているので、その調査と今回の結果を比べ
<*○→て>みようと思っているんです。
- (11) 船に乗った時、陳さんがカバンから携帯電話を取ろうとしたところ、不注意で電話
が川に落ち<*○→て>しまった。玉城さんはちっともためらわない、自分の安全も
かまわず、川から携帯電話をすくいとってきた。

一段動詞+存在動詞 (いる)

- (12) 今の中国では人々は子供を宝にして育て<*○→て>いる。子供が可愛がられるよう
になったためお年寄りが無視されがちになったと言えるところもあるのではないか。
- (13) 半年の大学生活を思い出して、楽しかったと感じ<*○→て>います。

五段動詞+移動動詞 (くる/いく)

- (14) しかし駅に着くと、父さんは駅まで追<*い→って>来ました。
- (15) そのほか、図書館をもっと利用すればいいのに、という考えもよく頭に浮かび
<*○→浮かんで>きた。
- (16) 最後に、自分を磨いで成功に近づ<*き→いて>いきます。

五段動詞+動作動詞 (しまう)

- (17) ほど澄んだ川や海が、消えつつあるのが現状である。工場などによる?水は川や海
だけでなく、土壌までも汚し<*○→て>しまった。

吉田 (2012:103)は、補助動詞は「テ形」の後に付けて用いられ、もともとの動詞の意味が漂白され、アスペクトを表すようになったと述べている。また、吉川(1976:199)は、「てくる・ていく」を例に補助動詞の付属性を検討し、アスペクト的意味に移行するにしたがって、補助動詞は独立性を失いつつあり、本動詞との結びつきが強くなると述べている。(6)～(17)を見ると、(6)の「きた」は方向の概念を持ちつつ、意味の重点はその「きた」ではなく、本動詞の「出る」に置かれている。(7)～(17)も(6)と同様であり、意味の重点は本動詞にある。従って、これらの補助動詞はいずれも本動詞に付くことによって、アスペクトの意味を表しており、「文法的アスペクトにおけるテ」の誤用例はすべて「テ」の不使用と判断できる。

表 5-2 からは、また、「文法的アスペクトにおけるテ」は本動詞が一段動詞に、補助動詞が移動動詞に集中しているという特徴が見られる。

5.3.2 「受益におけるテ」の不使用

「受益におけるテ」の不使用は、表 5-1 のように 24 例ある。その際、「V1」の本動詞は一段動詞が 20 例、五段動詞が 4 例である。「V2」の補助動詞は「いただく」などの「丁寧体」(以下、尊敬語動詞)が 19 例、「もらう」などの「普通体」(以下、非尊敬語動詞)が 5 例である。この状況をまとめると、表 5-3 のようになる。

表 5-3 「受益におけるテ」の不使用パターンとその数 (n=24)

「V2」 (補助動詞)	尊敬語動詞 (19)	非尊敬語動詞 (5)
「V1」 (本動詞)		
一段動詞 (20)	<*○→て>+くださる (12) <*○→て>+いただく (5)	<*○→て>+もらう (3)
五段動詞 (4)	<*し→して>+いただく (2)	<*き→いて>+くれる (1) <*い→って>+もらう (1)

表 5-3 で示した通り、「受益におけるテ」において圧倒的に多いのは「一段動詞+尊敬語動詞」のパターンである。(18)～(21)がその例である。

一段動詞+尊敬語動詞 (くださる/いただく)

- (18) お荷物は全部を揃っていましたか。どうぞ確かめ<*○→て>ください。
- (19) 機械の使い方に分からないところがあれば、尋ね<*○→て>ください。
- (20) お手数おかけしますが、処理を進め<*○→て>頂ければ幸いです。
- (21) 地球環境と皆さんとのつながりをもっと身近に感じ<*○→て>頂ければと思います。

その他のパターンとしては「一段動詞＋非尊敬語動詞」、「五段動詞＋尊敬語動詞」、「五段動詞＋非尊敬語動詞」があるが、それぞれ 2 例か 3 例にすぎない。例として、(22)～(27)のようなものがある。

一段動詞＋非尊敬語動詞（もらう）

(22) 人類は、すでに神様や聖人に助け<*○→て>もらわず、飢餓やペストを予防する方法を知っているからである。しかも、常に成功を成し遂げている。

(23) 日本語教室で知り合った日本人の友達に日本語を教え<*○→て>もらった。

五段動詞＋尊敬語動詞（いただく）

(24) 商品をお持ちしましたので、家族にもぜひ試し<*○→て>いただきたいです。

(25) 紙のメモが記憶にはあっているとおもっているが、上手に住み分け、あるいは改善して、お互いの長所を伸ばし<*○→て>いただきたいと思います。

五段動詞＋非尊敬語動詞（くれる／もらう）

(26) 自分が正しいと思う道に進むガンブは、この疑問を解<*き→いて>くれました。

(27) いつも日本人の友達に日本語の歌を歌<*い→って>もらったり、ケーキを作ってもらったりする。

「受益におけるテ」の不使用は上で見たように「一段動詞＋尊敬語動詞」のパターンが最も多いが、「V2」に敬語動詞が現れる場合には議論が必要な点がある。それは、(4)で述べたことに関わる。敬語は相手によって言葉を使い分け、相手との親疎・上下・内外関係などの社会的ファクターによって敬意度が変わる。(18)は荷物について客に確認を求める場面、(19)は機械の使い方について客にアドバイスを求める場面、(20)と(21)は相手に依頼をする場面、(24)は商品やサービスを宣伝する場面、(25)は相手のことを思ってアドバイスを求める場面であり、いずれも敬意の高い表現が求められる場面である。このような場合、敬意度という点からは「テ形＋くださる／いただく」よりも「お＋中止形＋くださる／いただく」のほうが相応しい。しかし、「テ形＋くださる／いただく」に直されている。

『YUK 作文コーパス』には、このような誤用として「V1」の前に「お」が補われた例が 7 例ある³。そのうちの 6 例は、本動詞の「マス形」と「テ形」とで「マス」と「テ」の前の語形が異なる五段動詞である。他方、「受益におけるテ」の不使用の例は活用形を問わず、いずれもが「マス形」と「テ形」とで「マス」と「テ」の前の語形は同じである。前後の文脈よりも、こうした活用形の異同がこれらの例の直し方に、つまりは「テ形＋く

³ その例として、次のようなものがある。

- ・車に <*○→お> 乗りください、先に皆様をホテルへ送ります。
- ・車はもう用意しています。どうぞ駐車場へ<*○→お> 行きください。

ださる／いただく」に直すのか、それとも「お+中止形+くださる／いただく」に直すのかといった点に影響を与えていることになる。そうすると、尊敬語動詞が来る場合、前後の文脈からは「お」を補うほうが自然と考えられるようになり、必ずしも「テ」の不使用とは言えなくなってしまう。他方で、(22)と(23)、(26)と(27)のような非尊敬語動詞の場合には「お+中止形+くれる／もらう」という言い方はないので、「テ」の不使用と判断できる。

5.3.3 「V1 テ V2 におけるテ」の不使用

「V1 テ V2 におけるテ」の不使用は表 5-4 のように 19 例あるが、その 19 例すべてが 1 例ずつである。その際、「V1」には「文法的アスペクトにおけるテ」と「受益におけるテ」同様に一段動詞のほうが多く 14 例、五段動詞は 5 例である。

表 5-4 「V1 テ V2 におけるテ」の不使用パターンとその数 (n=19)

「V1」	誤用パターンとその数
一段動詞 (14)	混ぜ<*○→て>話す (1)、開け<*○→て>覗く (1)、うつ伏せ<*○→て>寝る (1) 開け<*○→て>見る (1)、まとめ<*○→て>買う (1)、煮<*○→て>食べる (1) 炒め<*○→て>食べる (1)、混ぜ<*○→て>食べる (1)、混ぜ<*○→て>座らせる (1) 分け<*○→て>食べる (1)、合わせ<*○→て>作る (1)、入れ<*○→て>渡す (1) 当て<*○→て>見る (1)、分け<*○→て>考える (1)
五段動詞 (5)	走<*り→って>帰る (1)、驚<*き→いて>喜ぶ (1)、焼<*き→いて>食べる (1)、 滑<*り→って>転ぶ (1)、買<*い→って>食べる (1)

例として、(28)～(35)に挙げておく⁴。

一段動詞

- (28) これは新年を過ぎた時日本人はいつも白い大根と人参をうまく切っていっしょに
<*混→混ぜて>食べる。
 (29) 後列の学生は机にうつ伏せ<*○→て>寝ていた。
 (30) この前、革で作られた財布を開け<○→て>見ると、カビが生えていました。

⁴ 表 5-4 に示した 19 例について、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用い「少納言」で検索してみたところ、(32)「走り帰る」と(33)「驚き喜ぶ」のみ認められた。このような場合、語彙的複合動詞と言ってよいかもしれないが、(32)と(33)では「テ」の不使用と判断されている。(32)「走る」は「帰る」の実現のされ方を表す付帯状態である。(33)は「喜ぶ」という心的状態に移行はするが、「驚く」という心的状態がまだ存続している状態を表している。前後の文脈から、(32)と(33)は単純に前後項動詞の意味の組み合わせとするよりも、「テ」の意味を加えたほうが相応しいとされ、「テ」の不使用と判断されたのであろう。

(31) ライベートと仕事は分け〇→て考えるべきです。

五段動詞

(32) 歌を歌って家に走*り→って帰って、母に伝えました。

(33) 私は無錫からバスに乗って、杭州湾大橋を通った。この橋はとても雄大、虹のような色があり、私は驚*き→いて喜んだ。

(34) 学校の廊下を歩いていたとき、雨で濡れた床で滑*り→って転んだ。

(35) 牛肉を好きな厚さで焼*き→いて食べることができる。

5.3.4 不使用の傾向のまとめ

以上、「述語形成機能のテ形」の不使用を見てきた。以下の4点が明らかになった。

- ① 「述語形成機能のテ形」の不使用における3種類のパターン（「文法的アスペクトにおけるテ」、「受益におけるテ」、「V1 テ V2 におけるテ」）の「V1」の本動詞には、五段動詞より一段動詞のほうが多く現れる⁵。
- ② 「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用においては、「一段動詞+移動動詞」のパターンが最も多く現れる。
- ③ 「受益におけるテ」の不使用においては、「V2」の補助動詞に尊敬語動詞が来る場合、「お+中止形+くださる/いただく」の「お」の不使用という可能性が高く、「テ」の不使用と判断するのは難しい。他方、非尊敬語動詞の誤用例は「テ」の不使用と判断できる。
- ④ 「V1 テ V2 におけるテ」においては、複合動詞として使える「走り帰る」と「驚き喜ぶ」が「テ」の不使用と判断されているのは、前後の文脈から「テ」の意味を加えたほうが相応しいと捉えられるからである。それら以外の例は「テ」の不使用と判断できる。

5.4 「述語形成機能のテ形」の不使用の発生要因

前節では「述語形成機能のテ形」の不使用の傾向を考察した。以下、「述語形成機能のテ形」の不使用において、五段動詞より一段動詞に「テ形」の不使用が多く表れる理由、「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用において「V2」に移動動詞が多く現れる理由、「受益におけるテ」において「V2」が尊敬語動詞のとき「テ」の不使用が生じる理由、「V1 テ V2 におけるテ」の不使用において「テ」の不使用が生じる理由について考察していく。

⁵ 表5-2から表5-4を見ると、「V1」は一段動詞が58例、五段動詞が13例を数え、五段動詞は一段動詞の約五分の一とはいえ、現れている。表5-3から一段動詞の17例、五段動詞の2例を除いても、その傾向に変わりはない。

5.4.1 五段動詞よりも一段動詞に「テ形」の不使用が多く現れる理由

「述語形成機能のテ形」に不使用が多く現れる理由は、どこにあるのであろうか。「テ形」形成規則の指導には、辞書形からの変換を教える方法と「マス形」からの変換を教える方法がある（菅谷 2014:60）。この規則はまた「中止形」にも当てはまる。「テ形」も「中止形」も、一段動詞の場合は音便化せず辞書形からは語尾の「る」、「マス形」からは「マス」を取るだけで簡単に作ることができる。それに対して、五段動詞は「テ形」に変形するには音便化を行わなければならない。五段動詞より一段動詞に「テ」の不使用が多く現れる理由には、この変形の複雑さの違いが関わっていると考えられる。五段動詞は一段動詞より変形規則が複雑なため、学習者の注意はそれだけ音便形に及ぶ。そのため、五段動詞の「テ形」は語ごとに、あるいはその「テ形」を語尾に応じて「って、いて、んで」のように1つのかたまりとして覚え、「テ形」の不使用は少ない。それに対して、一段動詞は五段動詞に比べ「テ形」への変形は簡単であり、その分だけ学習者の注意も希薄となり、「テ」の不使用が多く現れ、複合形態を作り出すことになる。

ただし、これで「連用節のテ」の不使用すべてが説明できるかと言えば、言えないであろう。「文法的アスペクトにおけるテ」、「受益におけるテ」、「V1 テ V2 におけるテ」における五段動詞の「不使用」の例を見ると、いずれも「V1」は「中止形」であり、形式の変形だけを見れば正しく行われている。「マス形」の変形規則の過剰般化で、「マス形」から「マス」を取った形式に後続動詞を繋げている可能性もある。

5.4.2 「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用において「V2」に移動動詞が多く現れる理由

「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用において「V2」に移動動詞が多く現れる理由は、何であろうか。「てくる／ていく」の補助動詞としての習得には、菅谷（2002:77）に従えば、本動詞との意味の繋がりが関わっていることになる。中国語には「趨向補語」（「方向補語」）として分類される「V（動詞）＋～来／～去」があり、それは日本語の補助動詞「てくる／ていく」と対応する場合がある。また、「てくる／ていく」のような項目について、許（2016:278）は母語から直訳したり意味を類推したりして習得することが多いと述べている。これに従えば、本動詞の意味が残っている補助動詞を中国語の「趨向補語」に対応させ、母語からの直訳で(6)のように「出来（出：出る、来：来る）」から「出くる」、(7)のように「长出来（长出：生える、来：来る）」から「生えくる」、(8)のように「继续下去（继续：続ける、下去：行く）」から「続けいく」、(9)のように「生活下去（生活：生きる、下去：行く）」から「生きいく」を作ってしまう可能性があるであろう。

5.4.3 「受益におけるテ」において「V2」が非尊敬語動詞のとき「テ」の不使用が生じる理由

「受益におけるテ」において「V2」が非尊敬語動詞のとき「テ」の不使用が生じている理由としても、5.4.1 節で述べたように「マス形」の変形規則の過剰般化によって、「マス形」から「ます」を取った形式で非尊敬語動詞を繋げていることが考えられる。その際には、「中止形+くださる/いただく」の誤用が「中止形くれる/もらう」の誤用に何か関与をしている可能性があるかもしれない。

5.4.4 「V1 テ V2 におけるテ」の不使用において「テ」の不使用が生じる理由

動詞の組み合わせに関して、形態的に日本語は活用を伴って行われるが、中国語は動詞を 2 つ並べるだけで成り立つ。また、意味的に日本語の語彙的複合動詞には、他動性調和などの制約があるが、中国語にそういった制約はない。そのため、日本語の複合動詞を作る際、「学習者」には中国語を直訳して日本語に存在しない複合動詞を作り出してしまふ誤用がしばしば見られる（郭・徳井 2010）。同様の指摘は高（2018:70）にもあり、「学習者」は中国語の影響で、日本語の語彙に存在しない複合動詞を造語する傾向が見られるとして、(36)と(37)のような例を挙げている⁶。

(36) 互相学习（互相:お互いに、学习:習う）→*習い合う

(37) 说出（说:言う、出:出る）→*言い出る

これに従えば、(30)の「*開け見る」は「打开看（打开:開ける、看:見る）」、(31)の「*分け考える」は「分开考虑（分开:分ける、考虑:考える）」、(34)の「*滑り転ぶ」は「滑倒（滑:滑る、倒:転ぶ）」から直訳された可能性が考えられることになる。しかし、表 5-4 すべての例がその見方で説明できるかは明らかではない。一連の動作を同時に進行している動作群として捉え、2 つの動詞の間に連続性を感じず、「テ」を使用していないのであろう。

5.4.5 要因のまとめ

以上、「述語形成機能のテ形」における不使用の要因を考察した。以下の 4 点が明らかになった。

- ① 「述語形成機能のテ」の不使用 3 種類のパターンにおいて、その「V1」に五段動詞より一段動詞のほうが多く現れる理由としては、「テ形」への変形の複雑さの違いが考

⁶ 高（2018:70）は、日本語に存在しない複合動詞が 14 例あったと書いているが、例は 2 例しか挙げられておらず、実態はよく分からない。

えられる。すなわち、五段動詞は一段動詞より活用が複雑なため、学習者の注意はその分だけ音便形に及ぶ。しかし、一段動詞は五段動詞に比べ「テ形」への変形は簡単であり、その分だけ学習者の注意も希薄となり、「テ形」の不使用が多く現れていると考えられる。その他にも、「マス形」の変形規則の過剰般化で、「マス形」から「ます」を取った形式に後続動詞を繋げている可能性が考えられる。

- ② 「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用において、「V2」の補助動詞に移動動詞が多く現れる理由としては、それに対応する中国語の「趨向補語」（「V（動詞）＋～来／～去」）からの直訳の可能性がある。
- ③ 「受益におけるテ」の不使用において、「V2」に非尊敬語動詞が現れる原因としては、上に述べた「マス形」の変形規則の過剰般化が関与し、「マス形」から「ます」を取った形式で非尊敬語動詞を繋げていることが考えられる。その際、「中止形＋くださる／いただく」の誤用が「中止形＋くれる／もらう」の誤用に何か関与している可能性もあるかもしれない。
- ④ 「V1 テ V2 におけるテ」が現れる理由としては、学習者独自の造語が関わっていると考えられるが、すべての例を直訳と言えるかは明らかではない。一連の動作を同時に進行している動作群として捉え、2つの動詞の間に連続性を感じず、「テ」を使用していないとは言えそうである。

5.5 「述語形成機能のテ形」の過剰使用

5.5.1 「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用の実態及び傾向

「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用について、前項動詞の意味と活用、後項動詞という点から考察する。前項動詞を見ると、その動詞はすべて継続動詞であり、その活用はサ変動詞が8例、一段動詞が3例、五段動詞が2例である。そして、後項動詞にはアスペクトを表す「始める」、「続ける」、「終わる」しか現れていないという特徴がある。「始める」が9例、「続ける」が3例、「終わる」が1例認められる。表にまとめると、表5-5のようになる。

表5-5に示すとおり、「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用にはパターンが5種類ある。そのパターンを誤用数が多い順に示すと、「サ変動詞＋始める」が7例、「サ変動詞＋続ける」が1例、「一段動詞＋始める」が2例、「一段動詞＋終わる」が1例、「五段動詞＋続ける」が2例となる。それらの例として、(38)～(44)がある。

表 5-5 「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用の誤用パターンとその数 (n=13)

		誤用パターンとその数		
活用		始める (9)	続ける (3)	終わる (1)
統語的 複合動 詞のテ形 (13)	サ変動詞 [継続動詞] (8)	<*て→○>+始める (7)	<*て→○>+続ける (1)	
	一段動詞 [継続動詞] (3)	<*て→○>+始める (2)		<*て→○>+終わる (1)
	五段動詞 [継続動詞] (2)		<*って→り>+続ける (2)	

サ変動詞+始める:

(38) 大学に入って、自由な時間が増えました。日本語を勉強し<*て→○>始めて、アニメを見るようになりました。

(39) 三人は一生懸命ボールを捜し<*て→○>始めました。みんなの体が泥まみれになりました。

サ変動詞+続ける:

(40) 仕事があれば、写真を撮るという簡単なことだけです。ほかのこのため、他のこのため、第二学期に、文芸部の活動に参加し<*て→○>続けられなかった。

一段動詞+始める:

(41) わたしは中学校から、アニメを見<*て→○>始めました。その時は人生の価値観を形成した時期なので、アニメは私の価値観に大きな影響がありました。

一段動詞+終わる:

(42) 「言葉」という表現そのものにこだわりすぎて、本当の意味がなかなか取れなかった。番組を見<*て→○>終わると、言葉、メールや論文の偽装を指していることが分かった。

五段動詞+続ける:

(43) 趣味として始めた楽器とか、歌とか、書道とか、いままでや<*って→り>続けてきたことは一つにして残ってない。

(44) ある日の帰り道で、低い声で、少女はそう言った。「じゃあ、僕と・・・」心の中でそう言った少年は黙<*って→り>続け、何か分かったよう。

5.5.2 「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用の要因

「統語的複合動詞におけるテ」は、後項動詞に「始める」が最も多く現れる。それはなぜであろうか。

前項動詞が表す事態と後項動詞の「始める」、「続ける」、「終わる」が表す事態の両者が個々の独立した場面として捉えられ、それを繋ぐために「テ」を用いていることが「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用に関わっているのではないだろうか。(41)の「アニメを見て始めました」を例にすると、「アニメを見る」という事態とその開始時とが別の場面として捉えられ、開始時に中心を置いた表現形式が「アニメを見て始めました」になっている、と。そして、「テ」の過剰使用がアスペクトを表す「始める」、「続ける」、「終わる」の中で「始める」に最も多いのは、開始時が継続時と終了時よりも変化を捉えやすいからと考えられる。開始時はしていない状態からしている状態への変化であり、変化のない状態が続く継続時、何らかの終了の区切りが必要な終了時に比べ、変化は捉えやすい。

また、「始める」の場合には、「テ」が過剰に使用される理由として、「～てはじめて」との類似性も考えられるかもしれない。

5.5.3 まとめ

以上、「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用を分析し、次の点を明らかにした。

- ① 前項動詞には、継続を表すサ変動詞が最も多く表れる。そして、後項動詞にはアスペクトを表す「始める」、「続ける」、「終わる」しか現れていないが、その中では「始める」が最も多い。
- ② 「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用の要因として、前項動詞が表す事態と後項動詞の「始める」、「続ける」、「終わる」が表す事態の両者が個々の独立した場面として捉えられていることが考えられる。その際、「始める」に「テ」の過剰使用が最も多く現れるのは、開始時が継続時、終了時に比べ変化を捉えやすいからであろう。また、「～てはじめて」という類似表現との混同も考えられる。

5.6 おわりに

『YUK 作文コーパス』を使用し、「述語形成機能のテ形」における不使用と過剰使用の傾向と要因を考察した。分析の結果をまとめると、以下のようになる。

「述語形成機能のテ形」の不使用には3種類のパターン（「文法的アスペクトにおけるテ」、「受益におけるテ」と「V1 テ V2 におけるテ」）があるが、いずれも「V1」には五段動詞より一段動詞のほうが現れやすい。その理由として、「テ形」への変形の複雑さの違いが考えられる。五段動詞は一段動詞より活用が複雑なため、学習者の注意はその分だけ

音便形に及ぶが、一段動詞は五段動詞に比べ「テ形」への変形は簡単であり、その分だけ学習者の注意も希薄となり、「テ形」の不使用が多く現れていると考えられる。ただし、これですべての誤用が説明できるとは言えそうになく、その他にも「マス形」の変形規則の過剰般化で、「マス形」から「ます」を取った形式に後続動詞を繋げている可能性が考えられる。

「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用において、「V2」に移動動詞が多く現れる理由には、それに対応する中国語の「趨向補語」（「V（動詞）＋～来／～去」）からの直訳の可能性が考えられる。「受益におけるテ」の不使用において、その「V2」に非尊敬語動詞が表れる原因としては、「マス形」の変形規則の過剰般化が関与し、「マス形」から「ます」を取った形式で非尊敬語動詞を繋げていることが考えられる。その際、「中止形＋くださる／いただく」の誤用が「中止形＋くれる／もらう」の誤用に何か関与している可能性もあるかもしれない。「V1 テ V2 におけるテ」が現れる理由としては、学習者独自の造語が考えられる。しかし、すべての例を直訳と言えるかは明らかではない。一連の動作を同時に進行している動作群として捉え、2つの動詞の間に連続性を感じず、「テ」を使用していないのであろう。

「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用には、前項動詞に継続を表すサ変動詞が最も多く表れるが、後項動詞に現れるのはアスペクトを表す「始める」、「続ける」、「終わる」に限られる。前項動詞が表す事態と後項動詞の「始める」、「続ける」、「終わる」が表す事態の両者が別の場面として捉えられていることが「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用に関わっている。その際、「始める」の例が最も多く現れるのは、開始時が継続時と終了時よりも変化を捉えやすいからであろう。また、「始める」には「～てはじめて」という類似表現との混同も考えられる。

第六章 「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用：「テ」と「中止形」¹

6.1 はじめに

本章では、『YUK 作文コーパス』から抽出した「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用として、「テ」と「中止形」を取り上げる。節と節を繋ぐ「テ形」と「中止形」は類似した機能を持っており、文体上の違いこそあれ、接続関係の相違はほとんどないものとして扱われることが多い。『YUK 作文コーパス』には、「接続機能のテ形」の誤用例として不使用と過剰使用があわせて 326 例あり、第三章の図 3-4 で示したように全誤用数の約 3 割を占めている。誤用例として、次のようなものがある。

- (1) 特別活動の設定は子供に楽しませながら教え<*て→○>、楽しく成長させる。それは中国小学校の特別活動の第二の特徴である。
- (2) 将来について、いろいろな可笑しい夢を追ったことがあります。残念ですが、今ではこれらの大部分をもう捨て<*○→て>、音楽だけはずっと好きで、音楽についての仕事をする夢はずっと持ち続けています。

(1) は「テ」の過剰使用、(2) は「テ」の不使用の例である²。いずれも前後件の繋がりが不自然なため、誤用と判断されている。

2.3.1 節で「テ」と「中止形」の使い分けについて論じた。そして、2.4.2 節で「テ」の不使用と過剰使用の先行研究として、田代 (1995)、中野 (1997)、秋口・鄭 (2002) と市川 (1997) を見た。その中で、田代 (1995)、中野 (1997) と秋口・鄭 (2002) は、日本語母語話者と日本語学習者における「テ」と「中止形」の使い分けを比較し、学習者が「テ」を過剰に使用している実態を明らかにしている。しかし、学習者によって生じた誤用にどのようなパターンがあるのか、発生要因は何であるのかといった点は検討されていない。そして、不使用と過剰使用を一緒に分析したものはない。

6.2 節では、「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用を考察する。6.3 節と 6.4 節では、過剰使用と不使用の実態を考察する。そして、6.5 節では議論したことをまとめる。

¹ 第六章は、廖 (2022b) をもとに加筆修正したものである。

² (1) と (2) の「教え」と「捨て」はいずれも「マス形」の語幹であるため、「中止形」に該当する。『YUK 作文コーパス』では、「テ」と「中止形」間の誤用について、<*○→て>は「テ」の不使用、<*て→○>は「テ」の過剰使用としてタグを付けている。本研究は『YUK 作文コーパス』を使用するため、『YUK 作文コーパス』の基準に従う。なお、過剰使用と認められるものには、教え<*て→○>以外にも、(5) <*思って→思い>のような表記が異なるパターンがある。両者の違いは活用によるものであり、本研究では同一に扱う。

6.2 「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用

「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用 326 例の内訳は、不使用が 25 例、過剰使用が 301 例である。文体（「だ・である体」のような常体と「です・ます体」のような敬体）を基準に分類すると、不使用 25 例の内訳は「です・ます体」が 9 例、「だ・である体」が 16 例、過剰使用 301 例の内訳は「です・ます体」が 39 例、「だ・である体」が 262 例となる。誤用数とその割合を示すと、図 6-1 のようになる。

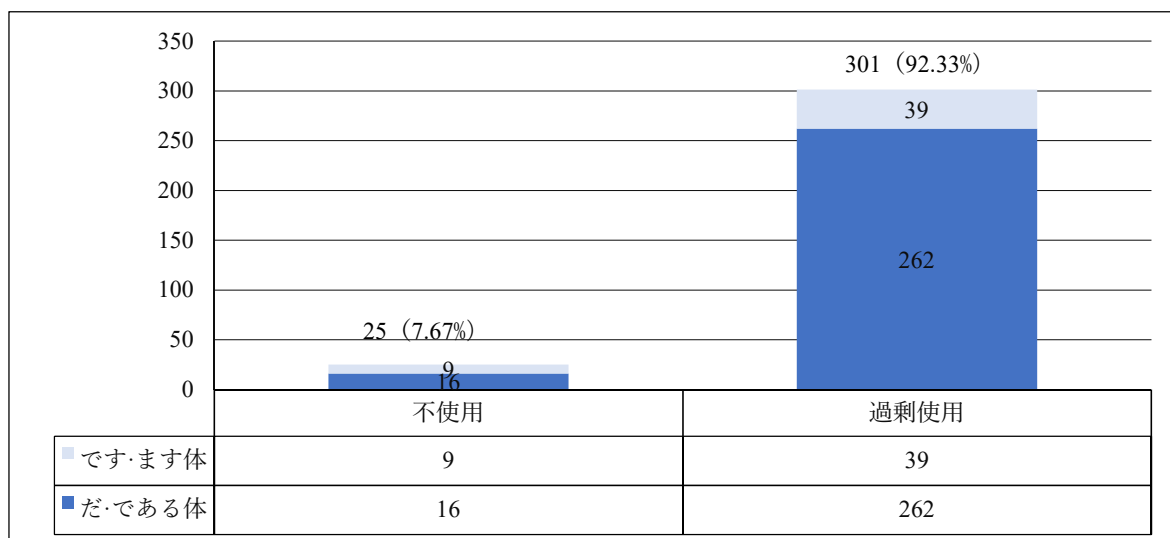


図 6-1 「接続機能のテ形」の不使用と過剰使用 (n=326)

不使用と過剰使用、それぞれの「です・ます体」と「だ・である体」の誤用例として、(3) ~ (6) がある。

不使用

「です・ます体」

(3) 将来について、いろいろな可笑しい夢を追ったことがあります。残念ですが、今ではこれらの大部分をもう捨て<*○→て>、音楽だけはずっと好きで、音楽についての仕事をする夢はずっと持ち続けています。

「だ・である体」

(4) 成功する確率は極めて低い。たとえ、それで製品が作れ<*○→て>、市場に売り出せるとしても、資源国が要求した利益を除いて何も残さない可能性も十分ある。

過剰使用

「です・ます体」

(5) 日本語を習得するだけを希望する学習者はあまり文法などの問題より、そんなに重要な問題点ではないと<*思って→思い>、このような受験者を選びました。

「だ・である体」

- (6) これらの人たちは、ただ草食男子の一面を見ただけで判断し< *て→○ >、全面的に彼らのことを理解しようともしていない。次に、筆者は草食男子がもたらすさまざまな影響を分析する。

「接続機能のテ形」の誤用は、図 6-1 が示すように過剰使用が不使用を大幅に上回っており、過剰使用が発生しやすいと言える。他方で、過剰使用であれ、不使用であれ、誤用例は「だ・である体」に集中している。不使用と過剰使用それぞれに特徴があるため、本章では不使用と過剰使用の両者を考察の対象とする。過剰使用、不使用の順に論じる。

6.3 過剰使用の誤用の詳細

6.3.1 過剰使用のスケッチ

学習者がどのような状況で「テ形」を過剰に使用しているのか、スケッチをしておく。

(7) ～ (11) を見よう。2.2.2 節で述べた日本語記述文法研究会 (2008) の意味分類に従い過剰使用の例を分類すると、(7) と (8) は並列、(9) は継起、(10) と (11) は対比の誤用例となる。本節と 6.4.1 節における誤用の認定基準は、2.3.1 節で述べた「テ」と「中止形」の使い分けに従う。

- (7) 土地ならではの駅弁が数多く生まれ、様々な分野に経営を多角化している駅弁屋が増え< *て→○ >、通信販売をする駅弁業者も多くなった。駅弁はただ駅で待っているものだけでなく、駅から飛び出す時代変わった。
- (8) 小鳥は楽しそうに歌を< *歌って→歌い >、小川も軽快に流れています。
- (9) それから、「～ないか？」と「～じゃないか？」二つの否定疑問文を確信の強さについて比べ< *て→○ >、それぞれの表現の相違点を明らかにし、否定疑問文の意味機能を詳しく分析する。
- (10) 人間の社会への貢献や責任と社会の人間への承認や満足という二つの方面があり、前者は「社会価値」と言われ< *て→○ >、後者は「自我価値」と呼ばれている。「社会価値」と言うことこそ人生の中での真の価値である。
- (11) そのため若者のマナーが人によって全く違う。ある若者は「他人の目を意識せずに好きなことをする」と< *思って→思い >、ある若者は「他人の目がある公共の場ではやってはいけないことがある」と思っている。

(7) は「駅弁屋が増えた」ことと「駅弁業者も多くなった」こととがそれぞれ独立した状況のもとで、「駅弁」という主題を説明している。生越 (1988) が言う「前件そのほかに後件」であり、「テ形」の使用は不自然である。(8) は「小鳥が歌を歌う」と「小川

も流れている」といった 2 つの事態が別々の場面で行われている。中俣（2015）が言う「分離提示」であり、「テ形」の使用は不自然である。(9)は「比べる」と「明らかにする」の間には時間差があり、生越（1988）が言う「前後に連続性なし」であるため、「テ形」の使用は不自然である。(10)は「前者」と「後者」で一体化されるテーマが欠けており、生越（1988）が言う「テーマによる一体性」ではない³（以下、「テーマによる一体性の欠如」）ため、「テ形」の使用は不自然である。(11)は前件の「思う」と後件の「思っている」が、生越（1988）、中俣（2015）が言う「形式的類似性」であり、「テ形」の使用は不自然である⁴。

以上の誤用実態から、「接続機能のテ形」の過剰使用の誤用パターンは以下の 3 種 5 類に分けることができる。

- ① 並列：「前件そのほかに後件」と「分離提示」
- ② 継起：「前後に連続性なし」
- ③ 対比：「テーマによる一体性の欠如」と「形式的類似性」

6.3.2 過剰使用の詳細

前節では、「接続機能のテ形」の過剰使用の誤用パターンをスケッチした。個々の誤用パターンの実態を示すと、表 6-2 のようになる。

表 6-2 「接続機能のテ形」の過剰使用における誤用パターン (n=301)

並列 191 (63.45%)		継起 91 (30.23%)	対比 19 (6.32%)	
前件そのほかに後件	分離提示	前後に連続性なし	テーマによる 一体性の欠如	形式的類似性
149 (49.51%)	42 (13.94%)	91 (30.23%)	11 (3.65%)	8 (2.67%)

表 6-2 に示したように「接続機能のテ形」の過剰使用 301 例の内、並列が 191 例で最も多く、過剰使用の 6 割以上を占めている。その並列の内訳は「前件そのほかに後件」が 149 例 (49.51%)、「分離提示」が 42 例 (13.94%) である。そして継起は「前後に連続性なし」が 91 例 (30.23%)、対比は「テーマによる一体性の欠如」が 11 例 (3.65%)、「形式的類似性」が 8 例 (2.67%) である。(7)は「前件そのほかに後件」、(8)は「分離提示」、(9)は「前後に連続性なし」、(10)は「テーマによる一体性の欠如」、(11)は

³ 生越（1988）によると、「主任が山口へ行って、係長が広島へ行った」という文が現れ得る条件として、文脈においてあるテーマが設定され、そのテーマ主導によって前件と後件の一体性が示される。

⁴ 中俣（2015）では、「対比」は「並列」の用法に含まれる。

「形式的類似性」の例であるが、その他の例として(12)～(21)がある。

「前件そのほかに後件」

- (12) 和語や漢語は日本人の生活習慣と風俗によって生まれく*て→○、固有の伝統を表現している。それを外来語で表現すると新鮮で、現代的な感じがする。
- (13) 支配して周辺諸地域に大きな影響をあたえた。日本も唐と通交して漢字・儒教・漢訳仏教などの諸文化を共有しく*て→○、唐の周辺諸国とともに東アジア文化圏を形成した。

「分離提示」

- (14) 空は気持ちよくく*晴れ渡って→晴れ渡り、庭には花がいっぱい咲いている。
- (15) 食事の後姉はリビングで本をく*読んで→読み、私は自分の部屋で映画を見た。

「前後に連続性なし」

- (16) メディアによって、世間に知れ渡るようになってからその意味がどんどん拡大しく*て→○、混乱するようになった。やせ型でメガネをかけ、おしゃれな若い男性という意味も付加された。
- (17) 1945年8月、第二次世界大戦が終結しく*て→○、日本各地は住宅・上水道・下水道・電力・ガスなどの様々な復興作業に追われることになる。

「テーマによる一体性の欠如」

- (18) 怖さを感じているが、がんばっていて生きたい。でも、もし自分が死を避けられないことと知ったら、生を諦めく*て→○、死を受け入れる。日本人はこれが運命だと思う。
- (19) 「萌」の新たな意味は、日本語の「萌え」の新しい意味からだ。日本語の「あるものに抱く感情の高ぶり」と少しく*違って→違い、中国語の方は「可愛い」の意味がよりふさわしいと思われる。今では、可愛いことを表すとき「かわいい」を使う。

「形式的類似性」

- (20) この陰陽思想は中国人に広く使われている。簡単に言えば、陰陽思想は奇数を陽としく*て→○、縁起のいい数字であり、偶数が陰として縁起の悪い数字であると考えられる。
- (21) おいしいものを食べた時、そのおいしさの感じを言葉にしようとする、普通、男性は「うまい」をく*使って→使い、女性は「おいしい」と使うようになる。

「中止形」は「テ形」より書き言葉的である(市川 1997:452)。そのため、「だ・である体」の文では「テ形」の使用は不自然となる。過剰使用の誤用例が「だ・である体」に集中しているのは、文体上の事情が大きく関わっている。

6.3.3 過剰使用における形式上の傾向

(1)、そして(3)～(21)は、いずれも「テ形」の後ろに読点の「、」が打たれている。過剰使用の例は表6-3のように、「テ形」の後ろに読点の「、」を打つかどうかによって異なる傾向が認められ、全体の9割以上に読点の「、」が打たれている(Pは前件を示し、Qは後件を示す)。

表6-3 「接続機能のテ形」の過剰使用における形式上の傾向 (n=301)

「P、Q」	「P Q」
272 (90.37%)	29 (9.63%)

表6-3に示した通り、過剰使用の場合、読点を使用した「P、Q」が272例(90.37%)認められ、読点を使用していない「P Q」は29例(9.63%)しか認められない。この数値の違いは注目に値する。「P、Q」の例は(1)、(3)～(21)に示したとおりである。「P Q」の例を(22)と(23)に挙げておく。

- (22) 民を臣下として従わせることができ、原始の宗教の信仰段階での日本の統治者も仏教が国家を鎮護し、幸福を< *祈って→祈り >災害から免れる、政敵を倒し、多くの現世利益を与えると考えた。
- (23) 私は日本に留学してバイトでスーパーのレジをしているとき、一つの出来事に< *出会って→出会い >初めて日本人の「恩」に関する敏感な心を感じた。

節と節の間に「テ形」のみならず、読点の「、」を使用するという傾向が見られる。中国語では接続を表す形式がなくても文と文をつなぐことができるため、「テ」の使用範囲が広がる可能性がある(田代1995)。また、中国語は、用言の活用形や接続助詞で節と節とのつながりを明確にさせる日本語とは異なり、文の切れるところは読点で示される。「テ形+読点」は、学習者が読点で節と節との間に区切りがあること、「テ形」でその両者を繋げること、それら2つを同時に表しているのであろう。

6.3.4 過剰使用のまとめ

「接続機能のテ形」の過剰使用について、次のようなことが言える。

- ① 「だ・である体」が使用される「テ形」は、文体性から節と節の間の繋がりを適切に捉えていないと見なさせるため、誤用とされる。
- ② その際、誤用には並列(「前件そのほかに後件」と「分離提示」)、継起(「前後に連続性なし」)、対比(「テーマによる一体性の欠如」と「形式的類似性」)があるが、誤用

例全体の6割以上は並列が占める。

- ③ 学習者は「テ形+読点」を使用することで、「読点」で節と節との間に区切りがあること、「テ形」でその両者に繋がりがあることを表している。

6.4 不使用の誤用の詳細

6.4.1 不使用のスケッチ

「接続機能のテ形」の不使用 25 例は学習者が使った「中止形」ではなく、「テ形」のほうが自然なため、誤用とされた例である。学習者がどのような状況の下で「テ形」を使わないのか、スケッチしておく。(24)～(27)を見よう。

- (24) シェア自転車は 2014 年からだったが、三年も経たずに、すっかり国民の日常生活に入り込んでき<*○→て>、総理大臣にも褒められた創意産業になりました。
- (25) 兵庫県国際交流会館の先生たちが去年の 10 月から、今日のために、いろいろ準備してくれ<*○→て>、すごく感動した。
- (26) 色彩語は客観的な世界を表すことを通じ<*○→て>、作者の感情を反映し、読者の感想や連想を呼び起こすことができる。
- (27) まずは先行研究を調べまとめ、次に、青空文庫などのネットワークとコーパスを利用し<*○→て>、例文を探し、最後に、2つの可能表現の種類、意味を比べることにより、その内面的な理由を探り出す。

(24) は、「来る」が「連用形が一拍になるもの」であるため、誤用となる。(25) は、「色々準備してくれる」が「感動した」理由として認められ、前後が「因果関係あり」であるため、誤用とされる。(26) の「を通じて」は「機能語的表現」であり、誤用と認められる。(27) の「まず」、「次に」と「最後に」の3つの部分はそれぞれ1つのまとまりと見なすことができる。「テ形」節は「ひとまとまり」を作る働きがある(三原 2011)。また、(27) のような硬い文では「中止形」で区切りをつけることが望ましいが、一方の接続形式のみに偏ると、前後関係がうまく繋がらない(吉永 2012)ため、誤用となる。

「接続機能のテ形」の不使用については、(24) のような「連用形が一拍になるもの」、(25) のような「因果関係あり」、(26) のような「機能語的表現」、(27) のようなまとまりの捉え方(以下、「まとまりの捉え方」)が誤用とされる要因である。そのうち、「連用形が一拍になるもの」と「機能語的表現」は前件の述語に関するものであり、他方、「まとまりの捉え方」と「因果関係あり」は意味用法に関するものである。「テ形」が必須となるのは「連用形が一拍になるもの」のみであり、ほかの「機能語的表現」、「まとまりの捉え方」と「因果関係あり」は「テ形」を必要とされていない場合がある。

6.4.2 不使用の詳細

「接続機能のテ形」の不使用 25 例の誤用パターンは「連用形が一拍になるもの」、「因果関係あり」、「機能語的表現」、「まとまりの捉え方」という 4 種類に分けることができる。その詳細を示すと、表 6-4 のようになる。

表 6-4 「接続機能のテ形」における誤用のパターン (n=25)

まとまりの捉え方	機能語的表現	連用形が一拍になるもの	因果関係あり
13 (52%)	5 (20%)	4 (16%)	3 (12%)

表 6-4 に示したように「まとまりの捉え方」が 13 例 (52%)、「機能語的表現」が 5 例 (20%)、「連用形が一拍になるもの」が 4 例 (16%)、「因果関係あり」が 3 例 (12%) 認められる。(24) ~ (27) がその例であるが、その他の例として (28) ~ (35) がある。

「まとまりの捉え方」

- (28) 中国社会を長年支配してきたことが挙げられるだろう。民主主義の影響を受け~~く*~~○→て、男尊女卑に反対し、男女平等を主張する人もますます多くなりつつある。
- (29) 相応しい人々を選別し、招聘される形で後企業に派遣される労働者である。会社が専門的な部門を設立し~~く*~~○→て、派遣社員に対する具体的な人手資源管理をする必要がなく、従業員の招聘、個人の見上調書の管理をしなければいけない。

「機能語的表現」

- (30) しかし、社会の発展につれ~~く*~~○→て、これからどうなるかは、私たちも注意しなければならないだろう。
- (31) 色彩語は両国の文化交流を通じ~~く*~~○→て、影響し合い、ともに発展してきたものだろう。

「連用形が一拍になるもの」

- (32) 彼らのうち、最初にあちら側にやってき~~く*~~○→て、そこを「1Q84」の世界と名付けたのは青豆の方である。
- (33) チャーハンは米、野菜や肉などを素材とし~~く*~~○→て、同じ大皿に盛り付けます。

「因果関係あり」

- (34) 日本語の授受動詞は中国語に違って特徴が多い、用法の制限もたくさんある。もし日本語の授受動詞を全部書けば、内容が多すぎ~~く*~~○→て、問題点も明らかに書くことができない。
- (35) はじめてそんなに多くの日本人と交流するので最初は緊張し~~く*~~○→てどきどき

しました。しかし、彼女たちにあつたら、心配は余計になりました。

「まとまりの捉え方」が不使用全体の過半数を超えているが、それらは(28)と(29)のように「だ・である体」である。1文の中に「テ形」と「中止形」が共存している例として、新川(1990)では「中止形」と「テ形」をそれぞれ「第一なかどめ」と「第二なかどめ」と呼び、「第一なかどめ+第二なかどめ+定形動詞」、「第二なかどめ+第一なかどめ+定形動詞」、「第二なかどめ+第一なかどめ+第二なかどめ+定形動詞」というパターンを挙げている。三原(2015)は「連用形」を続けて用いるより、随所に「テ形」を挿入すると、文章の安定度が向上すると指摘し、「連用形+テ形+定形動詞」、「テ形+連用形+定形動詞」、「テ形+連用形+テ形+定形動詞」、「連用形+テ形+連用形+定形動詞」、「連用形+連用形+テ形+定形動詞」という5種類のパターンを挙げている。学習者は硬い文章を書く際、「中止形」で区切りをつけるという意識を持っていたとしても、連用形と「テ形」を交える状況までは判断できず、「テ形」が使えていないと考えられる。

6.4.3 不使用における形式上の傾向

不使用においても過剰使用と同様、読点の「、」を打つかどうかによって異なる傾向が見られる。表6-5のように不使用の25例のうち、読点の「、」を打ったのは21例あるが、「、」を打たなかったのは4例しかない。

表 6-5 「接続機能のテ形」の不使用における形式上の傾向 (n=25)

「P、Q」	「P Q」
21 (84%)	4 (16%)

表6-5に示したように、不使用は「P、Q」が21例(84%)、「P Q」が4例(16%)認められる。「P、Q」の例は、(2)と(24)～(34)に示した。「P Q」の例として、(35)のほか(36)と(37)を挙げておく。

- (36) 自然、社会文化、美意識、気持ちなどを生き生きと表現することができる。多くの場合、作家は色彩語を使用し<*○→て>自分の気持ちを表示する。本稿は、文学作品の角度から、中日両言語における色彩語「白」のイメージを論述する。
- (37) 本論文は在日留学生のアルバイトに着目し<*○→て>調査を行い、市場の現状と今後について分析した。

過剰使用と同様に、学習者には、節と節の間に「、」を使用するという傾向が見られる。

区切りが感じられ、「中止形」を使用することが窺える⁵。

6.4.4 不使用のまとめ

「接続機能のテ形」の不使用については、次のことが言える。

- ① 文の接続を「テ形」に頼っている傾向があるとこれまでしばしば指摘されているが、「テ形」の不使用も確実に存在している。
- ② 「接続機能のテ形」の不使用の誤用パターンについては「まとまりの捉え方」、「因果関係あり」のような意味用法に関する誤用もあれば、「機能語的表現」、「連用形が一拍になるもの」のような前件の述語のみに関する誤用もある。
- ③ 「まとまりの捉え方」はいずれも「だ・である体」であり、誤用例全体の過半数を超えている。また、形式上過剰使用と同様に、前後件の間に読点の「、」を打つという傾向も見られる。これらは学習者が「だ・である体」の文章を書く際、「中止形」で区切りをつけるという意識を持っているからと言える。
- ④ 学習者は連用形と「テ形」を交える状況が判断できず、「テ形」が使えていないと考えられる。

6.5 おわりに

『YUK 作文コーパス』から抽出したデータをもとに、「接続機能のテ形」の過剰使用及び不使用について考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

「接続機能のテ形」については、過剰使用が不使用の約 12 倍現れているように過剰使用がはるかに起こりやすい。他方で、文体上の傾向として「だ・である体」に集中しているという共通特徴がある。

過剰使用の誤用パターンとしては、並列（「前件そのほかに後件」と「分離提示」）、継起（「前後に連続性なし」）と対比（「テーマによる一体性の欠如」と「形式的類似性」）があるが、その 6 割以上は並列が占める。

不使用の誤用パターンとしては、「機能語的表現」、「連用形が一拍になるもの」のような前件の述語に関わるものもあれば、「まとまりの捉え方」、「因果関係あり」のような意味用法に関わるものもある。「まとまりの捉え方」による不使用が誤用例の過半数を占める。

⁵ 戦（2002:73）は、日本語の文や語句は用言や助動詞の語形変化によって切れるところを示すことが可能であり、「連用形」が用いられたときは読点のような区切り符号の助けがなくても、誤解される心配がないと指摘している。他方で、小学館辞典編集部（2007）は、語句の切れ目を明瞭にするために、「読点」が用いられる場合として、連用形や体言などで文を一時中止することを指摘し、その例として、「右手を上げ、同時に左脚を上げる」を挙げている。これは、母語話者が「中止形」の後ろに「読点」を打つことを裏付けている。ただし、学習者に見られる「中止形」の後ろに「読点」を打つという傾向が、日本語のルールに従っているのか、それとも中国語からの影響なのかについては、今のところはっきりしない。

過剰使用と不使用には、形式上の傾向として、読点の「、」を使用した例が多くを占める。この読点は、学習者が読点の前後に区切りがあるという意識を持っていることを示している。その際、過剰使用は「テ形＋読点」を使用することで、学習者は「読点」で節と節との間に区切りがあることに加え、「テ形」でその節と節とが繋がっていることを表している。不使用は、学習者が「中止形」と「テ形」を交える適切な状況を判断できず、「テ形」が使えていない。

第七章 「接続機能のテ形」の混用： 「テ」と理由の接続助詞¹

7.1 はじめに

本章では、『YUK 作文コーパス』から抽出した「接続機能のテ形」の混用である「テ」と理由の接続助詞との混用を分析し、その傾向と要因を明らかにする。2.3.2 節で述べたように理由を表す「テ」には統語制約²が多く、誤用が生じやすいことがしばしば指摘されている（吉田 1994、滝井 1998 など）。第三章の図 3-5 に示したように、『YUK 作文コーパス』を見ても、「テ」と理由の接続助詞との混用が混用全体の約 2 割を占めている³。

その『YUK 作文コーパス』には、「テ」と他の理由の接続助詞との間に次のような混用の誤用が認められる。

- (1) 私は必ず中国でない韓国で大学に通っても専攻は日本語と考えていく*て→いたので
あえて決定をした。
- (2) 最後に、一人で寂しさをあまり感じなくすることだ。十何年間も一緒に生活してきた両親と*離れて→離れるので、最初は一人で寂しいのは当然のことだ。しかし、孤独に敏感である私にとっては大変だった。
- (3) しかし、最初の面接試験で失敗してしまいました。自分はきれいではないばかりに、自分はきれいではないばかりにその結果になってしまったと*思うから→思っ
て、残念でしかたがありませんでした。
- (4) 先週、バイトのとき、仕事中の日本人が*サボったので→サボって店長に注意されたのを始めてみた。

(1)は文末に意志動詞が使用されているため、誤用と判断されている。(2)と(3)は統語制約を守っているが、因果関係の度合いの違いから誤用と判断されている⁴。(4)は前後件の中に因果関係が認められないので、誤用と判断されている。これらの例は、誤用発生が単なる統語制約のみならず、他にも要因があることを示している。

これまでの先行研究は 2.3.2 節と 2.4.3.1 節で述べたように、主として、「テ」と他の理由の接続助詞との使い分けに注目しており、学習者による誤用例を対象としたものはわ

¹ 第七章は、廖（2022a）をもとに加筆修正したものである。

² 本稿においての統語制約とは、モダリティ及び動詞の意志性制約のことを指す。統語制約についての詳細は 2.3.2 節で述べた鈴木（1976）、于（1998）を参照されたい。

³ 吉田（1995）は「テ」と類似の機能を持つ接続助詞との混用の誤用例を分析し、「テ」と「ノデ」などの原因・理由を表す接続助詞との混用が混用全体の第 2 位を占めると指摘している。

⁴ 因果関係の度合いについての詳細は、吉田（1994）、滝井（1998）を参照されたい。

ずかしかない。「テ」と理由の接続助詞との使い分けを論じたものとしては、鈴木（1976）、滝井（1998）と于（1998）がある。鈴木（1976）、滝井（1998）は統語的使用条件に焦点を当て「テ」「ノデ」「カラ」の異同を論じ、于（1998）は「テ」、「ノデ」、「カラ」、「タメニ」の統語的及び意味関係の相違点を考察している。学習者による誤用を論じたものとしては台湾人日本語学習者を対象にした吉田（1994）があり、日本語教育への応用という立場から、理由の「テ」の用法の誤用を論じている。他方で、どのような誤用傾向が見られるのか、その誤用が生じる要因が何であるのかについて、これまで検討されていない。

7.2 節では、「テ」と理由の接続助詞における混用の実態について述べる。7.3 節では、先行研究に従い理由を表す「テ」の成立条件を述べる。7.4 節では、誤用の詳細を考察する。7.5 節では、学習者の使い方が日本語母語話者の使い方となぜ異なるのか、その要因を考察する。そして、7.6 節では本章で明らかになったことをまとめる。

7.2 「テ」と他の理由の接続助詞における混用の実態

「テ」と他の理由の接続助詞の混用の誤用例数は第三章の図 3-5 で示した通り、93 例ある。その内訳は、「*テ→Y」については「*テ→ノデ、カラ、タメニ」が 61 例、「*X→テ」については「*ノデ、カラ、タメニ→テ」が 32 例である。誤用の数とその割合を表すと、図 7-1 のようになる。

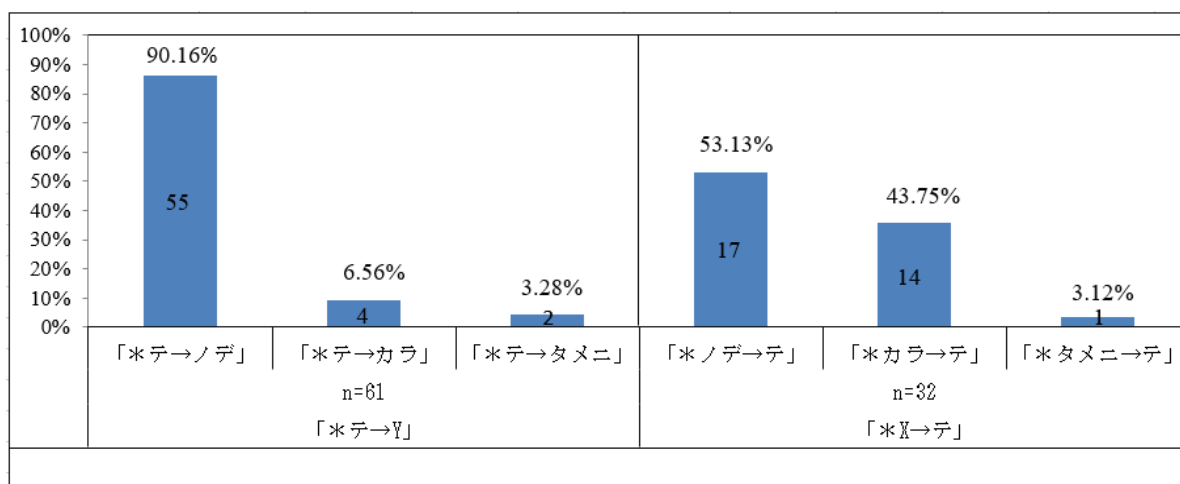


図 7-1 「テ」と理由の接続助詞における混用実態 (n=93)

図 7-1 を見ると、「*テ→ノデ、カラ、タメニ」の混用は「*テ→ノデ」が 55 例（90.16%）で最も多く、「*ノデ、カラ、タメニ→テ」の混用は「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」がほぼ同数で、それぞれ 17 例（53.13%）と 14 例（43.75%）である。学習者は、「*テ→Y」については「*テ→ノデ」、「*X→テ」については「*ノデ→テ」と

「*カラ→テ」の誤用を生じさせやすいと言える。「*テ→ノデ、カラ、タメニ」と「*ノデ、カラ、タメニ→テ」のそれぞれの誤用例として、(5)～(10)がある。

「*テ→ノデ、カラ、タメニ」

(5) 海辺で成長したので、海のこと大好きです。毎日海を見ることがく*できまして→できたので、いつも気持ちがよかったです。だから、楽観的な女の子です。

(6) 「食べた」「授業を受けた」「みんな優しくく*してくれて→してくれているから、心配しないで」などと返事した。

(7) 試験がく*あって→あるために、遊ぶ時間が取れなくなっているだろう。

「*ノデ、カラ、タメニ→テ」

(8) 国人にとって、日本はなじんだ国であると同時に不慣れな国であります。日本の歴史には中国を侵略したことがく*ありますので→あって、中国は大きな傷を負った。

(9) そして、日本には今いろいろなすばらしい作家がく*いるから→いて、たとえば、村上春樹がいますが、私は彼の作品が好きですから、下半期彼の作品などが読みたいです。

(10) 理想の生活を求めるく*ために→て晩婚や独身を選んだ。そして、日本の出生率が下れば、社会の高齢少子化問題も深刻になる。

本章は、「*テ→Y」については、「*テ→ノデ、カラ、タメニ」3種類のパターンが専ら理由を表すため、それらを一括りにして論じ⁵、「*X→テ」については相対的に誤用が発生しやすい「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」2種類のパターンを論じる。異なるアプローチを用いるのは、「*テ→ノデ、カラ、タメニ」において学習者が誤用したのは「テ」だけであるが、「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」において学習者が誤用したのは「ノデ」と「カラ」であるからに他ならない。

7.3 理由を表す「テ」の成立条件

理由を表す「テ」について、先行研究では2.3.2節で述べたように主に統語制約に関わる「動詞の意志性制約」と「モダリティ制約」、前後件の意味関係に関わる「因果関係の度合い」といった3つの観点から論じられている。それらを踏まえ、理由を表す「テ」の成立条件をまとめると、以下の3点となる。

- ①「動詞の意志性制約」：後件には意志動詞が現れにくい。
- ②「モダリティ制約」：後件にはモダリティが現れにくい。
- ③「因果関係の度合い」：前後件の原因・理由と見なされる必然性の程度が高い。

⁵ 『YUK 作文コーパス』に「目的」を表す「タメニ」の誤用例は1例も現れていない。

「因果関係の度合い」については、池上（2010:111-112）を援用し、原因と結果の結びつきがある関係を「必然的因果関係」と呼び、その結びつきの必然性が薄く、偶発的な因果関係を「契機的因果関係」と呼ぶ⁶。以上に従えば、「テ」に含まれている「因果関係の度合い」は「必然的因果関係」と言えるだろう。

7.4 誤用の詳細

7.4.1 「*テ→ノデ、カラ、タメニ」のスケッチ

「*テ→ノデ、カラ、タメニ」は学習者が使った「テ」ではなく、「ノデ、カラ、タメニ」が自然なため、誤用とされた例である。学習者がどのような状況の下で「テ」を使っているのか、スケッチする。(11)～(13)を見よう。これらの例の前後件の「因果関係の度合い」はいずれも「契機的因果関係」であり、理由を表す「テ」を使うと誤用となる。

(11) 大学に入って、社会経験を積み重ねたい気持ちは徐々に強くなっている。2ヶ月間の休みがく*あって→あるので、それを機会にアルバイトを探そう。

(12) 今日は雨がく*降っていて→降っているから、野球は中止になる。

(13) 試験がく*あって→あるために、遊ぶ時間が取れなくなっているだろう。

(11) の場合、「休みがある」という状況から、「アルバイトを探そう」という意志願望を受動的に導き出すのは難しい。(12) の場合、「雨が降っている」は「野球は中止になる」を導き出す1つの理由にはなりうるが、必然的な理由とするには根拠が薄い。(13) の場合、「試験がある」ことは「遊ぶ時間が取れなくなる」ことの理由として認められるとはいえ、必然性には欠けるであろう。しかも理由を表す「テ」の成立条件を見ると、(11) の「探そう」は「動詞の意志性制約」と「モダリティ制約」にも違反し、(13) の「だろう」は「モダリティ制約」に違反している。

このように「*テ→ノデ、カラ、タメニ」については、学習者が使った「テ」に、因果関係の必然性が薄い「契機的因果関係」が読み取れないことが誤用とされる要因であるが、そこには同時に統語制約である「動詞の意志性制約」と「モダリティ制約」が場合によっては誤用とされる理由に絡み合っていることになる。

⁶ 池上（2010:111-112）は原因と結果の結びつきには必然性があり、それは「必然的因果関係」を表す。他方、結びつきの必然性が薄く、偶発的な因果関係は「契機的因果関係」を表すと述べている。「テ」については、森田（1989:54）が「自ずとこうなる、こうせざるを得ない」という成り行き任せの態度であり、文末に強い意思や態度は来ないと述べている。また張（1997:129）は、「テ」で繋がれた因果関係は直結型因果関係（①働きかけとそれを受けたもの（身体）の変化。②刺激とそれを受けた心理的、生理的状態の生起。③指令とそれを受けた行為。④心理状態とそれによって引き起こされた行為）でなければならないと述べている。

7.4.2 「*テ→ノデ、カラ、タメニ」における誤用パターン

「*テ→ノデ、カラ、タメニ」の 61 例は、理由を表す「テ」の成立条件のどこに違反するかにより、誤用パターンは「契機的因果関係」、「契機的因果関係＋動詞の意志性制約」、「契機的因果関係＋モダリティ制約」、「契機的因果関係＋動詞の意志性制約＋モダリティ制約」という 4 種類に分けることができる。その詳細を示すと、表 7-1 のようになる。

表 7-1 「*テ→ノデ、カラ、タメニ」における誤用パターン (n=61)

契機的因果関係	契機的因果関係 ＋ 動詞の意志性制約	契機的因果関係 ＋ モダリティ制約	契機的因果関係 ＋ 動詞の意志性制約＋モダリティ制約
5 (8.19%)	7 (11.48%)	18 (29.51%)	31 (50.82%)

表 7-1 に示した通り、「契機的因果関係」が 5 例 (8.19%)、「契機的因果関係＋動詞の意志性制約」が 7 例 (11.48%)、「契機的因果関係＋モダリティ制約」が 18 例 (29.51%)、「契機的因果関係＋動詞の意志性制約＋モダリティ制約」が 31 例 (50.82%) 認められる。(11) は「契機的因果関係＋動詞の意志性制約＋モダリティ制約」、(12) は「契機的因果関係」、(13) は「契機的因果関係＋モダリティ制約」の例であるが、その他の例としては (14) ～ (21) のようなものがある。

「契機的因果関係」

- (14) 「海賊王」に対して私はおおいに触発され、<*感動して→感動したので>、好きだ。
 (15) 人間は誰でも自分の人生のために、設計すべきだと思う。そろそろ大学を<*卒業して→卒業するので>、私の人生はこれからだ。

「契機的因果関係＋動詞の意志性制約」

- (16) 私はもうすぐ三年生に<*なって→なるので>、思わずこの前の二年を振り返った。
 (17) その前にいろいろ準備を<*しておいて→しておいたので>、自信を持っていた。

「契機的因果関係＋モダリティ制約」

- (18) 今日は雨が<*降っていて→降っているから>、野球は中止になるだろう。
 (19) 事故が<*起こって→起こったために>、電車が遅れているかもしれない。

「契機的因果関係＋動詞の意志性制約＋モダリティ制約」

- (20) 熱が<*出て→出たので>、会社を休みたい。
 (21) その時、日本の経済などもはっきり分からないと<*思って→思ったので>、また次年度に経済を一緒に教えていただきます。

これらの「*テ→ノデ、カラ、タメニ」の例から、①学習者が使う「テ」は、日本語母語話者から前後件の「契機的因果関係」を適切に捉えていないと見なされるため、誤用とされている。②その際、「契機的因果関係」のみならず、統語制約に関わる「動詞の意志性制約」と「モダリティ制約」のいずれか一方、あるいは両者が関与していると見なされ誤用とされる例が9割以上を占めている、といったことが言える。

7.4.3 「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」のスケッチ

「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」は学習者が使った「ノデ」と「カラ」ではなく、「テ」のほうが自然なため、誤用とされた例である。学習者がどのような状況の下で「ノデ」あるいは「カラ」を使っているのか、スケッチしておく。(22)～(25)にその例を挙げておく。

- (22) 先生は日本語を教えてく*くださったので→くださって、ありがとうございます。
今では、だいたいうまく読めるようになりました。
- (23) 久しぶりに家にく*帰ったから→帰って、よく眠れた。
- (24) 新しく買ったテレビはソニーでした。十数年が過ぎても、今でもバリバリに見ることができました。その後、く*老化したので→老朽化して、とうとう壊れてしまいました。
- (25) 日本金融体制は、東西の体制を融合く*したから→して、生まれたものである。
欧米の体制は20世紀30年代の金融危機の後には既に完成しております。

(22)と(23)は、前後件の「因果関係の度合い」の違いによって誤用とされている例である。前後件の因果関係から「必然的因果関係」を表す「テ」が適切であるが、「契機的因果関係」を表す「ノデ」、「カラ」が使われているため誤用とされている。(22)は、「教えてくださる」ことにより「ありがとう」という感謝の気持ちが自然に湧いてくるため、「ノデ」の使用は不適切となる。(23)は、「久しぶりに家に帰った」ことが「よく眠れる」という生理状態を当然の結果としてもたやすことが容易に理解できるため、「カラ」は不適切である。

(24)と(25)は、その前後件は「時間的継起関係」であるが、学習者によって因果関係として捉えられた誤用である。(24)の場合、前件の「老化した」に引き続き、後件の「壊れた」が発生している。(25)における前後件の関係も(24)と同様である。(24)と(25)は、前後件が単に時間的先後関係であるため、「ノデ」あるいは「カラ」の使用は不適切となる。

「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」は、このように2種類の誤用パターンがある。(22)と(23)のような誤用パターンを「因果関係の度合い(「契機的因果関係→必然的因果関

係)」による誤用」(以下、「契機的因果関係→必然的因果関係」)、(24)と(25)のような誤用パターンを、「因果・時間継起関係間の誤用」(以下、「因果関係→時間継起関係」と呼ぶ。

7.4.4 「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」における誤用パターン

「*ノデ、カラ→テ」には2種類の誤用パターン、「契機的因果関係→必然的因果関係」と「因果関係→時間継起関係」があるが、「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」とで異なった傾向が見られる。詳細を示すと、表7-2のようになる。

表 7-2 「*ノデ、カラ→テ」における学習者の捉え方 (n=31)

	「契機的因果関係→必然的因果関係」	「因果関係→時間継起関係」
「*ノデ→テ」 (17)	15	2
「*カラ→テ」 (14)	3	11

表 7-2 から分かるように「*ノデ→テ」の17例のうち、「契機的因果関係→必然的因果関係」が15例、「因果関係→時間継起関係」が2例ある。そして、「*カラ→テ」の14例のうち、「因果関係→時間継起関係」が11例、「契機的因果関係→必然的因果関係」が3例ある。

「*ノデ→テ」の例のうち、「契機的因果関係→必然的因果関係」の例を(26)と(27)に、「因果関係→時間継起関係」の例を(28)に挙げておく。

「*ノデ→テ」

- (26) なぜかと言うと、アルミについての通訳だったので、専門用語のほか、理系の知識も色々「*教えてくれたので→教えてくれて」、助かったと感謝した。
- (27) 久しぶりにあなたに「*会えたので→会えて」、嬉しかった。
- (28) 今日皆さんに紹介するのは私の一番好きな歌手慕寒です。最初、慕寒の軽やかでしっとりとした歌声を「*聞くので→聞いて」、彼に注目しました。

(26)では、「色々教えてくれる」から必然的に「助かった」という感情の発生が導かれている。(27)では、「久しぶりに会えた」から「嬉しかった」という感情が自然に湧いている。そのため、「ノデ」を使うと、(26)では助けがないと大変な事態になっていたといったような言外の意味が暗示されるため、前後のつながりが悪く、誤用と判断されている。(28)は、「歌声を聞く」という事態と「彼に注目する」という事態が時間的に

前後関係にあるために、「ノデ」は誤用となる。

「*カラ→テ」の例のうち、「契機的因果関係→必然的因果関係」の例を(29)と(30)に、「因果関係→時間継起関係」の例を(31)に挙げておく。

「*カラ→テ」

- (29) 荷物が少ないのも当然だと思います。ちょうど隣の部屋の人が荷物を取りに来て
くださいと速達員に電話をく*かけたから→かけて、自分の荷物も一緒に下に運
んでくださいと速達員にお願いしました。
- (30) いい夢が見られたとき。朝家族と「おはよー」と挨拶を交わすとき。飼っている
犬とく*遊んでいるから→遊んで、疲れた犬を抱えるとき。一日の終わり、飼
っている可愛い犬がドアで私を迎えるとき。
- (31) 最初の面接試験で失敗してしまいました。自分はきれいではないばかりに、その
結果になってしまったとく*思うから→思って、残念でしかたがありませんでし
た。

(29) は、「電話をかける」に続いて、「荷物を運ぶことをお願いする」が起きている。

(30) は、「犬と遊ぶ」に続いて、「犬を抱える」が起きている。(29)も(30)も継起的
に発生するため、「カラ」の使用は不適切となる。(31)は、「その結果になってしまった」
という状況が生じ、当然の結果として「残念でしかたがありませんでした」という心理状
態が生まれたことを表す文であるため、「カラ」の使用は不適切になる。

以上のように、「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」の間で異なる傾向が見られる。整理す
ると、①学習者は日本語母語話者が前後文の因果関係を「必然的因果関係」と見なすとき
でも、「ノデ」を使用する、②学習者は日本語母語話者が前後文に「時間的継起性」があ
ると見なすときでも、「カラ」を使用する、といったことが言える。

7.4.5 まとめ

日本語母語話者と学習者の捉え方の違いを考察してきたが、対の関係が見いだせる。
まとめると、図7-2のようになる。母は日本語母語話者を示し、学は学習者を表す。

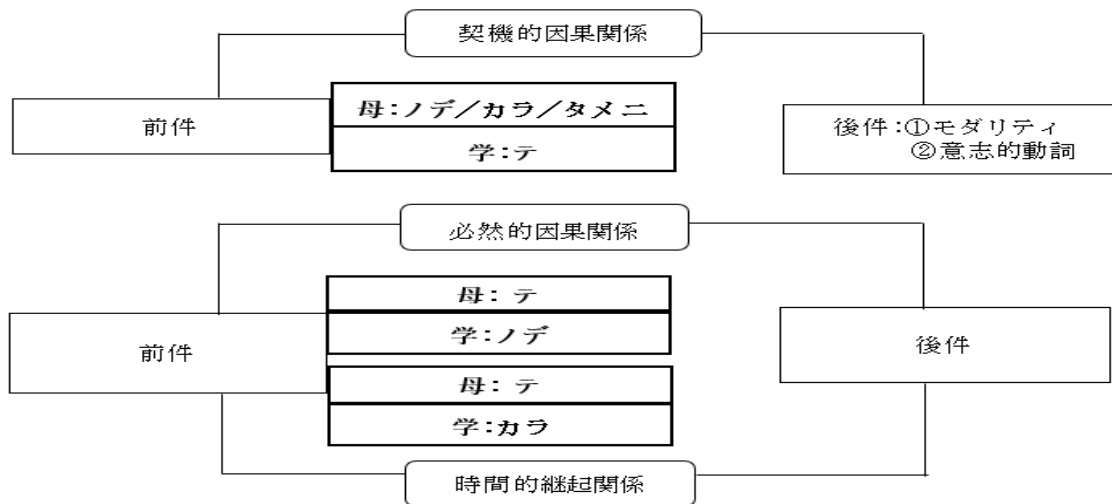


図 7-2 日本語母語話者と学習者における使い方の違い

7.5 使い方の違いの要因

7.5.1 「*テ→ノデ、カラ、タメニ」

日本語母語話者が「ノデ、カラ、タメニ」を使うときに、学習者が「テ」を使う理由は何であろうか。2点を指摘するにとどめておく。

1つは、学習者が理由を表す「テ」を「契機因果関係」を表すときにも使えるとして使用し、また守るべき統語制約もよく把握せず、誤用を生じさせているというものである。吉田(1994)は台湾人日本語学習者を事例に、「テ」形接続の誤用例が原因・理由の「テ」に集中していることを指摘している。学習者の母語を超えた観点からの考察が必要なのかかもしれない。もう1つの理由としては、学習者が因果関係を捉えることができず、前後件を繋げるためだけに、日本語で最も使用しやすい「テ」を使用している可能性が考えられる。つまり、因果関係の読みを意味の繋がりに委ねる場合に、学習者は「ノデ」などの接続助詞を使用せず、「テ」を用いてしまう可能性が考えられる。

7.5.2 「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」

7.5.2.1 「*ノデ→テ」

「*ノデ→テ」の場合、(26)と(27)を見ると、後件はそれぞれ「助かった」と「嬉しかった」であり、いずれも人の感情を表している。「*ノデ→テ」において、このように後件に人の感情が現れる誤用が17例のうち11例を数える。この点に、学習者が「テ」ではなく、「ノデ」を使用している鍵があるのではないだろうか。「ノデ」は、典型的な原因を表す接続助詞として元来「契機因果関係」を表す。そのため、学習者は「ノデ」によって自然に感情が導き出される「必然的因果関係」も表すことができると見なし、使用しているのではなからうか。「ノデ」を使うことで、学習者にとっては形式と意味の繋がりがより鮮明になっているものと思われる。台湾人日本語学習者を対象にした吉田(1994)

は「合格<*したので→して>、よかった」のような誤用例を挙げ、後項が話し手の感情を直接示す場合、「ノデ」で代用すると理屈っぽくなり、直接的な感情が伝わってこないと述べている。

7.5.2.2 「*カラ→テ」

「*カラ→テ」の場合、前後件に継起関係があるときに「カラ」を使用している。ここでの鍵は「カラ」という形式にあると見てよい。「カラ」には、格助詞としての「カラ」と接続助詞としての「カラ」がある。格助詞の「カラ」は、物事の出自、すなわち時間的、空間的、因果的な起点を表し、接続助詞の「カラ」は古くは格助詞「カラ」と同じものであったが、後に接続助詞として分化してきたものと言われている（鈴木 1976:44-45）。学習者は「カラ」が「時間的継起」を表すと誤認してしまい、「テ」を使うべきところに「カラ」を使用してしまった可能性が考えられる。

7.6 おわりに

『YUK 作文コーパス』から抽出したデータをもとに、「*テ→ノデ/カラ/タメニ」と「*ノデ/カラ→テ」における混用について考察した。その結果、次が明らかになった。

- ① 混用の誤用パターンとして、「*テ→ノデ、カラ、タメニ」は「*テ→ノデ」、「*ノデ、カラ、タメニ→テ」は「*ノデ→テ」、「*カラ→テ」が生じやすい。
- ② 「*テ→ノデ、カラ、タメニ」については、学習者が使う「テ」は、日本語母語話者から前後件の「契機的因果関係」を適切に捉えていないと見なされるため、誤用とされる。その際、「契機的因果関係」のみならず、統語規則に関わる「動詞の意志性制約」と「モダリティ制約」のいずれか一方、あるいは両者が関与していると見なされ誤用とされる例が9割以上を占める。

「テ」を使用する理由としては、2つのことが考えられる。1つは、理由を表す「テ」を前後件の因果性の薄い「契機因果関係」を表すものとして使用し、また守るべき制限をよく把握できず、誤用を生じさせているというものである。もう1つは、学習者が因果関係を捉えることができず、前後件を繋げるためだけに、日本語で最も使用しやすい「テ」を使用している可能性である。

- ③ 「*ノデ→テ」については、学習者は日本語母語話者が前後文の因果関係を「必然的因果関係」と見なすときでも、「ノデ」を使用している。その要因としては、「ノデ」を自然的に感情が導き出される「必然的因果関係」を表すことができるものとして使用していることが考えられる。「*カラ→テ」については、学習者は日本語母語話者が前後に「時間的継起性」があると見なすときでも、「カラ」を使用している。この要因として、学習者は語形の類似性から「カラ」が時間的關係を表現できると誤認識し、本来「テ」を使うべきところに「カラ」を使用しているといったことが考えられる。

第八章 「接続機能のテ形」の混用： 「テ」と逆接の接続助詞との混用¹

8.1 はじめに

本章では、『YUK 作文コーパス』から抽出した「接続機能のテ形」の混用である「テ」と逆接の接続助詞との混用に関する誤用例を分析する。第三章の図 3-5 に示したように、『YUK 作文コーパス』には「テ」と逆接の接続助詞との混用は混用全体の約 2 割を占めており、次のような混用の誤用が認められる。

- (1) まもなく二年生の生活が始まる。日本語の勉強は絶対に難しく<*なって→なるが>、それも挑戦だね。今後、充実した毎を送りたいと思う。
- (2) アニメの放送時間の前にテレビの前に座ってひたすら見ていました。アニメに夢中に<*なっているのに→なっていて>、いつも夕飯の時間も忘れ、よく母に叱られました。

(1) は、「テ」より逆接を表す接続助詞「ガ」を使うほうが適切と判断された例である。(2) は「テ」を使用するほうが適切にも関わらず、「のに」を使用したことで不自然と判断された例である。学習者によって生じたこうした誤用にどのようなパターンがあるのか、そして発生要因が何であるのかについては今のところ明らかにされていない。

本章の目的は、以上の観点から『YUK 作文コーパス』から抽出した「テ」と逆接を表す接続助詞「ガ」の混用を分析し、その実態を明らかにすることにある。「ガ」を研究の中心とする理由は、8.2 節の分析結果が示すように、「テ」と「ガ」の混用が「テ」と逆接を表す接続助詞の混用全体の 9 割以上を占めるからである。8.2 節では、「テ」と逆接の接続助詞との間に認められる混用の全体像を考察する。8.3 節では、「テ」と「ガ」それぞれの意味用法と相違点を述べる。8.4 節と 8.5 節では、混用の詳細を「*テ→ガ」と「*ガ→テ」の順に考察する。そして、8.6 節では本章で明らかになったことをまとめる。

8.2 「テ」と逆接を表す接続助詞の混用の誤用実態

『YUK 作文コーパス』から抽出した「テ」と逆接の接続助詞の混用は、大きく「*テ→Y」と「*X→テ」の 2 種類に分けることができる。これら 2 種類の誤用は『YUK 作文コーパス』にあわせて 96 例認められ、X あるいは Y に該当する逆接の接続助詞は「ガ、ノ

¹ 第八章は、廖（印刷中 b）をもとに加筆修正したものである。

ニ、テモ、モノノ」のいずれかである。「*テ→Y」については「*テ→ガ、ノニ、テモ」が 96 例の内の 62 例、「*X→テ」については「*ガ、ノニ、モノノ→テ」が 96 例の内の 34 例認められる。誤用数とその割合を表すと、図 8-1 のようになる。

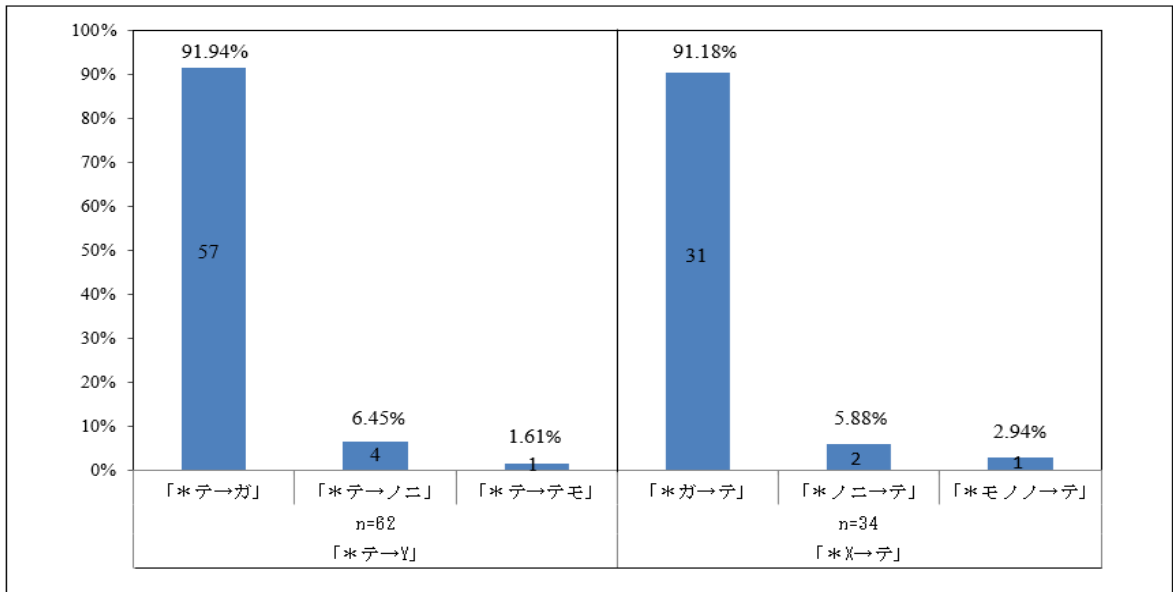


図 8-1 「テ」と逆接の接続助詞の混用における誤用実態 (n=96)

図 8-1 に示した誤用例として、(3)～(8)のような例がある。

「*テ→ガ」

- (3) 予定で、ほかの四人の学生は 9 月 25 日に東京へ行く予定です。以上ご報告申し上げます。大変失礼なところが＜*ありまして→ありますが＞、何卒お許しくださいますようお願い申し上げます。

「*テ→ノニ」

- (4) 私も例外ではなかった。だから、交通渋滞はたいへんだった。私は朝 8 時に長距離バスに＜*乗って→乗ったのに＞、夜 8 時まだ途中だった。両親は忙しかったにもかかわらず、電話で私を慰めてくれた。

「*テ→テモ」

- (5) 入試試験に＜*参加して→参加しても＞、直接入学することができないとのこと。

「*ガ→テ」

- (6) 大学には豊富なことが＜*あるが→あって＞、私はいろいろ学びました。クリスマスを迎えるために、大きいパーティーがありました。私は嬉しかったです。

「*ノニ→テ」

- (7) もちろん、お金を稼ぐのは悪くはないが、だが、就職の意味はお金を稼ぐことに＜*限るのに→限って＞いいのだろうか。仏教には「初心」という言葉があるそうだ。

「*モノノ→テ」

(8) 「を」が使われない理由は十分であろう。これに対して、(6)～(10)の見出しにおいて格関係が明確で<*あるものの→あって>、「を」を消して文字通りの意味が通じるにもかかわらず、「を」が使われている。

図 8-1 を見ると、「*テ→ガ、ノニ、テモ」の混用で最も多いのは「*テ→ガ」の 57 例 (91.94%) であり、「*ガ、ノニ、モノノ→テ」の混用で最も多いのは「*ガ→テ」の 31 例 (91.18%) である。学習者が誤用を生じさせやすいのは、「*テ→Y」については「*テ→ガ」、「*X→テ」については「*ガ→テ」であり、それらはペアの関係にあると言える。そのため、本章では、「テ」と逆接を表す接続助詞「ガ」の混用のみを論じる。

8.3 「テ」と「ガ」の意味用法

「テ」と「ガ」それぞれの意味用法と相違点を論じておく必要がある。「テ」の意味用法はすでに 2.2.2 節で述べた。「ガ」の意味用法を整理すると、以下ようになる。山下 (2003) と日本語記述文法研究会 (2008) を取り上げておく。

山下 (2003) は「ガ」の意味用法を大きく「逆接」と「前置き」の 2 種類に分け、日本語記述文法研究会 (2008) は「対比」、「逆接」、「譲歩」、「前置き」の 4 種類に分けている。日本語記述文法研究会 (2008) が分類した 4 種類の意味用法の詳細を示すと、「対比」: 何らかの意味で主節と対比的な内容を表す、「逆接」: 従属節の事態から予想・期待される事態と主節の事態とが対立している、「譲歩」: 主節で述べる判断・評価とは逆方向の内容を示して、それを認めたくて主節の内容を主張する、「前置き」: 節の内容が主節の内容を言うための前置きであり、その文で本来言いたいことそのものではないことを示す、となる。

「テ」にも「ガ」にも「対比」と「逆接」の意味用法があるが、そこにどのような違いがあるのだろうか。「テ」と「ガ」が表す「対比」には、前後件の可逆性の有無と意味の比重に違いがある。「テ」について、吉田 (2012:36) は前後件に可逆性を持っており、前後件を置き換えても意味は変わらず、前後が同等の比重で語られていると述べている。他方、「対比」を表す「ガ」について、松本 (1989) は「ガ」は前件と後件を置き換えると意味が変わると指摘し²、中里 (1996) はさらに一歩進め「ガ」は後件に焦点が置かれていると述べている。庭 (2004) は「テ」と「ガ」が表す「対比」を比較し、「テ」で結べば、前後が対立することを強調せず、2 つの事柄を並べているという言い方であり、前件から予想されることと後件の内容とが食い違う場合、「テ」では言えない。他方、「ガ」

² 松本 (1989:207) では、「私はドイツ語もできるが、中国語もできる。」を「私は中国語もできるが、ドイツ語もできる。」にすると意味が変わり、前者は「ドイツ語もできるが、ドイツ語より難しい中国語もできる。」、後者は「中国語もできるが、中国語より難しいドイツ語もできる。」という意味にとれると述べている。

で結べば、もちろん対比的な関係、前件に対して後件が多少とも予想外のことであるという意味合いになると述べている。

「逆接」には、次のような相違がある。「テ」について、日本語記述文法研究会（2008:286）は、主節が否定形または否定的な評価を意味する表現が多いと述べている。また、江口（2015:74）は構文的条件と意味的特質を分析し、「逆接」を表す「テ」の型を「偽装型」、「敢行型」と「意外性型」の3種類に分けることができると述べている。そして、これらの特徴として、「偽装型」は前件に「知る」、「見る」と「聞く」が来て、後件に「～ないふり/顔をする」といった慣用句的表現として成立する。「敢行型」は前件に「知る」、「分かる」が来て、後件に不都合を表す動作動詞が現れ、前後が「～テ、～テイテ」をなす。「意外性型」は前件に特に制限はないが、後件に打ち消しや反語・反論などの表現が共起する、と述べている。庭（2004）は、「ガ」節の述語は普通形・丁寧形どちらにも接続するが、主節と別の文体にはならないと述べている。

以上から「テ」と「ガ」における「対比」と「逆接」の相違点をまとめると、表 8-1 のようになる。

表 8-1 「テ」と「ガ」の相違点

		テ	ガ	
対比	吉田 (2012)	<ul style="list-style-type: none"> ・前後に可逆性あり ・前後が同じ比重 	松本 (1989)	・前後を変えると意味が変わる
	庭 (2004)	・前後が対立することを強調せず、ただ並べる。	中里 (1996)	・後件に焦点が置かれている
逆接	日本語記述文法研究会 (2008)	<ul style="list-style-type: none"> ・主節：否定表現が多い ・従属節：状態性の表現が来やすい 	庭 (2004)	<ul style="list-style-type: none"> ・前件の述語の普通形、丁寧形がともに接続でき、ただし、前後の文体が統一すべき
	江口 (2015)	<ul style="list-style-type: none"> ・「偽装型」 前件：「知る」「見る」「聞く」 後件：～ないふり/顔をする ・「敢行型」 前件：「知る」「分かる」 後件：不都合となる動作動詞 ・「意外性型」 前件：特に制限はない 後件：打ち消しや反語・反論など 		

そのほかにも「テ」と「ガ」には類似した意味用法がある。「テ」の「前触れ」と「ガ」の「前置き」である。橋本（2016:225）は、「テ」の「前触れ」と「ガ」の「前置き」における共通点として、従属節と主節とが対等な関係にあること、主節に先立ち従属節で前置きをするという機能そのものであるという2点を指摘している。他方で、両者の間には明確な違いも認められ、「ガ」節による「前置き」は主節の内容の命題外のことを述べ

るのに対し、「テ形」節による「前触れ」は、主節で述べる内容の別側面を前置きの表現していると述べている。

8.4 「*テ→ガ」

8.4.1 「*テ→ガ」のスケッチ

「*テ→ガ」は学習者が使った「テ」ではなく、「ガ」が自然なため、誤用とされた例である。学習者がどのような状況の下で「テ」を使っているのか、スケッチをしておく。

(9) ～ (12) を見よう。

(9) 導入した例文はもともと「あつい」という単語を使う予定で、「最近をあつい」を使いたいと<*思って→思ったが>、皆さんは「最近は暖かい」を言ってしまった。

(10) それらの諺の形、意味、修辞手法、動物イメージを観察すると、共通している点も<*あって→あるが>、異なる点も少なくない。昔から現在にいたる中日両国の緊密なコミュニケーションがその原因の一つと考えられる。

(11) 最近、気温が上がったり下がったり<*してい→していますが>、お元気ですか。

(12) 更に、自分で文学作品を作り始めています。たまに夕方から、筆や紙を出して、夜遅くまで習作を<*して→していますが>、かなり面白くて、気分がいい。私は文章を書くことだけでなく、現代詩も作ってみて、中国の伝統的な文化を研究したい。

(9) では、『最近をあつい』を使いたいと思った」といった予想に反し、「皆さんは『最近暖かい』と言ってしまった」といった事態になったため、「逆接」に該当する。前件の述語「思う」は意志動詞であり、後件の「言ってしまった」は肯定である。江口(2015)の「テ」の「逆接」のいずれの型にも当てはまらないため、誤用となる。(10)は、「共通している」と「異なる」が語彙的に対比しているため、「対比」に該当する。前後件を置き換えると意味が変わるため、松本(1989)に従うと、「テ」は不適切となる。

(11)は、「気温が上がったり下がったりしている」といった天気についての話から「お元気ですか」といった挨拶へと話を展開させている。日本語記述文法研究会(2008)が言う「ガ」の「前置き」であるため、「テ」は不適切である。「テ」を「前触れ」と捉えることができないのは、前件と後件で話題が変わっているからである。(12)は、「遅くまで習作をしている」に対して、「つらい」といった判断ではなく、「面白い」といった逆の判断をしている。日本語記述文法研究会(2008)が言う「譲歩」を表す「ガ」であるため、「テ」は不適切である。

以上の誤用例から、「*テ→ガ」の混用パターンは「逆接」、「対比」、「前置き」、「譲歩」の4種類に分けることができる。いずれも意味用法上の誤用である。

8.4.2 「*テ→ガ」における混用パターン

前節で「*テ→ガ」の混用パターンをスケッチした。個々の混用パターンの実態を混用数の多い順に示すと、表 8-2 のようになる。

表 8-2 「*テ→ガ」における混用のパターンの詳細 (n=57)

「前置き」	「逆接」	「対比」	「譲歩」
39 (68.42%)	9 (15.79%)	5 (8.77%)	4 (7.02%)

表 8-2 に示した通り、「*テ→ガ」の混用 57 例の内訳は「前置き」が 39 例で最も多く、全体の 7 割弱を占めている。「*テ→ガ」の混用は「前置き」に集中していると言える。そのほかは、「逆接」が 9 例 (15.79%)、「対比」が 5 例 (8.77%)、「譲歩」が 4 例 (7.02%) 認められる。それぞれの例はすでに (9) ~ (12) に示したが、その他の例を (13) ~ (16) に示しておく。

「前置き」

- (13) 初級から上級へ進むにつれてさまざまな文法項目の習得上の問題点が<*出てきて→出てくるが>、その中で「もう」という時間副詞、特に「もう」と「まだ」の誤用に関する研究は重要な一環だと思われる。

「逆接」

- (14) 日本語を二年間<*勉強しまして→勉強しましたが>、使う機会はそれほど多くありません。手紙や日記などの場合も少ないです。

「対比」

- (15) 当時川の水は<*澄んでいて→澄んでいたが>、今では川の中に魚、エビ、などの姿もなくなり、ゴミがたくさん捨てられている。

「譲歩」

- (16) まもなく大学の二年生の生活が始まる。日本語の勉強は絶対に難しく<*なって→なるが>、それも挑戦だね。今後、充実した毎日を送りたいと思う。

8.4.3 「*テ→ガ」の「前置き」における前後件の文脈の特徴

「*テ→ガ」の混用は「前置き」に集中していることが明らかになった。この点について、詳細に検討していく。

日本語記述文法研究会 (2008:261) に従うと、「前置き」は、節の内容を言わなければ主節の内容が意味不明になる前置き (以下、「主節の意味の明確性に関わる前置き」)、節

の内容を前置きで言うことによって話の唐突さを緩和する前置き（以下、「唐突さを緩和する前置き」と主題を提示するような前置き（以下、「主題提示の前置き」）に分けることができる³。この日本語記述文法研究会（2008:261）の分類を踏まえ、前件の内容を手がかりに「*テ→ガ」の「前置き」を整理すると表 8-3 のようになる。

表 8-3 「*テ→ガ」の「前置き」における混用のパターン（n=39）

「主題提示の前置き」	「唐突さを緩和する前置き」	「主節の意味の明確性に関わる前置き」
34 (87.18%)	5 (12.82%)	0 (0%)

表 8-3 に示した通り、「*テ→ガ」の「前置き」39 例のうち、「主題提示の前置き」が 34 例で圧倒的に多い。他方、「唐突さを緩和する前置き」は 5 例しか現れておらず、「主節の意味の明確性に関わる前置き」は 1 例も現れていない。「主題提示の前置き」の例を (17)、「唐突さを緩和する前置き」の例を (18) に挙げておく。

「主題提示の前置き」

(17) 多くのストーリーで、依然として忘れ難い 1 件の事を紹介したい。私は一度バスに<*乗って→乗ったが>、そのバスは混んでいた、ワンマンバスではなく、赤い頬の車掌さんが勤務していた。

「唐突さを緩和する前置き」

(18) お忙しいとは<*思いまして→と思いますが>、暖かい応援よろしく申し上げます。

8.4.4 「*テ→ガ」に「前置き」が最も多く現れている要因

学習者は前後件の間を逆接に捉えることなく「テ」を使用しているが、校閲者である母語話者は逆接の意味を感じ、「テ」を「ガ」に直していると考えられる。このような違いは、なぜ生じているのであろうか。また、「*テ→ガ」の混用が「前置き」に集中しているのはなぜであろうか。

中国語と日本語の会話展開は異なる⁴。中国語母語話者はそれほど前置き表現を用いず、比較的ストレートに誘いを切り出すことを好む傾向にあるが、日本語母語話者は、誘いを唐突に切り出すよりも、それと関連する先行の話題を導入した後、誘いを切り出す傾

³ 日本語記述文法研究会（2008:261）には、「主節の意味の明確性に関わる前置き」として「あそこに大きいビルがありますが、あれは何ですか?」、「唐突さを緩和する前置き」として「休みに行ったんだけど、熱海はいいところだね。」、「主題提示の前置き」として「さっきの話だけど、もう 1 度考え直してくれないかな。」が挙げられている。

⁴ 和田・堀江・北原・吉本（2008）は、日本語母語話者の場合、前置きの部分で、相手の状況を探ったり、本題に入る前の負担軽減のためネガティブポライトネス・ストラテジー（Brown & Levinson 1987）を使ったりする。

向にある（黄 2014）。このような会話展開の相違に焦点をあてると、日本語の会話の展開パターンは、「呼びかけ（任意オプション）」→「相手への配慮を含む前置き表現」あるいは「話題・様態を提示する前置き表現」→「主題部」という要素から構成されていることが理解できる、一方、中国語の会話展開は「前置き」なしの「呼びかけ」→「主題部」という要素から構成される用例も認められる（王 2021）。

(19) は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から抽出したものであるが、それに対応する中国語の訳文としては (19a) と (19b) のどちらも成り立つ⁵。

(19) 男の人に聞きたいんですが、結婚して奥さんに子供が出来ても女としてちゃんと見えていますか？

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

訳文：(19a) 想问男士们一个问题，结婚后生完小孩还会把自己的妻子当女人看吗？

(19b) 请问结婚后生完小孩你们还会把自己的妻子当女人看吗？

日本語の「前置き」の意味機能について、山崎（1998）は、前件は後件への補足、あるいは後件の解釈を阻害する要因を排除するものであると指摘している。これに従えば、(19) の場合、後件のみが述べられると、「なぜ突然そう聞かれるのか」といった疑問が聞き手に生じかねない。前件で「聞きたいんですが」のように相手への配慮が示されることで、そのような疑問が聞き手に生じることはなくなる。しかしながら、中国語の訳文は、前置きがなくても、唐突な感じを与えることはない。それは、中国語では相手の感覚や後続よりも、自分の言いたいことと、意見を重視するからである。市川（1997:382）は、「前置き」は多くの場合、「ガ」で導入されることが多いが、学習者の母語にそのような前置き表現がない、またあっても別の形態をとる場合もあり、外国人学習者にはかなり難しい表現であると指摘している。王（2021）も、日本語の前置き表現に関する知識や認知度が不足していると指摘している。

学習者は、「前置き」の意識を持っていないため、前件を「前置き」とは捉えず、しかも前後件の事態を個々に独立した場面と捉え、「テ」を用いその前後を繋げていると考えてよい。

8.4.5 まとめ

「*テ→ガ」の混用をまとめると、次のようになる。

- ① 「*テ→ガ」が使われる「テ」は、節と節の間の逆接関係を適切に捉えていないため、誤用である。

⁵ 中国語の訳文は、筆者が翻訳したものである。訳文の適切さについては、中国語母語話者 10 人に確認している。

- ② 「*テ→ガ」の混用パターンには、いずれも意味用法上の誤用である「前置き」、「逆接」、「対比」と「譲歩」があり、混用全体の過半数は「前置き」が占める。
- ③ その「前置き」の混用の9割近くは、「主題提示の前置き」と「唐突さを緩和する前置き」のうち、前者である。
- ④ 「前置き」が最も多く現れている理由として、日本語とは異なり中国語では前置きの有無がコミュニケーションに支障を生じさせないこと、前置き表現に関する知識や認知度が不足していることが考えられる。これらによって、学習者は、前件を「前置き」と捉えず、しかも前後件の事態を個々に独立した場面と捉え、「テ」でその前後を繋げていると考えられる。

8.5 「*ガ→テ」

8.5.1 「*ガ→テ」のスケッチ

「*ガ→テ」は学習者が使った「ガ」ではなく、「テ」のほうが自然なため、誤用とされた例である。学習者がどのような状況の下で「テ」を使わないのか、スケッチしておく。(20)～(23)を見よう。

- (20) 大学の生活はとても忙しいです、しかし、多くの友達が<*できますが→できて>、大変充実しています。
- (21) 私はこの本を何度も読みましたが、毎回すべて異なる収穫が<*ありますが→あって>、とてもじっくりと味わうのに値します。
- (22) 娯楽と言え、五月、友達といっしょに舟山へ<*行きますが→行って>海を見ました。こんなに嬉しいことはありません。クラスは多くの活動を行ないました。
- (23) 1920年代に、日本夫婦が街に出る時、妻はいつも恭しく夫の後ろを<*歩いたが→歩いて>、夫は大旦那のように得意満面な様子で前を歩いていた。

(20) は、「多くの友達ができる」といったことが「大変充実している」といった心境描写の原因・理由として認められ、前後が因果関係にあるため、「ガ」は不適切となる。

(21) は、「ガ」を重複して使用している、「ガの二重使用」であるため⁶、誤用と認められる。(22) は、「舟山へ行く」といった動作と「海を見る」といった動作が、時間的に前後して起きる「継起」関係にあるため、「ガ」は不適切となる。(23) は、前件の「後ろを歩く」と後件の「前を歩く」といった2つの事態が反対の意味を表し、しかも前後を入れ替えても意味が変わらない「対比」関係にある⁷。この(23)の場合、後件に重み

⁶ 日本語記述文法研究会(2008:259)によると、「ガ」を複数つなぐことは一般には好まれず、例として「*有名だが、実力はないが、威張っている。」が挙げられている。

⁷ 渡部(1995:557-558)によれば、対比の用法には、「高い→低い」のような「語彙の意味的対比」と

を置くとすれば、「ガ」でもよさそうである。それにもかかわらず「テ」に直されているのは、前後件における校閲者の捉え方が関わっていると見てよい。校閲者がこの例を誤用と判断したのは、前後を対比的に捉えるより、文脈からただ並べるほうがふさわしいと判断したからであろう⁸。

以上から、「*ガ→テ」の混用パターンは、「原因・理由」、「ガの二重の使用」、「継起」と事態の捉え方によっては「ガ」が許容される「対比」を加えた4種類となる。「対比」は「ガ」が許容される可能性があるという点において、他の「原因・理由」、「ガの二重の使用」、「継起」とは異なるが、ここでは混用パターンの1種と見なしておく。「*テ→ガ」の混用が専ら意味用法に集中しているのとは異なり、「*ガ→テ」の場合、意味用法に関する混用は「原因・理由」、「継起」と「対比」である。

8.5.2 「*ガ→テ」の詳細

「*ガ→テ」の31例の混用パターンは「原因・理由」、「ガの二重使用」、「継起」、「対比」という4つのいずれかに振り分けることができる。その詳細を示したのが表8-4である。

表8-4に示した通り、31例の内訳は「対比」が14例(45.16%)、「継起」が9例(29.03%)、「原因・理由」が5例(16.13%)、「ガの二重使用」が3例(6.68%)である。それぞれの例は既に(20)～(23)に示しているが、その他の例としては(24)～(27)がある。

表8-4 「*ガ→テ」における誤用のパターン (n=31)

「対比」	「継起」	「原因・理由」	「ガの二重使用」
14 (45.16%)	9 (29.03%)	5 (16.13%)	3 (6.68%)

「対比」

(24) 週の土日はずっと家で速達を待っていた。同僚と同じ日に長春から送ってもらったのに彼の速達は土曜日に<*届いたが→届いて>、私のはなかなか届かなかった。

「継起」

(25) 『百家姓』に類似の本を通して、私は歴史に興味を<*持っていますが→持って>、中国の伝統的な文化を学んでいます。

「肯定→否定」のような「文法的対比」がある。これに従うと、(17)は「前」と「後ろ」の対比であり、「語彙の意味的対比」となる。

⁸ この点については、庭(2004)の47.1.2節を参照されたい。

「原因・理由」

(26) パソコンが落下<*したが→して>、データが消えてしまった。

「ガの二重使用」

(27) よく食べますが、今まで食べてきたどら焼きとは全然<*違いますが→違って>、この店のどら焼きは格段に美味しい。

(24) は「届いた」と「届かなかった」の対比である⁹が、(23) のように後件に重みを置くとすれば、「ガ」を使ってもよい例である。校閲者は文脈から前後を対比的に捉えるより、ただ並べるほうがふさわしいと判断したのであろう。

(25) ～ (27) で「ガ」が使用されているのはなぜであろうか。この点を明らかにするために、前後件にどのような特徴があるのか探してみる。(25) は前件で「歴史に興味を持っている」といった話題が導入され、後件で前件に関連した「伝統的な文化を学んでいる」ことが述べられている。(26) は前件で「パソコンが落下した」という話題が導入され、後件で「データが消えてしまった」といったことが述べられている。(27) は前件に現れた「どら焼き」が後件で再び現れている。いずれも前件である話題が導入され、後件でその話題の続きを述べている。「前置き」の「主題提示の前置き」の基準に従えば、これらの「ガ」節が「話題提示」に当てはまる¹⁰。

以上、「ガ」が使用されているのは、前後件で「対比」関係が認められる場合、「継起」、「原因・理由」、「ガの二重使用」のように前件で話題が導入され、後件でその話題の続きが述べられている場合であることを考察した。「継起」、「原因・理由」、「ガの二重使用」の「ガ」は「前置き」に類似しており、「*テ→ガ」の「前置き」と対の関係にあると見なすことができる。そのため、以下では「*ガ→テ」は「前置き」と類似した用法を持つ「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」を論じる。

8.5.3 「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」における前後の語の関連性

前節で、「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」が「*テ→ガ」の「前置き」と類似した用法であることを示した。ハリディ&ハサン (1997) は、談話の結束性を構築する上で、談話で用いられる語が重要な役割を担い、その際、談話の結束性に関わる語として「同一語の繰り返し」、「同義語」、「上位語一下位語」、「一般語」、「コロケーション」という 5 分類が可能であると述べている。これに従うと、前件に「歴史」が取り出され、後件にそれと意味が類似した「伝統的な文化」が再提示される (25) が

⁹ (24) は「届いた」と「届かなかった」の対比であり、渡部 (1995:557-558) が言う「文法的対比」に該当する。

¹⁰ 本章の註 2 を参照されたい。

「同義語」に、前件に上位語「パソコン」が出て、後件にその下位語「データ」が現れる (26) が「上位語-下位語」に、同じ語が改めて現れる (27) が「同一語の繰り返し」に該当する。すなわち、「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」における前後の語の関連性を「同義語」、「上位語-下位語」と「同一語の繰り返し」といった 3 種類に分けることができる。それぞれの数と割合を示すと、表 8-5 のようになる。

表 8-5 「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」における前後の語の関連性 (n=17)

「同義語」	「同一語の繰り返し」	「上位語-下位語」
10 (58.82%)	5 (29.41%)	2 (11.76%)

表 8-5 に示した通り、「同義語」が 10 例、「同一語の繰り返し」が 5 例、「上位語-下位語」が 2 例認められる。それぞれの例は (28) ~ (30) に挙げておく。

「同義語」

(28) 先生は彼女は勉強家ですと言いました。田さんはとても人気が*ありますが→あって、クラスメイトと先生は彼女が好きです。

「同一語の繰り返し」

(29) 私は将来絶対日本に*行きますが→行って、しっかりと日本を楽しみたいです。春になると、桜が咲き乱れています。

「上位語-下位語」

(30) 患者が手術を*受けますが→受けて、足が軽くなって楽になったと教えてくれた。

亀田 (1998:6) は、提題用法の「ガ」複文の前件と後件の関係が「提題-叙述」になっていると指摘している¹¹。後件に「同義語」、「同一語の繰り返し」、「上位語-下位語」などの形式で現れて前件の内容を指示しているため、前後は「提題-叙述」といった関係をなしていると言えるだろう。

8.5.4 「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」において「ガ」を使用している理由

「*テ→ガ」の「前置き」において「ガ」の代わりに「テ」を使用しているのは「ガ」の不使用、そして「*ガ→テ」の「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」において

¹¹ 亀田 (1998:1) は「ガ」の提題用法について、「ガ」の前件である事態が示され、それに関する何らかの叙述が後件で行われていると定義している。これは本章の「前置き」に対応していると言える。

「テ」の代わりに「ガ」を使用してしまうのは「ガ」の過剰使用であると言っても良さそうである。そうだとすると、両者は一見矛盾しているように見える。「*テ→ガ」が「前置き」に集中している要因は 8.4.4 節で述べたように、日本語の前置き表現に関する知識や認知度不足に起因している。では、なぜ「*ガ→テ」も「前置き」に集中しているのか、その要因を探ってみる。

陳 (2006) は、前置き表現の有無によって、次にくる主要な話題や事柄の成り立ちに支障が起きることはない指摘している¹²。(25)の「ガ」節の「歴史に興味を持つこと」は時間の順序に従って次々に行った事柄の流れの1つであり、(26)の「パソコンが落下した」が前後の因果関係をなす理由であり、いずれも欠かせない部分である。それは、「テ」は1つの意味ではなく、それぞれの意味を表す2つの節を組み合わせる形式である(庭 2004)といったために起因する。では、なぜ学習者がそれらの欠かせない部分を前置きと見なしているのだろうか。

陳 (2006:71) は、「前置き」には「伝達性配慮型」と「対人配慮型」があり、「対人配慮型」に分類されている「詫び表現」には、「悪いけど」、「すみませんが」などの定型表現を取り上げることができると述べている。また、「ガ」節は本題に入る前の注釈や確認であり、本題に入ることを示す一種の区切りとして機能している(山下 2003:75)。さらに、「ガ」は何かを提示しそれについての叙述を後に導く場合、「ガ」節は後件の情報に比べて重みが軽く、後件の情報を伝えるための前段階に過ぎない(亀田 1998:5-6)。従って、後件の主張の中心を伝達する際、「すみませんが」などの定形表現は後件の注釈として挿入されているに過ぎず、本題に入る前の区切りとしてしか働いていない。

王 (2021) は、学習者は説得の準備を行ったり、対人的配慮を表したりするため、相手に依頼する場合や相手に断る場面で、「詫び先行型」¹³といった「前置き」を使う傾向があることを述べている。それに従えば、「すみませんが」などの定型に影響され、(25)は「興味を持つ」より「伝統的な文化を学ぶ」を、(26)は「パソコンが落下した」より「データが消えてしまった」を強調する、つまり前件より後件に重点が置かれる。その際、前件は話題導入部として「前置き」と見なされ「ガ」が使用されているが、他方で後件は中心部と見なされ、その前後件は1つのまとまりとして捉えられているからと考えられる。

¹² その他にも陳 (2006:67) は次の3点を述べている。①前置き表現は何らかの配慮によって用いられ、主要な言語内容に先立つ。②ディスコースにおいて、その次に来る主要な言語内容を導入するという機能が基本的な機能である。③前置き表現には、次に来る主要な言語内容に対する判断(態度)や認識といった、話し手の主観が含まれている。

¹³ 王 (2021) は、児玉 (2015) の分類に従っている。児玉 (2015:160-161) は、「前置き」を「詫び先行型」などの7種類に分類し、「詫び先行型」を「発話の始めに『詫び』が出てくるもの」と定義している。例として、「本当にすみません。1万円貸してくれますか。」が取り上げられている。

8.5.5 まとめ

「*ガ→テ」の混用をまとめると、次のようになる。

- ① 「*ガ→テ」の混用パターンとしては、「原因・理由」、「ガの二重使用」、「継起」、「対比」がある。
- ② 「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」には「前置き」と類似した点があり、それらの「ガ」節には話題を導入する働きがある。「*ガ→テ」が発生する理由としては、「すみませんが」などの定形表現に影響され、前件は話題導入部として「前置き」と見なされ「ガ」が使用されるが、他方で後件は中心部と見なされ、その前後件が1つのまとまりとして捉えられているからと考えられる。

8.6 おわりに

『YUK 作文コーパス』から抽出したデータをもとに、「テ」と「ガ」の混用について考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

「テ」と「ガ」の混用については、「*テ→ガ」が「*ガ→テ」の2倍近く現れているように「*テ→ガ」のほうが起こりやすい。

「*テ→ガ」の混用パターンとしては、「前置き」、「逆接」、「対比」と「譲歩」の4種類があり、その6割近くを「前置き」が占める。「前置き」の混用で多いパターンは「伝達型配慮型」である。「テ」を使用している理由としては、前置き表現に関する知識や認知度が不足しているため、前件を「前置き」と捉えず、しかも前後件の事態を個々に独立した場面と捉えていることが考えられる。

「*ガ→テ」の混用パターンとしては、「原因・理由」、「ガの二重使用」、「継起」、「対比」がある。「対比」と「原因・理由」、「ガの二重使用」、「継起」は数的にはほぼ同じである。「原因・理由」、「ガの二重使用」、「継起」には「前置き」と類似した点があり、それらの「ガ」節には話題を導入する働きがある。「*ガ→テ」が発生する理由としては、「すみませんが」などの定形表現に影響され、前件は話題導入部として「前置き」と見なされ「ガ」が使用されるが、他方で後件は中心部と見なされ、その前後件が1つのまとまりとして捉えられているからと考えられる。

「*テ→ガ」と「*ガ→テ」は、学習者と母語話者と異なる捉え方をしていることから起きていると言ってよい。学習者の捉え方として、図8-2を指摘することができる。

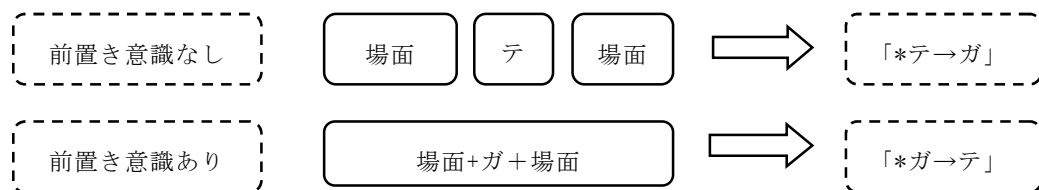


図 8-2 「*テ→ガ」と「*ガ→テ」における学習者の捉え方

第九章 「接続機能のテ形」の混用： 「テ」と条件の接続助詞との混用¹

9.1 はじめに

本章では、『YUK 作文コーパス』から抽出した「接続機能のテ形」の混用である「テ」と条件の接続助詞との混用に関する誤用例を分析する。3.3 節の図 3-5 で示したように、『YUK 作文コーパス』には「テ」と条件の接続助詞との混用は 323 例を数え、混用全体の 6 割以上を占めている。『YUK 作文コーパス』を見ると、条件の意味が入っていない「テ」と条件の接続助詞との間に次のような混用の誤用が認められる。

- (1) チベットの特色のある店がずらりと並んでいる。ぶらぶら歩いて見ていると面白かった。夜にく*なって→なるとポタラ宮の前の広場では電燈がついて、電気の光の中で高く聳えているポタラ宮はさらに立派に見える。
- (2) 各分野の適性において、利点や欠点にも共通したところがあると思う。各分野の勉強の成功と失敗を深く理解しく*て→たら、今後の勉強の助けになるだろうと思っている。
- (3) 劉さんとか温さんとかいつも日常茶飯事ばかり喋るから、あまり面白くないと思っている。しかし、ネットをく*使って→使えば、いろいろな人と喋ることができるだろう。例えば、最近よく VIXX のファンである若い子たちと喋る。
- (4) だしきに至っては、一草も一石も明らかで、いかなる一寸の土地でも無駄にしません。もし日本から何かを勉強く*して→するなら、まず、日本人の自然への畏敬の態度と土地使用への儉約する態度を学ぶと思います。
- (5) 頭のとっぺんの清らかで青い空と一緒に見ると、清くて独特な冬の風景で、気持も爽やかになった。春にく*なると→なって、鳥が鳴き、花の香りが漂う時、日本人のように友達と一緒に花見をしたいと思った。
- (6) その報道をく*見たら→見て、日本が乗り遅れている原因が大体分かった。その報道は、「質」で中国と競争するという旨である。
- (7) お互いを理解することに美德に見出す傾向があるようである。すなわち、日本人は何も言わずに、目くばせだけく*すれば→して、相手が自分の意思を分かってくれるのが最もよいと思っている。
- (8) 生から習って科学者はすごいひとだからでした。そして、どんな人になりたいかと

¹ 第九章は、廖（印刷中 c）をもとに加筆修正したものである。

聞かれたら、偉い科学者と*言いなら→言われて、褒められたことがありました。偉い科学者を目標にすることがその時の純粋なかんがえでした。

(1)～(4)は、条件の接続助詞である「ト」、「タラ」、「バ」、「ナラ」のいずれかを使用するほうが適切にもかかわらず、「テ」を使用することで生じた誤用例である。(5)～(8)は、「テ」が適切にも関わらず、条件の接続助詞「ト」、「タラ」、「バ」、「ナラ」のいずれかが使用されている誤用例である。

本章は、『YUK 作文コーパス』から抽出した「テ」と条件の接続助詞「ト」との混用を中心に考察し、混用の傾向と要因を明らかにすることを目的とする。条件の接続助詞の中で「ト」を本章での考察対象とするのは、9.2 節の分析結果が示すように、「ト」が「テ」と条件の接続助詞との混用において出現頻度の第1位を占めるからである。

「テ」と条件の接続助詞「ト」に関わる先行研究としては、2.3.3 節で述べたように「継起」用法上の使い分けを論じた中島(2007)、金澤(2008)、前田(2009)などがある。しかし、学習者による「テ」と条件の接続助詞「ト」との混用について、どのようなパターンがあるのか、またその発生要因が何であるのかについては今のところ明らかにされていない。

以下、9.2 節では「テ」と条件の接続助詞との混用実態を整理する。9.3 節では、「テ」と条件の接続助詞「ト」の混用の誤用実態を考察する。9.4 節では、「テ」と「ト」のそれぞれの意味用法を説明する。9.5 節では、「*テ→ト」の傾向とその傾向の発生要因を考察する。9.6 節では、「*ト→テ」の傾向とその傾向の発生要因を考察する。そして、9.7 節では本章で明らかになったことをまとめる。

9.2 「テ」と条件の接続助詞との混用実態

図 9-1 は、第三章の図 3-5 に従い「テ」と条件の接続助詞「ト、タラ、バ、ナラ」との混用 321 例の誤用分布を示したものである。図 9-1 が示すように『YUK 作文コーパス』に現れる「テ」と条件を表す接続助詞との混用は、「テ」と「ト」の混用が 198 例(61.31%)で最も多い。それに続くのが「テ」と「タラ」の混用 68 例(21.05%)、「テ」と「バ」の混用が 55 例(17.03%)である。「テ」と「ナラ」の混用はわずか 2 例しかない。この数値から、「テ」と条件の接続助詞との混用では、「テ」と「ト」の混用が最も現れやすいと言える。

(1)～(8)で「テ」と条件の接続助詞「ト」、「タラ」、「バ」、「ナラ」の混用例を 2 例ずつ示したが、その他の例を(9)～(16)に示しておく。(9)と(10)が「テ」と「ナラ」の混用、(11)と(12)が「テ」と「バ」の混用、(13)と(14)が「テ」と「タラ」の混用、そして(15)と(16)が「テ」と「ト」の混用である。

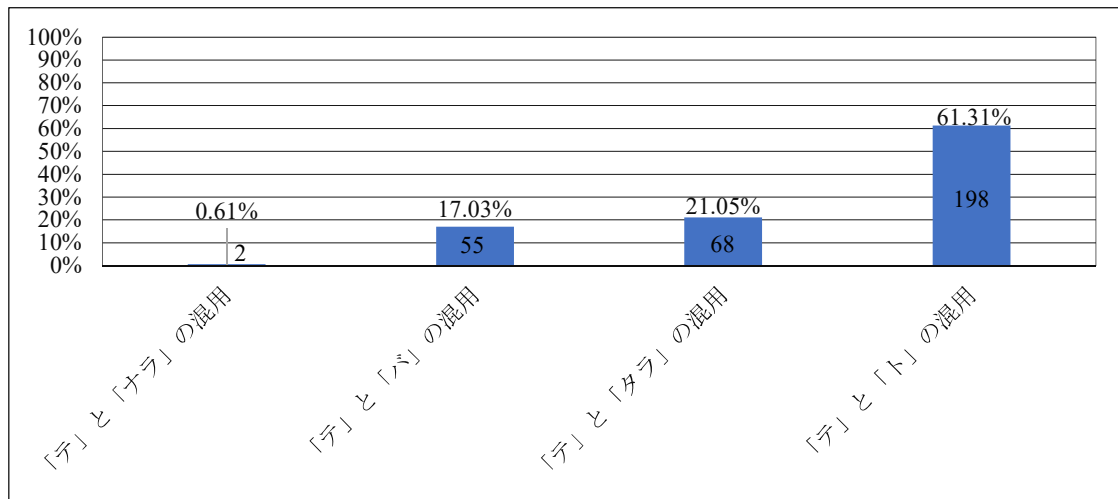


図 9-1 「テ」と条件を表す接続助詞の混用における誤用実態 (n=323)

「テ」と「ナラ」の混用

- (9) 一草も一石も明らかで、いかなる一寸の土地でも無駄にしません。もし日本から何かを勉強<*して→するなら>、まず、日本人の自然への畏敬の態度と土地使用への儉約する態度を学ぶと思います。
- (10) そして、どんな人になりたいかと聞かれたら、偉い科学者と<*言われるなら→言われて>、褒められたことがありました。偉い科学者を目標にすることがその時の純粋なかんがえでした。

「テ」と「バ」の混用

- (11) 劉さんとか温さんとかいつも日常茶飯事ばかり喋るから、あまり面白くないと思っている。しかし、ネットを<*使って→使えば>、いろいろな人と喋ることができるだろう。
- (12) 一人称の多様化なども今の習得状況を考察する上で意義がありますが、日本語教育文法から<*考えれば→考えて>、一番接触しやすい省略ということに決めました。

「テ」と「タラ」の混用

- (13) もう間に合わないと思ったとき、駅員に<*聞いて→聞いたら>、阪神電車の乗り換えはちょっと梅田から離れていると言って、連れて行ってくれたので、助かった。
- (14) 授業の後で一緒に自習室へ行った。時間は早い。それで30分もかかった。先生は直し終わって、もう一度確認<*したら→して>、わたしの手に渡した。私は「先生、一緒に食堂へ行きませんか」と聞いた。

「テ」と「ト」の混用

- (15) 彼と一緒にJRに乗って、琴平駅に行く途中、二人とも寝てしまった。琴平駅から<*出て→出ると>、人が思ったより少なかった。まだ早いから、すごしお菓子

を食べて、直接琴平神宮に出発した。

- (16) 高校を卒業したらすぐアルバイトを始めようと思っていたが、短期アルバイトはなかなか探せなかった。大学にく*入ると→入って、社会経験を積み重ねたい気持ちは徐々に強くなっている。

以上のように、「テ」と条件の接続助詞との混用では「テ」と「ト」の混用が最も著しい。そのため、本章では、「テ」と条件の接続助詞「ト」の混用のみを論じる。

9.3 「テ」と接続助詞「ト」の混用の誤用実態

『YUK 作文コーパス』から抽出した「テ」と「ト」の混用は大きく「*テ→ト」と「*ト→テ」の2種類に分けられる。この2種類の誤用は図9-2に示したように198例あり、その内訳は「*テ→ト」が156例(78.79%)、「*ト→テ」が42例(21.21%)である。

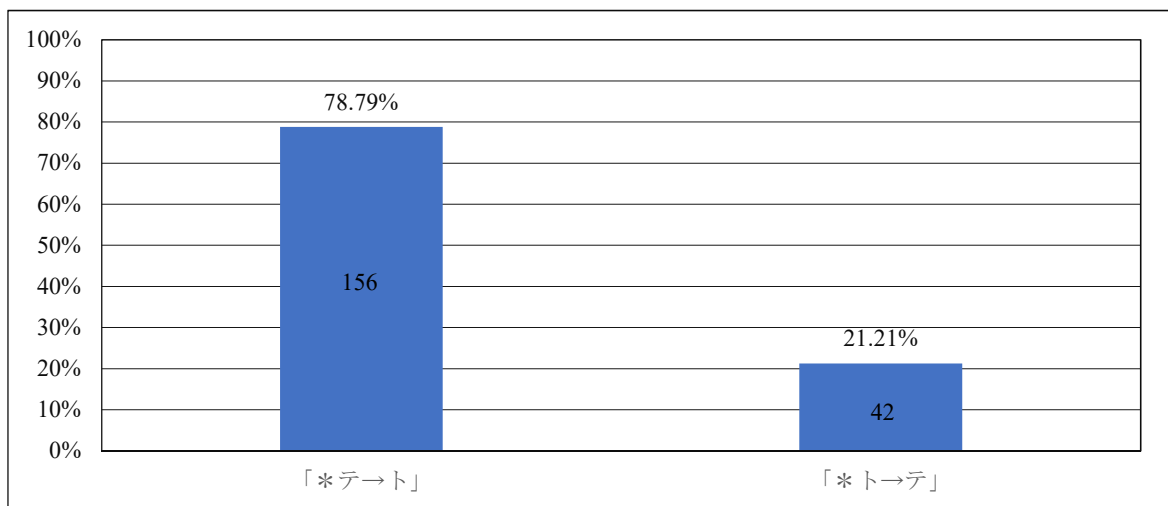


図9-2 「テ」と「ト」の混用における誤用実態 (n=198)

「*テ→ト」の混用例として(17)と(18)、「*ト→テ」の混用例として(19)と(20)がある。

「*テ→ト」

- (17) 大学に入ってから、まだ何の偉い事もしていないのに、もう4年生になる。大学生活をく*振り返って→振り返ると、さまざまな味を味わうことができる。いいにつけ、悪いにつけ、私はこの大学でほぼ3年半の時間を送った。
- (18) そのほかに、私はおいしい食べ物も好きです。インターネットでく*探してみても→探してみると、おいしい食べ物の作り方がたくさんあります。作ってみて、成功して、食べる時も幸福の瞬間の一つだと思います。

「*ト→テ」

- (19) 日中交流を促すために、還暦なのに、中国に来ました。彼の奥さんと子供は今日本にいますので、毎日「*思うと→思っ」、写真だけ見ます。その日、私もちょっと酒を飲んで、二人は一緒に夜まで歌を歌ったり、踊ったりしました。
- (20) 89歳のおじいさんと88歳のおばあさん二人はいつものように小さい椅子に座って、村の遠くを眺めている。この様子を「*見ると→見」、なんとなく話しかけてみた。あまり辺鄙なところなので、息子たちは孫を連れて年に二度ぐらいしか来ない。

「*テ→ト」の混用数は「*ト→テ」の混用数を4倍近く上回っており、数的には大きな違いがあるが、「*テ→ト」と「*ト→テ」それぞれに誤用の特徴があるため、本章では両者を考察対象とする。

9.4 「テ」と「ト」の意味用法

「テ」と「ト」それぞれの意味用法と相違点を論じておく必要がある。「テ」の意味用法はすでに2.2.2節で述べた。「ト」の意味用法は以下ようになる。中島(2007)と前田(2009)を挙げておく。

中島(2007:169)は、「ト」の意味用法を「一般条件」、「継起」、「発見」、「きっかけ」、「トキ」、「過去の習慣」の6種類に分け、前田(2009:37)は、「仮説」、「一般・恒常」、「反復・習慣」、「連続」、「きっかけ」、「発現」、「発見」の7種類に分けている。前田(2009)の「連続」は、中島(2007)の「継起」に対応する。前田(2009)が分類した7種類の意味用法の詳細を示すと、「仮説」：発話時点でまだ実現していないが、実現する可能性がある、「一般・恒常」：前後件が一般的成り立つ因果関係を持ち、主体が特定のではない、「反復・習慣」：多回的な関係を表し、主体が特定されている、「連続」：同一主体が連続的に2つの動作を行う、「きっかけ」：前後件は異主体の動作が連続的に起こる、「発現」：前件の動作が継続している最中に後件の一回的な出来事が起こり、一般に「Aが～しているとBが～した」の形を取る、「発見」：前件の動作によって、後件の状態を発見したことを表す、のようになる。

「テ」と「ト」の使い分けについては、2.3.3節を参照されたい。

9.5 「*テ→ト」

9.5.1 「*テ→ト」のスケッチ

「*テ→ト」は学習者が使った「テ」ではなく、「ト」が自然なため、誤用とされた例である。学習者がどのような状況の下で「テ」を使っているのか、スケッチをしておく。

- (21) ～ (26) を見よう。

- (21) 外の風景をく*見つめていて→見つめていると、目の前に大学生活が浮かんだ。
- (22) リサイクルショップにく*行って→行くと、家具や家電も全て新品のようで、つい買いたくなる。
- (23) ベッドに入ってから何度も寝返りを打ってどうしても寝付くことができませんでした。「どうしたの」って私がく*聞いて→聞くと、彼女は急に泣き出しました。
- (24) 彼女たちは「結婚すれば仕事できない」と思っている。もし仕事をく*し続けて→し続けると、離婚するかもしれない。仕事しつづけければ誰も家を世話しなくなる。だから、子供がいない。
- (25) 街を歩くと、クリスマス音楽が流れていて、クリスマスセールが行われていて、にぎやかだった。ある店にく*入って→入ると、冬の風物詩として欠かせないクリスマスツリーがあった。
- (26) 五十歳になったら、会社の仕事をやめて、老人たちの日本語教師になりたい。人間は誰でも大人にく*なって→なると自分の人生設計を考えるに違いない。いい設計があれば、迷わず前を向いて歩いていけると思う。

(21) は「風景を見つめている」ときに、「目の前に大学生活が浮かぶ」という事態が発生している。前田（2009）が言う「ト」の「発現」であるため、「テ」は不適切である。

(22) は、「リサイクルショップに行く」と「つい買いたくなる」が多回的な関係を成す。前田（2009）が言う「ト」の「反復・習慣」であるため、「テ」は不適切である。(23) は、「私が聞く」が「彼女は急に泣き出した」ことを引き起こす原因であり、しかも前後件が異主語による動作の連続である。前田（2009）が言う「ト」の「きっかけ」であるため、「テ」は不適切である。(24) は、「仕事をし続ける」も「離婚する」も発話時にはまだ発生していない事態である。前田（2009）が言う「ト」の「仮説」であるため、「テ」は不適切である。(25) は、「店に入る」という動作により、「鏡餅」が発見されている。前田（2009）が言う「ト」の「発見」であるため、「テ」は不適切である。(26) は、「誰でも大人になる」と「人生設計を考える」は社会の法則を表し、特定の個体に拘らない。前田（2009）が言う「ト」の「一般・恒常」であるために、「テ」は不適切である。

以上の誤用実態から、「*テ→ト」の誤用パターンは「発現」、「反復・習慣」、「きっかけ」、「仮説」、「発見」、「一般・恒常」の6種類に分けることができる。いずれも意味用法上の誤用である。

9.5.2 「*テ→ト」の詳細

前節では、「*テ→ト」の混用のパターンをスケッチした。個々の誤用パターンの実態を誤用数の大きい順に示すと、表9-1のようになる。

表 9-1 「*テ→ト」における混用の誤用パターンの詳細 (n=156)

「発見」	「仮説」	「一般・恒常」	「反復・習慣」	「きっかけ」	「発現」
85 (54.49%)	21 (13.46%)	18 (11.54%)	15 (9.62%)	13 (8.33%)	4 (2.56%)

表 9-1 に示した通り、「*テ→ト」の混用の 156 例の内訳は「発見」が 85 例で最も多く、全体の過半数を超えている。そのほかは「仮説」が 21 例 (13.46%)、「一般・恒常」が 18 例 (11.54%)、「反復・習慣」が 15 例 (9.62%)、「きっかけ」が 13 例 (8.33%)、「発現」が 4 例 (2.56%) 認められる。それぞれの例はすでに (21) ~ (26) に示しているが、その他の例も (27) ~ (38) に示しておく。

「発見」

- (27) 持ちと考え方をよく表します。自分の毎日の生活を記してよく回顧します。未来のある日、自分の日記をく*見て→見ると、その日の情景が心の中に浮かびます。
- (28) TAOBAO で日本個人旅行ビザをキーワードでく*検索して→検索すると、そういう会社が本当にありました。

「仮説」

- (29) 定年にく*なって→なると、やっと妻子と孫と楽な生活を送ることができるだろう。
- (30) 凶作になったら、収穫が少なくなると、たくさん稼ぐことができません。たとえ豊作になっても、収穫が多くく*なって→なると、農産物の値段が下がってきて、稼ぐことも難しいです。農業に従事する以上、高収入は夢です。

「一般・恒常」

- (31) 能動文の他動詞 Vt に接尾辞の「られる」をく*つけて→つけると受身動詞になる。
- (32) 経済的には自立する風潮があつて、女性が仕事をする必要がある。そして、女性が社会進出をして、金をく*稼いで→稼ぐと、夫のストレスが小さくなる。

「反復・習慣」

- (33) 昔の正月はとても賑やかだった。休みにく*なって→なると、人々はふるさとへ戻ってきた。さまざまな準備をして、新年のことを祝った。
- (34) 食堂から教室までは十五分ぐらいかかります。教室で勉強します。授業がく*終わって→終わると、友達と晩ご飯を食べます。毎晩、わたしは寝室で宿題をします。よく、わたしは音楽を聴いています。

「きっかけ」

- (35) フロントの社員に自己紹介してから、案内してもらった。事務室まで案内してもらって、2、3 分ぐらいく*待って→待つと担当者が来た。名刺を出しながら、自己紹介した。一日のスケジュールをだいたい説明してくれた。

(36) 彼女は携帯をそのままカバンの外の袋に入れていることに気づいた。「それ、大丈夫ですか」とく*聞いて→聞くと、「日本では、大丈夫」と答えた。そして、自分の体験を教えてくれた。

「発現」

(37) 私の目には、幸せの瞬間は普通のことです。小さい時、静かで面白い物語を聞いて、暖かいベットにく*横たわっていて→横たわっていると、甘い夢を見ました。そのときのこれは小さな幸せの瞬間だと思います。

(38) 招寺を囲んだ街は「八角街」と呼ばれている。チベットの特色のある店がずらりと並んでいる。ぶらぶら歩いてく*見えて→見ていると面白かった。夜になるとポタラ宮の前の広場では電燈がついて、電気の光の中で高く聳えているポタラ宮はさらに雄大に見えた。

9.5.3 「*テ→ト」の「発見」における前後件の主語及び述語の特徴

「*テ→ト」の混用は、「発見」が 5 割強を占め、最も目立つ²。この点について、詳細に検討していく。

前田（2009）は、「ト」によって結ばれた文は、前後件の主語が異なり、前件に視覚動詞、聴覚動詞、移動動詞、思考動詞、「てみる」の補助動詞、その他³が来て、後件に発見された物事の存在、状態が述べられると、「発見」の意味になると述べている。豊田（1978）は、「発見」には、後件に話者の知覚、認識が来る場合があることを指摘している。前田（2009）と豊田（1978）を踏まえ、「発見」の前後件の主語、述語の特徴をまとめると、表 9-2 のようになる。

² この結果は、吉田（1994）が台湾の 4 大学において日本語を学ぶ学部の 3、4 年生の作文及び対話を対象に分析した結果とは異なるものである。そこでは、「テ」と「ト」の混用は「発見」の「ト」に集中するという結果が得られている。吉田（1994）と『YUK 作文コーパス』の結果が異なる理由として、学習者における日本語能力の違いを指摘できるかもしれない。吉田（1994）が調査対象とした学生は構文能力がある程度安定している学部の 3、4 年生であるが、『YUK 作文コーパス』のデータは 1.2 節で紹介した通り学習歴には幅があり、学部生及び大学院生によって書かれたものである。両者から得られた結果の違いは、学習歴が重なっていない箇所、つまり「*テ→ト」の混用において「発見」以外の誤用（「仮説」、「一般・恒常」、「反復・習慣」など）は学部の 1、2 年生や大学院生が産出している可能性を示唆しているかもしれない。

³ 前田（2009:83）は、前件の動詞に特徴のなさそうな場合もあり、その例として「冷蔵庫を開けると、何も入っていない。」を挙げている。これは、「開けて中を見ると」と言うように、前件動作を行った後に、今注目されている対象を見るという本来あるべき動作が省略されている例である。

表 9-2 「発見」における前後件の主語及び述語の特徴（豊田（1978）、前田（2009）を参考に作成）

主語	前件述語	後件述語
異主語	① 知覚動詞 ⁴ （「見る」、「聞く」など） ② 移動動詞（「行く」、「来る」など） ③ 思考動詞（「考える」、「思う」など） ④ 「てみる」 ⑤ その他	I 存在（「ある」、「いる」など） II 状態（「た」、「ている」など） III 知覚（「見える」など） IV 認識（「分かる」など）

以下では、前後件の述語の使用状況を手がかりに、「*テ→ト」の「発見」を考察していく。その分類の詳細を示すと、表 9-3 のようになる（空白は誤用が『YUK 作文コーパス』に見出せていない箇所を示す。以下同様）。

表 9-3 「*テ→ト」の「発見」における混用の誤用パターン（n=85）

後件 前件	認識 (29)	存在 (21)	状態 (18)	知覚 (17)
知覚動詞 (45)	21	13	11	
移動動詞 (20)		4	2	14
思考動詞 (13)	6	2	2	3
てみる (2)		1	1	
その他 (5)	2	1	2	

表 9-3 に示した通り、前件述語で一番多いのは知覚動詞である。その際、後件述語には認識、存在、状態を表す述語が来ている。また、前件述語が移動動詞の場合は後件述語に知覚、思考動詞の場合は認識を表す述語に集中しているという状況が認められる。「*テ→ト」の「発見」の前後の主語はいずれも異主語であり、誤用例は大まかに 5 種類のパターンに分けることができる。「前後件の主語：前件動詞＋後件動詞」で整理すると、「異主語：知覚動詞＋認識」が 21 例、「異主語：知覚動詞＋存在」が 13 例、「異主語：知覚動詞＋状態」が 11 例、「異主語：移動動詞＋知覚」が 14 例、「異主語：思考動詞＋認識」が 6 例認められる。それぞれの例を (39) ～ (48) に挙げておく。

「異主語：知覚動詞＋認識」

(39) 「六和」というのは東南西北天地であり、つまり天下という意味である。近代的な

⁴ 視覚動詞と聴覚動詞を一括りにして、「知覚動詞」と呼ぶ。

建築様式や配置を広く＊見て→見ると、そのなかに含まれた中華民族の特有な対になる伝統的な審美の心理が発見される。

- (40) 夢は何ですかと聞かれると、みんな何も考えず、科学者とか、医者とか、音楽家などと答えた。しかし、大きくなって、現実を目を＊向けて→向けると、それらは簡単に実現できる夢ではないことがわかった。夢は私には手の届かない高嶺の花なんだ

「異主語:知覚動詞＋存在」

- (41) 呂さんの大学生活を＊振り返って→振り返ると、残念なことは多かれ少なかれありますが、大体満足できるだろう。

- (42) 流行語の発展史＊見渡して→見渡すと、わかりにくい言葉がほとんどない。

「異主語:知覚動詞＋状態」

- (43) 今、私は日記文を見て、心に深く感じます。まず、身の回りの生活に関心を持つことが重要です。日記文を＊見て→見ると、ボランティア活動や台風などの話題が含まれています。

- (44) 先日、日本人の友たちに「私、小さい時、よく蟬の幼虫を食べたことがあった」と＊言っ→言くと、みんなは信じられないというような顔をしていた。

「異主語:移動動詞＋知覚」

- (45) ポタラ宮を＊降りて→降りるとずらりと並んでいる転経桶が眼に入ってきた。その道で額と体を地につけて拝礼するチベット族の信者にも会った。

- (46) 歴史のある中秋節の伝統的な活動であり、独特な月餅文化である。中秋節が近づくと、廈門の賑わっている街を＊歩いて→歩くと、月餅があちこち目に入って、サイコロを振る声も時々耳にする。次に、『博餅』の由来について紹介する。

「異主語:思考動詞＋認識」

- (47) できる程度まで指導して、それで終わる傾向があります。今度の勉強で発音が如何に大切であるかということ＊考えて→考えると、指導が足りないかもしれないということが分かりました。

- (48) 休みの時、次の日学校へ行きますが彼に会えるという期待がありました。今それら＊思い出して→思い出すと、全てが幸せな瞬間です。これは愛情ではなく、単純な好きだという感情です。

「＊テ→ト」の「発見」において、学習者はなぜ「テ」を使用しているのでしょうか。前件と後件を異主語が表す別々の 2 事態からなる継起関係として捉え、「テ」を用いているという可能性が考えられる。たとえば、(39)は「異主語:知覚動詞＋認識」の例であるが、「近代的な建築様式や配置を広く見る」という知覚動詞が生じた後で、「伝統的な審美の心理が発見される」という認識が生まれている。(45)は「異主語:移動動詞＋知覚」

の例であるが、「ポタラ宮を降りる」という動作が完了した後で、「転経桶が眼に入ってきた」という知覚が自然に発生している。(47)は「異主語:思考動詞+認識」の例であるが、「考える」という思考動作に引き続き、「分かった」という認識の結果が生じている。これらの前後件はいずれも時間の流れの中で展開する異なる事態の継起関係と言えるものである。

9.5.4 まとめ

「*テ→ト」について、次のことが明らかになった。

- ① 「*テ→ト」が使われる「テ」は、節と節の間の条件性を適切に捉えていないと見なされるため、誤用とされる。
- ② 混用のパターンには、「習慣」、「発現」、「きっかけ」、「仮定」と「発見」があるが、いずれも意味用法上の混用であり、混用例全体の5割強は「発見」が占める。ただし、この数字は台湾人日本語学習者を対象に論じた吉田(1994)より低く、相違には学習歴が関わっている可能性がある。
- ③ 「発見」の混用例において、一番多いパターンは前後の主語が異主語で、前件述語が知覚動詞のときである。このとき、後件述語には認識、存在、状態を表す述語が現れる。そのほかの混用パターンとしては、前件動詞が移動動詞のとき後件述語は知覚、思考動詞のとき認識を表す述語に集中しているという傾向がある。
- ④ 「発見」が最も多い理由としては、前後件を異主語が表す別々の2事態の継起関係として捉え、「テ」を用いている可能性が考えられる。

9.6 「*ト→テ」

9.6.1 「*ト→テ」のスケッチ

「*ト→テ」は学習者が使った「ト」ではなく、「テ」のほうが自然なため、誤用とされた例である。学習者がどのような状況の下で「テ」を使わないのか、スケッチしておく。

(49) ~ (52)を見よう。

(49) 日本にはたくさん美しい景色があり、優しい人がいて、優秀な文化がある。私は日本の美しさを<*見ると→見て>、何度も感動している。いつも家族と「いつか日本へ行きたい」という言葉を話している。

(50) あなたは桜がすきだ。あれはとてもすばらしいシンボルと思う。一斉に<*咲くと→咲いて>、あっという間に散る。その景色のなんと美しいことか。あなたが創造したアニメが全世界で流行している。

(51) 表面から見れば、無料で取り替えるのは、生産者側が損を受けるが、実は消費者

側が良い消費体験を<*もらうと→もらって>、またそのブランドの製品を選んだら、かえって利益を受けるのは生産者側である。日本人の商人は賢い。

(52) 人間というものは、世の中に気を取られている時、よく自分を見失う。賑やかや世界に<*入ると→入って>、自分の方向を見失って、華やかな外側のことを気にすると、精神的な方面に乏しくなる。

(49) は、「日本語の美しさを見る」が感情表現の「感動している」理由として認められ、前後が「因果」関係にあるため、誤用となる。(50) は、「咲く」と「散る」は同じ場面に発生し、また「あっという間に」という副詞から前後件が連続している動作の描写であることが分かる。前田 (2009) が言う「1 つの場面における一連動作の描写」であるため、誤用となる。(51) は、条件表現が重複しており⁵、誤用となる。(52) は、「入る」と「見失う」と「気にする」という 3 つの動作が連続している。金澤 (2008) が言う「2 つの動作の連続のみ可」であるため、「ト」は不適切となる。また、吉永 (2012) の「テ」の意味分類に従うと、(50) ~ (52) は「因果」と見なすことはできない。

以上から、「*ト→テ」については、(49) のような「因果」、(50) のような「1 つの場面における一連動作の描写」、(51) のような条件表現の二重の使用（以下、「条件表現の二重使用」）、(52) のような「2 つの動作の連続のみ可」が誤用とされる要因となる。「*テ→ト」の誤用が専ら意味用法に集中しているのとは異なり、「*ト→テ」の場合、意味用法に関する誤用は「因果」のみである。

9.6.2 「*ト→テ」の詳細

「*ト→テ」の 42 例の誤用パターンは「因果」、「1 つの場面における一連動作の描写」、「条件表現の二重使用」、「2 つの動作の連続のみ可」という 4 種類のどれかに振り分けることができる。その詳細を示すと、表 9-4 のようになる。

表 9-4 「*ト→テ」における誤用のパターン (n=42)

「因果」	「1 つの場面における一連動作の描写」	「条件表現の二重使用」	「2 つの動作の連続のみ可」
22 (52.38%)	10 (23.81%)	6 (14.29%)	4 (9.52%)

表 9-4 に示した通り、42 例の内訳は「因果」が 22 例 (52.38%)、「1 つの場面における一連動作の描写」が 10 例 (23.81%)、「条件表現の二重使用」が 6 例 (14.29%)、「2 つの

⁵ 蓮沼他 (2001) は 2 つ以上の条件を繋げる場合の構文を次のように提示している。[X1]テ [X2]バ・タラ [Y]

動作の連続のみ可」が 4 例 (9.52%) である。それぞれの例はすでに (49) ~ (52) に示しているが、その他の例としては (53) ~ (60) がある。

「因果」

- (53) 日本では、高齢者の孤独死が急増し、それにそれが大きな社会問題のひとつとなっていることをく*聞くと→聞いて、私は大変びっくりした。
- (54) この温かいフィルムを見く*ると→て私は感動しました。私は両親と過す時間をもっとも惜しくて大切だと思う。

「1つの場面における一連動作の描写」

- (55) 中国人の経営方法を学び、少しずつお金を稼ぐ。一生懸命く*働くと→働いて2、3年後に自分の店を開く。小さいかも知れないが大きくなっていくと思う。
- (56) 成績がそんなにあがらなかったし、おまけに、彼みたい人とも付き合えなかった。よく考えてく*みると→みて、やっと分かった。自分には自分なりの人生がある。

「条件表現の二重使用」

- (57) 最初はこの諺を全然認めていませんでした。それに買い物も好きではありませんでした。しかし、大学生にく*なると→なって、自分のお金を使えるようになったら、すぐ買い物が好きになりました。
- (58) 光陰矢のごとしと言う通り、瞬く間にもうすぐ大学生活が終わる。もし時間を後戻りすることがく*できると→できて、もう一度大学生活を体験できたら、私は大学の時間を大切にしたい。

「2つの動作の連続のみ可」

- (59) 仕事をく*終わると→終えて、家に帰ると、父と母が笑顔で出迎えてくれる。
- (60) 父の分のご飯を茶碗にく*入ると→入れて、その間に出来上がった料理を大皿にのせて、テーブルに持ってくると、父は、「美味しそう」と言った。

「因果」が全体の半分を超えているが、それらには (53) と (54) のように後件に「びっくりする」、「感動する」などの感情表現が現れるという特徴がある。

9.6.3 「*ト→テ」の「因果」における前後件の主語及び述語の特徴

「*テ→ト」と同様に、「*ト→テ」の「因果」においても前後件の主語と述語にはある傾向が見られる。その傾向を示したものが表 9-5 である。前後件の主語は、それが同一主語か異主語かによって 2 種類に分けられ、同一主語はさらに一人称か非一人称かによって、2 種類に分けられる。前後件の述語は 9.4.3 節を参照し、「知覚動詞」、「思考動

詞」と「その他」の 3 種類に、そして後件述語は感情表現であるか否かによって異なる傾向が見られるので、「感情表現」と「非感情表現」の 2 種類に分けられている。

表 9-5 「*ト→テ」の「因果」における形式上の傾向 (n=22)

前後件の述語 主語		知覚動詞 +	思考動詞 +	その他 +
		感情表現	非感情表現	非感情表現
同一主語 (20)	一人称 (16)	13	3	
	非一人称 (4)	3		1
異主語 (2)				2

表 9-5 に示した通り、「*ト→テ」の「因果」においては、前後件の主語が同一主語の例は、「同一主語（一人称）：知覚動詞＋感情表現」が 13 例、「同一主語（一人称）：思考動詞＋非感情表現」と「同一主語（非一人称）：知覚動詞＋感情表現」がそれぞれ 3 例、「同一主語（非一人称）：その他＋非感情表現」が 1 例認められる。前後件の主語が異主語の例は、「異主語：その他＋非感情表現」が 2 例認められる。それぞれの例は (61) ～ (69) に挙げておく。

前後件の主語が同一主語

「同一主語（一人称）：知覚動詞＋感情表現」

(61) 彼の話をつ<*聞くと→聞いて>、すごく感動した。それは「活到老，学到老」であると感じた。

(62) 小さいとき、ある日、父は私を連れてプールに行った。最初はとても楽しかったが、深い池をつ<*見ると→見て>、怖くてたまらなかった。

「同一主語（一人称）：思考動詞＋非感情表現」

(63) つまらないと<*思うと→思って>、すぐ眠くなる。その大学生たちはあの重要な場合で寝るのは失礼する。

(64) 成績がそんなにあがらなかったし、おまけに、彼みたい人とも付き合えなかった。よく<*考えたと→考えて>、やっと分かった。自分には自分なりの人生がある。

「同一主語（非一人称）：知覚動詞＋感情表現」

(65) 「ちょっと、ちょっと、ちょっと」は、明らかに許さないという意味である。平次はそんな千里が店に入るのを<*見ると→見て>、驚いている。

(66) その若者は結果をつ<*見ると→見て>とても悲しくなった。

「同一主語（非一人称）：その他＋非感情表現」

(67) 彼女はその原因を<*受け止めると→受け止めて>、納得できました。

前後件の主語が異主語

「異主語：その他＋非感情表現」

(68) 自分もどうにかできそうな気が<*すると→して>すごく自信が湧いてきました。

いわゆる Confidence (自信) やればできそうということでしょう。

(69) 私たちはいろいろな活動に<*参加すると→参加して>仲がよくなりました。例えば、歌の試合、秋の観光、各種のクラス会など。

「*ト→テ」の「因果」の誤用例において、最も多いパターンは、前後件の主語がいずれも一人称で、前件述語が知覚動詞、後件述語が感情表現のときである。このとき「テ」ではなく、「ト」が使われているのはなぜであろうか。(61) と (62) を例にすると、(61) の「話を聞く」という動作と「感動した」という感情、(62) の「深い池を見る」という行為と「怖くてたまらなかった」という感情は、時間的にはほぼ同時に起きていると言えるものである。

学習者は、一人称による前件の知覚と後件の感情の発生とを同時に起きる近接継起関係として捉え、「発見」の「ト」を使っていると考えられる。中島 (2007:258-259) は「発見」の「ト」に対応する中国語表現 (前件に条件接続形式がなく、後件に“就”がある形式) について対照分析を行っているが、その際の例として挙げられているのが (70) のように『雪国』の冒頭部分である。

(70) J: 国境の長いトンネルをぬけると、雪国だった。

C: 穿过县界长长的隧道，就是雪国。

中島 (2007:258-259) は、上の中国語訳について、前件には条件接続形式がないが、後件に“就”があり、近接継起関係の条件表現になっていること、そして後件も状態性述語であって、発見の「ト」を直訳することができると述べている。

9.6.4 まとめ

「*ト→テ」については、次が明らかになった。

- ① 「*ト→テ」の混用パターンについては、「因果」、「1つの場面における一連動作の描写」、「条件表現の二重使用」、「2つの動作の連続のみ可」がある。そのうち、「因果」のみが意味用法に関する混用であり、全体の半分を超えている
- ② 「因果」の誤用例において一番多い誤用パターンは、前後件の主語がいずれも一人称で、前件に知覚動詞、後件に感情表現が来るときである。

- ③ 「ト」を使用している理由としては、一人称による前件の知覚と後件の感情の発生とが同時に起きる近接継起関係として捉えられ、「発見」の「ト」を使っている可能性がある。

9.7 おわりに

『YUK 作文コーパス』から抽出したデータをもとに、「テ」と条件の接続助詞の混用について考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

「テ」と「ト」の混用については、「*テ→ト」が「*ト→テ」の4倍近く現れているように「*テ→ト」が起こりやすい。

「*テ→ト」の混用の誤用パターンとしては、「仮定」、「習慣」、「きっかけ」、「発見」、「発見」の5種類があり、「発見」が誤用の5割強を占める。「発見」の誤用例で最も多いパターンは、前後件の主語が異主語で、前件の動詞が知覚動詞、後件の述語が認識、存在、状態のときである。「テ」を使用している理由としては、前後件が異主語による別の場面であるため、その異なる2つの場面を継起関係にあるものとして捉えている可能性が考えられる。

「*ト→テ」の混用の誤用パターンとしては、「因果」、「1つの場面における一連動作の描写」、「条件表現の二重使用」、「2つの動作の連続のみ可」がある。そのうち「因果」のみが意味用法に関わる誤用であり、誤用例の過半数を占める。「因果」の誤用で最も多いパターンは前後件の主語が同主語の一人称で、前件の動詞が知覚動詞、後件の述語が感情表現のときである。「ト」を使用している理由としては、一人称による前件の知覚と後件の感情の発生とが同時に起きる近接継起関係として捉えられ、「発見」の「ト」を使っている可能性がある。

以上の分析結果から「*ト→テ」と「*テ→ト」の最も発生しやすい混用パターンは図9-3のようになる。⇒は前件が完了した後で後件が起こるという継起関係を示し、＝は前後件が同時に起こる時間的關係を示す。

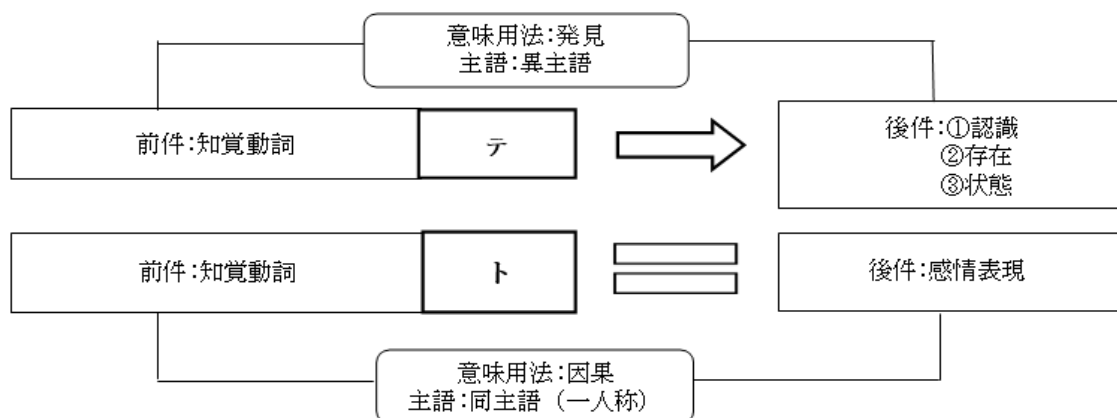


図 9-3 「*ト→テ」と「*テ→ト」において最も発生しやすい誤用パターン

第十章 結 論

「テ形」は初級の比較的早い時期に導入され、その簡便さから簡単に使われがちである。また、「テ形」による接続は意味の範囲が多岐に渡っているため、学習者にとって使いやすく、過剰に使用されてしまうことがある。こうした点が学習者の作文に「テ形」の誤用が多く見られる引き金になっている。学習者の「テ形」に関する誤用実態を把握するには、誤用の全体像を把握したうえで、誤用の傾向及びその発生要因を解き明かさなければならない。

本研究で試みてきたことは、『YUK 作文コーパス』から抽出した学習者の誤用データを分析し、動詞の「テ形」の誤用実態と発生要因を究明することであった。その際、形式上の誤用においては「活用の誤用」を、統語上の誤用においては誤用数が多い「述語形成機能のテ形」と「接続機能のテ形」を研究対象とした。

本章は、本研究の結論として、10.1 節では各章で考察した「活用の誤用」、「述語形成機能のテ形」、「接続機能のテ形」それぞれの誤用傾向と発生要因を整理する。10.2 節では 10.1 節に従い、学習者が「テ形」に関して持っている日本語母語話者とは異なる独自の捉え方を述べ、10.3 節ではその理由を述べる。そして、10.4 節では今後の課題を述べる。

10.1 本研究のまとめ

第一章において、本研究はその目的が動詞の「テ形」の「活用の誤用」、「述語形成機能のテ形」、そして「接続機能のテ形」の誤用パターンを分析したうえで、その誤用の傾向及び発生要因を明らかにすることにあると述べた。この研究目的に従い、第四章から第九章にかけて「テ形」に関する多様な誤用を考察した。その結果、以下が明らかになった。

10.1.1 「テ形」の活用形における傾向と要因

第四章では動詞の「テ形」における活用の誤用例の分析を行い、発生しやすい誤用パターンの傾向及びその発生要因を考察した。

誤用パターンは大まかに 3 種類に分けることができる。第一は、日本語と中国語の音声上の違いに起因する誤用である。誤用パターンとして、「促音の挿入」、「有声無声の混用」と「母音の長短の混用」がある。これらのうち「促音の挿入」は、正用が「一て」となる一段動詞、サ変動詞、カ変動詞に認められ、その数は誤用数全体の半分近くを占めている。しかし、一段動詞の場合、「五段動詞との混用」によって促音が現れている可能性もあり、「促音の挿入」が誤用数全体の半数近くを占めると言えるかどうかはさらに検討が必要である。

第二は、活用の変形の基準の違いによる誤用である。誤用パターンとして、「一段動詞との混用」と「マス形との混用」が認められる。ここには「テ形」を「辞書形」に基づき作ったのか、それとも「マス形」に基づき作ったのかという作り方が関与している。「辞書形」に基づき「テ形」を作った誤用は「る」、「う」、「く（「行く」を除く）」で終わる五段動詞に認められる。ただし、「る」は「辞書形」のみを基準とするが、「う」と「く（「行く」を除く）」は「マス形」を基準とするほうが多い。他方、「行く」と「ぐ」、「む」、「ぶ」で終わる五段動詞の誤用はもっぱら「マス形」に基づいている。動詞の変形は「マス形」ではなく「辞書形」からのほうが有益であることはつとに指摘されているが、「活用の誤用」はその点が欠けていることを示す。

第三は、動詞の活用形に乗り換えによる誤用である。誤用パターンとして、「く」で終わる五段動詞と「行く」の混用がある。これは「テ形」を作る際に「く」で終わる五段動詞と「行く」とが相互に影響しあい、動詞の活用形に乗り換えが生じたと考えられる。

10.1.2 「述語形成機能のテ形」における不使用と過剰使用の傾向と要因

第五章では「述語形成機能のテ形」における不使用と過剰使用の誤用例の分析を行い、発生しやすい誤用パターンの傾向及びその発生要因について考察した。

「述語形成機能のテ形」の不使用には、「文法的アスペクトにおけるテ」、「受益におけるテ」と「V1 テ V2 におけるテ」3種類のパターンがある。これらのパターンが共有する傾向として、「V1+テ+V2」における「テ」の不使用は、V1 が五段動詞より一段動詞のほうが起きやすいといった点を指摘できる。その要因としては、「テ形」への変形の複雑さの違いが考えられる。五段動詞は一段動詞より活用が複雑なため、学習者の注意はその分だけ音便形に及ぶが、一段動詞は五段動詞に比べ「テ形」への変形は簡単であり、その分だけ学習者の注意も希薄となり、「テ形」の不使用が多く現れていると考えられる。その他にも、「マス形」の変形規則の過剰般化で、「マス形」から「ます」を取った形式に後続動詞を繋げている可能性も考えられる。

「文法的アスペクトにおけるテ」の不使用は、「V2」が移動動詞のときに多く現れる。その理由としては、中国語「趨向補語」（「方向補語」）からの直訳が考えられる。「受益におけるテ」の不使用において、「V2」に非尊敬語動詞が現れる理由としては、「マス形」の変形規則の過剰般化が関与し、「マス形」から「ます」を取った形式で非尊敬語動詞を繋げていることが考えられる。その際、「中止形+くださる/いただく」の誤用が「中止形+くれる/もらう」の誤用に何か関与している可能性もある。「V1 テ V2 におけるテ」が現れる理由としては、学習者独自の造語が考えられるが、すべての例を直訳と言えるかは明らかではない。

「述語形成機能のテ形」の過剰使用は、「統語的複合動詞におけるテ」にしか現れず、その際、後項動詞に現れるのはアスペクトを表す「始める」、「続ける」、「終わる」に限られる。前項動詞と後項動詞が表す 2 事態を別の場面として捉え、その 2 場面を「テ」で繋げていることが「統語的複合動詞におけるテ」の過剰使用に関わっている。後項動詞に現れるアスペクトを表す 3 つの動詞のうち「始める」の例が最も多く現れるのは、開始時が継続時と修了時よりも変化を捉えやすいからであろう。「始める」には、また、「～てはじめて」という類似表現との混同も考えられる。

10.1.3 「接続機能のテ形」における不使用と過剰使用の傾向と要因

第六章では「接続機能のテ形」における不使用と過剰使用の誤用例の分析を行い、発生しやすい誤用パターンの傾向及びその発生要因について考察した。

「接続機能のテ形」については、過剰使用が起こりやすい。その一方で、文体上の傾向として、過剰使用においても不使用においても「だ・である体」に集中しているという共通特徴がある。過剰使用が「だ・である体」に集中しているのは、「だ・である体」の文に「テ形」の使用は不自然であるという文体上の事情が大きく関わっている。他方、不使用に「だ・である体」が多く見られるのは、学習者は硬い文章を書く際、「中止形」で区切りをつけるという意識を持っているためと考えられる。

形式上の傾向として、過剰使用と不使用を問わず、読点の「、」を使用した誤用例が多くある。この読点は学習者が読点の前後に区切りがあるという意識を持っていることを示している。その際、過剰使用は「テ形＋読点」を使用することで、学習者は「読点」で節と節との間に区切りがあることと同時に、「テ形」でその両者が繋がっていることを表している。不使用は、学習者が「中止形」と「テ形」を交える状況を判断できず、「テ形」が使えていないことを示している。

10.1.4 「テ」と理由の接続助詞との混用における傾向と要因

第七章では「接続機能のテ形」における「テ」と理由の接続助詞との混用を考察し、「*テ→ノデ、カラ、タメニ」と「*ノデ→テ」、「*カラ→テ」の誤用傾向及びその発生要因について考察した。混用の発生しやすい誤用パターンは、「*テ→ノデ、カラ、タメニ」が「*テ→ノデ」、「*ノデ、カラ、タメニ→テ」は「*ノデ→テ」と「*カラ→テ」である。

「*テ→ノデ、カラ、タメニ」は学習者が使った「テ」に、因果関係の必然性が薄い「契機的因果関係」を読み取ることができないことで誤用であるが、同時に統語制約である「動詞の意志性制約」と「モダリティ制約」が絡み合うことがある。その際、「テ」を使用する理由として、2 つのことが考えられる。1 つは、学習者が理由を表す「テ」を

「契機的因果関係」を表すときにも使えるとして使用し、また守るべき統語制約もよく把握せず、誤用を生じさせているというものである。もう 1 つは、因果関係の読みを意味の繋がりに委ねる場合に、学習者は「ノデ」などの接続助詞を使用せず、「テ」を用いてしまう可能性が考えられる。

「*ノデ→テ」については、学習者は「ノデ」によって自然に感情が導き出される「必然的因果関係」も表すことができると見なし、「ノデ」を使用している。「*カラ→テ」については、学習者は日本語母語話者が前後文に「時間的継起性」を読み取るときであっても、「カラ」を使用している。語形の類似性から、学習者は「カラ」が時間的關係を表現できると誤認識し、「テ」を使うべきところに「カラ」を使用していると考えられる。

10.1.5 「テ」と逆接の接続助詞との混用における傾向と要因

第八章では「接続機能のテ形」における「テ」と逆接の接続助詞との混用を考察し、その誤用傾向及び発生要因を明らかにした。

「*テ→ガ、ノニ、テモ」で最も混用が多いのは「*テ→ガ」であり、「*ガ、ノニ、モノノ→テ」で最も混用が多いのは「*ガ→テ」である。「テ」と「ガ」との間で混用は発生しやすいが、「*テ→ガ」が「*ガ→テ」の 2 倍近く現れているように「*テ→ガ」のほうが起こりやすい。

「*テ→ガ」の混用パターンには、いずれも意味用法上の誤用である「前置き」、「逆接」、「対比」と「譲歩」があり、混用の過半数は「前置き」が占めている。「前置き」が最も多く現れている理由としては、前置きがないと唐突な感じを与える日本語とは異なり、中国語では前置きが無くても相手を不快させないこと、また前置き表現に関する認識が不足していることが考えられる。こうした理由から、学習者は、前件を「前置き」と捉えず、しかも前後件の事態を個々に独立した場面と捉え、「テ」でその前後を繋げていると考えられる。

「*ガ→テ」の混用パターンとしては、「原因・理由」、「ガの二重使用」、「継起」、「対比」がある。これらのうち「継起」、「原因・理由」と「ガの二重使用」には「前置き」と類似した点があり、「ガ」節で話題が導入され、後件で前件の話題の続きが述べられる。その際「すみませんが」などの定型表現に影響され、前件は話題導入部として「前置き」と見なされ「ガ」が使用されるが、他方で後件は中心部と見なされ、前後件は 1 つのまとまりとして捉えられていると考えられる。

10.1.6 「テ」と条件の接続助詞との混用における傾向と要因

第九章では「接続機能のテ形」における「テ」と条件の接続助詞との混用を考察し、その誤用傾向及び発生要因を明らかにした。「テ」と条件を表す接続助詞「ト、タラ、バ」

との混用では、「テ」と「ト」との間の混用が最も多い。その際、「*テ→ト」の誤用数は「*ト→テ」のそれを大幅に上回っている。

「*テ→ト」の混用パターンには、「習慣」、「発現」、「きっかけ」、「仮定」と「発見」があるが、いずれも意味用法上の誤用である。その際、「発見」が「*テ→ト」の混用全体の5割強を占める。混用が最も多いパターンは、前後の主語が異主語、前件述語が知覚動詞、そして後件述語が認識、存在、状態を表す述語のときである。「発見」が最も多い理由としては、学習者が異主語による前後件の2事態を時間に沿って起こる別の場面として捉え、「テ」で繋げている可能性が考えられる。

「*ト→テ」の混用のパターンについては、「因果」、「1つの場面における一連動作の描写」、「条件表現の二重使用」、「2つの動作の連続のみ可」がある。その際、「因果」のみが意味用法に関する誤用であり、「*ト→テ」の混用全体の半分以上を超える。「因果」の混用において最も多い誤用パターンは、前後件の主語がいずれも一人称で、前件に知覚動詞、後件に感情表現が来るときである。「ト」を使用している理由としては、一人称による前件の知覚と後件の感情の発生とが同時に起きる近接継起関係として捉えられ、「発見」の「ト」が使われている可能性がある。その際、中国語で近接継起関係を表す「就」を「ト」に対応させるという点に関わっている可能性がある。

10.2 動詞の「テ形」における学習者独自の捉え方

第五章から第九章の分析から、動詞の「テ形」における学習者独自の捉え方を、以下の5点にまとめることができる。

第一の独自の捉え方は、動詞と動詞を繋げる際に「テ」を使用せず、複合動詞化を起こすことである。その際、「V1+テ+V2」の「テ」の不発生が過程はさまざまである。「V1」の「テ形」への変形の複雑さの違い、「V2」に見られる中国語「趨向補語」からの直訳、学習者独自の造語、あるいは「V1」と「V2」の間に連続性を感じず「テ」を使用していないなどがある。

第二の独自の捉え方は、節と節を繋げる際に「テ」を過剰に使用することである。その際には形式上の傾向として、読点の「、」を使用した例が多くを占める。過剰使用は「テ形+読点」を使用することで、学習者は「読点」で節と節との間に区切りがあることに加え、「テ形」でその節と節とが繋がっていることを表している。

第三の独自の捉え方は、前後件が「契機的因果関係」で繋がれ、後件にモダリティあるいは意志動詞が現れる場合には「テ」を使用し、前後件が「必然的因果関係」あるいは「時間的継起関係」で繋がれる場合には「ノデ」または「カラ」を使用することである。学習者は母語話者と逆の捉え方をしていると言える。学習者の捉え方は第七章の図 7-2 で示したが、再度図 10-1 として示しておく。

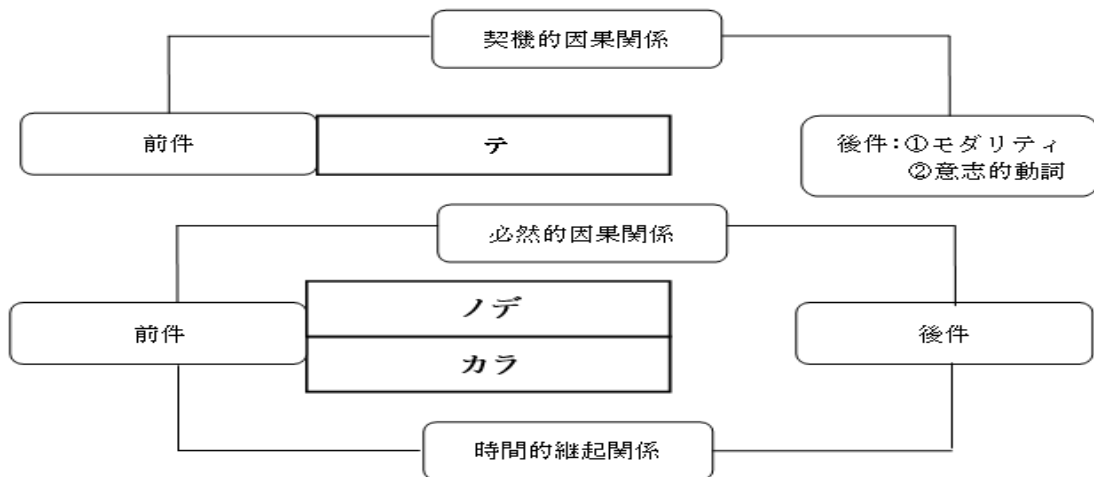


図 10-1 「*ノデ/カラ/タメニ→テ」と「*ノデ/カラ→テ」における学習者の捉え方

第四の独自の捉え方は、「前置き」に関わる。学習者は前置き表現に関する知識や認知度が不足している場合にはその前後を「テ」で繋げ、他方、「前置き」の意識を持っている場合には話題導入部を前置きと見なし、「ガ」を使用してしまう。この点も学習者と母語話者が異なる捉え方をしていることから起きている。学習者の捉え方は第八章の図 8-2 で示したが、再度図 10-2 として示しておく。

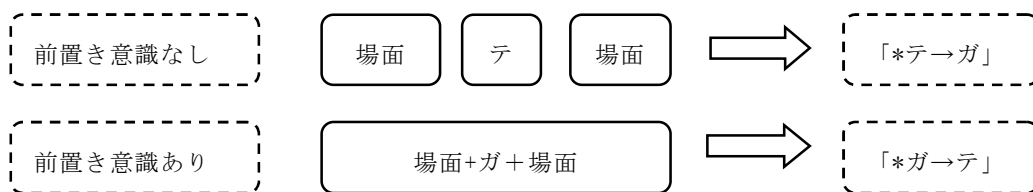


図 10-2 「*テ→ガ」と「*ガ→テ」における学習者の捉え方

第五の独自の捉え方は、前件に知覚動詞が現れる場合である。学習者は前件の人が知覚した結果、後件に前件と異なる人が為した認識、存在などといった発見を表す状態性述語が来る場合に「テ」を使用し、他方、前件で自らが知覚した結果が後件で自らの心が表す感情の表出の理由となる場合に「ト」を使用する。この捉え方も母語話者と正反対となる。学習者の捉え方は第九章の図 9-3 で示したが、再度図 10-3 として掲示しておく。

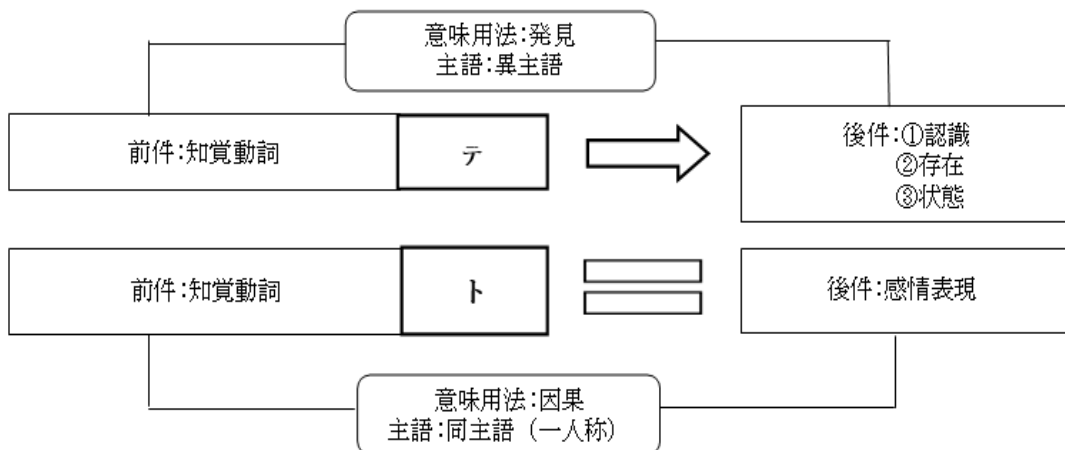


図 10-3 「*ト→テ」と「*テ→ト」における学習者の捉え方

以上の分析結果から、「テ」の不使用は動詞と動詞の間に発生しやすく、過剰使用は節と節の間に発生しやすいことが分かった。そして、混用の発生は学習者と母語話者との捉え方の違いによって生じたと考えられる。

10.3 学習者独自の捉え方が生じる理由

前節において、学習者が母語話者と異なる捉え方を持っているため、「*テ→Y」と「*X→テ」の誤用が生まれていると論じた。学習者独自の捉え方が生じる理由はどこにあるのであろうか。

「*テ→Y」が発生している根本的な理由は、「テ」は意味が多岐に渡っているため、その分だけ学習者にとって使い勝手が良く、簡単な接続方法であるという点に尽きる。動詞の「テ形」の誤用 1191 例のうち「統語上の誤用」は 948 例であり、その 4 割近い 379 例を「*テ→Y」が占めるのは、そのためである。前後件を単に「テ」で繋げることで誤用の文になってしまったということもあるであろう。他方で、学習者が「テ」の前と後ろの事態を 1 場面として捉えているのか、それとも 2 場面として捉えているのかといった点も関わっているのではなかろうか。学習者は前後件の事態に関連性を感じず、単に時間的な流れに沿って展開する別々の 2 場面と見て、「テ」を用い、その 2 場面を繋げていると考えられる、繋げるというよりは、後の事態まで学習者の注意が及ばず「テ」を使用していることから、結ぶと表現するほうが実態をよりの確に表しているかもしれない¹。「*テ→Y」における学習者の捉え方を示すと、図 10-4 のようになる。

¹日本語母語話者であれば、異なる 2 事態が因果、逆接、条件いずれかの関係にあるとき、1 場面に捉え、「テ」以外の接続助詞を使用している。

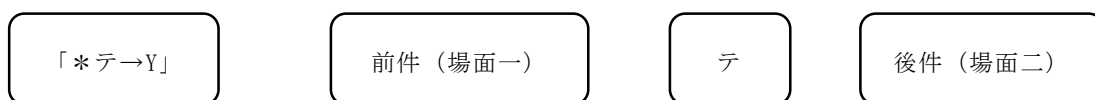


図 10-4 「*テ→Y」における学習者の捉え方

他方、「*X→テ」の場合は「*テ→Y」とは異なり、学習者にとっては相応しい接続助詞が誤用と判断されたものである。動詞の「テ形」における「統語上の誤用」948 例のうち 133 例は、前後件の事態に関連性を感じ、その前後を 1 つのまとまりとして 1 場面の中で捉えているため、学習者は最も使いやすい「テ」ではなく、それ以外の接続助詞を使用していると考えられる¹。「*X→テ」における学習者の捉え方を示すと、図 10-5 のようになる。

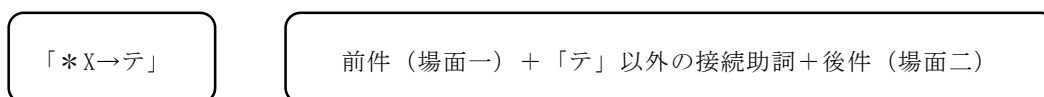


図 10-5 「*X→テ」における学習者の捉え方

こうした場面性の違いは、たとえていうならば、学習者にとって「テ」は写真を 1 枚 1 枚順に眺めるように非連続なものを結ぶためのものであり、日本語母語話者にとって「テ」は映画を見るように連続的な繋がりを表すためのものとなりうるであろう。学習者はこのような場面の捉え方の違いにより、「テ」を過剰に使用したり、使用しなかったりするものである。

10.4 今後の課題

本研究では、『YUK 作文コーパス』を用い、学習者に見られる動詞の「テ形」の「活用の誤用」、「述語形成機能のテ形」と「接続機能のテ形」の誤用について、主な誤用パターンを明らかにし、その誤用要因を考察した。そして、誤用をもたらす学習者独自の捉え方が生まれる理由として、場面性の観点からその可能性を論じた。前節で示した見方を立証することは難しいが、解明は学習者の誤用減少に繋がっていく今後に残された重要な課題であり²、是非解明に努めたい。

¹ 日本語母語話者であれば、前件と後件の事態に切れ目を感じず、連続した場面として捉えるため、他の接続助詞よりも従属度の高い「テ」で繋ぐほうが適切と見なし、「テ」を用いている。

² 井上 (2012) は、日本語と中国語における場面の捉え方の違いについて、テンスを有する日本語には変化を叙述するために必要な時間の流れが述語形式に内包されているが、一方、中国語では、2 枚のスライドを組み合わせて動画にするのと同じように動作と結果を組み合わせ、変化を構成的に叙述すると述べている。また、唐 (2019:174) は、「そして」と「それから」の混用を考察し、日本語母語話者と異なり、学習者は前後文に区切り性がある場合には連続性を持っている「そして」を使用し、連続性がある場合には区切りを備えている「それから」を使用する傾向があると述べている。

そのほかにも、本研究では動詞の「テ形」のみを論じたため、他の品詞の「テ形」については考察していない。今後は動詞の次に誤用数が多いイ形容詞の「テ形」の誤用実態についても明らかにしていきたい。また、本研究では動詞の「テ形」について、学習者の誤用実態とその傾向に中心を置き考察したため、学習歴には触れていない。ただし、第四章で論じた「テ形」の活用形の誤用と第九章で論じた「テ」と「ト」の混用には、本研究と先行研究との間に一致を見ない点があり、その要因として学習者の学習歴の違いが候補になりうることを註に指摘した。こうした相違は学習者が日本語を学んでいく過程で、どの誤用がどの時期に起きやすいのか、またどの時期に起きにくいのかを探る上で重要な鍵になる可能性がある。学習歴別の誤用傾向及び要因についても考察していきたい。さらに、本研究は書き言葉に焦点をあて、話し言葉には触れていない。話し言葉にどのような誤用があるのか検討する必要がある。この点についても、今後の課題としたい。

参考文献

日本語・英語文献

- 秋口まどか・鄭賢熙（2002）「初級・中級の日本語学習者の文章表現について－中国人留学生・韓国人留学生の事例－」『留学生センター紀要』5、51-59.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 池上素子（2010）「因果関係を表す『結果』の用法」『日本語教育』144、109-119.
- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社.
- 井上優（2012）「テンスの有無と事象の叙述様式－日本語と中国語の対照－」影山太郎・沈力編『日中理論言語学の新展望②意味と構文』くろしお出版、1-26.
- 于康（2011）「『中国語母語話者の日本語習得プロセスコーパス』『中国語母語話者の日本語誤用コーパス』の構築と中国語母語話者の日本語誤用研究のストラテジー」『エクス：言語文化論集』7、75-93.
- 于康（2012）「『ねじれ誤用』について－中国語母語話者のテンス・アスペクトの誤用をてがかりに－」漢日対比言語学研究（協作）会・杭州师范大学日语系合編『漢日语言对比研究论丛（第3辑）』北京大学出版社、32-45.
- 于日平（1998）『原因・理由・目的表現の相関性についての研究：「タメニ」「ノデ」「カラ」「ヨウニ」を中心に表現の相関性についての研究』筑波大学文芸・言語研究科博士論文.
- 内丸裕佳子（2005）「形態と統語構造との相関－テ形に関する分類方法の検討－」『筑波応用言語学研究』12、15-28.
- 江口匠（2015）「<逆接>を表す「て」をめぐって」『人文』14、59-77.
- 王亜婷（2021）『前置き表現に関する日中対照研究：日中シナリオの分析に基づく語用論的考察』金城学院大学博士論文.
- 生越直樹（1988）「連用形とテ形について」『横浜国大言語研究』6、62-71.
- 大曾美恵子（1999）『日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化』平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究(A)課題番号：08558020）
- 郭恬・徳井厚子（2010）「中国人学習者の日本語複合動詞に関する意識・習得調査」『信州大学教育学部研究論集』2、73-86.
- 影山太郎（1993）『文法と語生成』ひつじ書房.
- 影山太郎（2021）『点と線の言語学-言語類型から見た日本語の本質-』くろしお出版.
- 加藤由紀子（2005）「原因・理由を表すテ形接続に関する一考察」『岐阜大学留学生センター紀要』3、13-24.
- 金澤裕之（2008）『留学生の日本語は、未来の日本語－日本語の変化のダイナミズム－』

ひつじ書房.

- 亀田千里 (1998) 「接続助詞『が』の提題用法について」『日本語と日本文学』26、1-9.
- 木村正武・中岡典子 (1990) 「撥音と促音—英語・中国語話者の発音」、杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 3 日本語の音声・音韻 (下)』明治書院、139-177.
- 許明子 (2016) 「中級日本語学習者の移動動詞『行く』『来る』の習得について—学習者の使用状況に関する調査を通して—」『国際日本研究』8、277-297.
- 草薙裕 (1985) 「文法形式が担う意味」水谷静夫 (編)『朝倉日本語新講座 4 文法と意味 II』朝倉書店、1-38.
- 高娟 (2018) 「作文コーパスにおける中国人学習者の日本語複合動詞の誤用分析」『日本語・日本文化研究』28、105-119.
- 黄明淑 (2014) 「話題の切り出しから『誘い』の意思決定に至るまでの一連の言語行動」『人文科学研究』10、41-55.
- 小森早江子・白井純子 (1999) 「誤用研究に基づいた日本語動詞『テ形』の習得順序」『日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化』平成 8-10 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (基盤研究 (A) 課題番号：08558020、代表：大曾美恵子)、12-21.
- 近藤真理子 (2012) 「日本語学習者の音声習得における第一言語特有の干渉と普遍言語的干渉—日本語教師へのアンケート調査から」『2011 年度早稲田大学大学院文学研究科紀要』57、21-34.
- 佐伯真代撰 (2015) 『日本語「テ形節」の統語構造と意味機能』東吳大學日本語文學系博士論文.
- 坂本正 (1993) 「英語話者における『て形』形成規則の習得について」『日本語教育』80、125-135.
- 児玉正子 (2015) 「中国人日本語学習者の前置き表現に関する一考察：日本人大学生と中国人留学生を比較して」『芸術科学大学紀要』21、155-166.
- 小学館辞典編集部 (2007) 『句読点、記号・符号活用辞典』小学館.
- 初相娟・玉岡賀津雄・大和祐子 (2012) 「初級中国人日本語学習者のテ形習得」『日本教科教育学会誌』35、63-72.
- 白川博之 (1990) 「『テ形』による言いさしの文について」『広島大学日本語教育学科紀要』1、39-48.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版.
- 新川忠 (1990) 「なかどめ—動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあい—」、言語学研究会編『ことばの科学』4、159-171.
- 菅谷奈津恵 (2002) 「日本語学者によるイク・クル、テイク・テクルの習得研究—プロトタイプ理論の観点から—」『言語文化と日本語教育』23、66-79.

- 菅谷奈津恵 (2014) 「日本語学習者による動詞テ形の習得研究概観」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』9、59-67.
- 鈴木忍 (1976) 「原因・理由を表す助詞の異同」『日本語学校論集』3、43-65.
- 戦慶勝 (2002) 「中日両語における句読点の照らし合わせ」『国際文化学部論集』3、69-77.
- 滝井洋子 (1998) 「原因・理由の『て』形接続についての一考察」『日本語・日本文化』24、81-93.
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点-不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる-」『日本語教育』85、25-37.
- 張麟声 (1997) 「原因・理由を表す『して』の使用実態について-『ので』との比較を通して-」『日本語教育』96、121-131.
- 張麗群 (1989) 「中国人学習者から見た日本語の擬音語と擬態語」『日本語教育』68、128-130.
- 陳臻渝 (2006) 「日本語の前置き表現に関する一考察:会話文と投書の比較を通して」『人間社会学研究集録』2、67-80.
- 戸田貴子 (2007) 「日本語教育における促音の問題」『音声研究』1、35-46.
- 唐彬 (2019) 『中国語を母語とする日本語学習者における接続詞の誤用に関する研究-「添加型」を中心に-』広島大学大学院国際協力研究科博士論文.
- 豊田豊子 (1978) 「接続助詞『と』の用法と機能(I)」『日本語学校論集』5、28-46.
- 中里理子 (1996) 「『ものの』の意味・用法について」『東京大学留学生センター紀要』6、95-109.
- 中島悦子 (2007) 『条件表現の研究』おうふう.
- 長友和彦 (1997) 「動詞テ形に関わる音韻規則の習得と言語の普遍性」『第二言語としての日本語の習得研究』1、1-7.
- 長友和彦・久保田美子 (1994) 「英語を母語とする初級日本語学習者による『動詞テ形』の習得:縦断研究」『平成6年度日本語教育学会春季大会予稿集』149-159.
- 中野はるみ (1997) 「シテ形接続と連用形接続の使用の実際-中級日本語学習者指導のために-」『留学生教育』2、105-119.
- 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系』ひつじ書房.
- 仁田義雄 (2010) 『日本語文法の記述的研究を求めて』ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版.
- 庭三郎 (2004) 『現代日本語文法概説』<http://www.geocities.jp/niwasaburoo/index.html> (最終参照日:2023年1月10日).
- ハイコ・ナロク (1998) 「日本語動詞の活用体系」『日本語科学』4、7-30.

- 橋本加代 (2016) 「テ形節による前触れの用法に関する考察—学習者の発話の分析を通して—」『創価大学大学院紀要』38、219-231.
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法 セルフマスターシリーズ 7 条件表現』くろしお出版.
- 畑ゆかり・山下直子 (2010) 「語彙指導を目指したカタカナ語の誤用に関する分析—留学生に対するディクテーション調査から—」『香川大学教育実践総合研究』20、25-32.
- 林雅子 (2007) 「動詞のテ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究—新聞・論述文・小説における語彙調査の結果から」『龍谷大学国際センター研究年報』16、49-58.
- ハリデー, M. A. K. [安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭轉訳] (1997) 『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房.
- 朴麗華 (2015) 『中国語母語話者による日本語のテンス・アスペクトの誤用研究』関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士論文.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版.
- 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版、1-22.
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版.
- 松本哲洋 (1989) 「接続助詞『が』の用法に関する一考察」『麗澤大学紀要』49、205-214.
- 三原健一 (2011) 「テ形節の意味類型」『日本語・日本文化研究』21、1-12.
- 三原健一 (2015) 『日本語の活用現象』、ひつじ書房.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』角川書店.
- 森田良行 (1989) 『日本語の類義表現』創拓社.
- 森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版.
- 森山新 (2000) 「日本語動詞習得の中間言語研究」『日本学報』6、69-84.
- 山崎深雪 (1998) 「接続助詞ガの談話機能について」『広島大学教育学部紀要第二部』47、229-238.
- 山下直 (2003) 「接続助詞『が』の機能分析—文法学習の観点から—」『人文科教育研究』30、69-79.
- ユリアニ・ヘルマニンシ (2005) 「現代日本語の補助動詞の分析」『日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集』19、113-131.
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、155-327.
- 吉田妙子 (1994) 「台湾人学習者における『て』形接続の誤用例分析—『原因・理由』の用法の誤用を焦点として」『日本語教育』84、92-103.
- 吉田妙子 (1995) 「『て』形接続の誤用分析—『て』と類似の接続機能を持つ接続語との異同」『台湾日本語文学報』6、149-174.

- 吉田妙子 (2012) 『日本語動詞テ形のアスペクト』 晃洋書房.
- 吉永尚 (2012) 「テ形節の意味と統語」 三原健一・仁田義雄編『活用論の frontline』 くろしお出版、79-114.
- 廖琳 (2021) 「中国語を母語とする日本語学習者における動詞の『テ形』の活用形の誤用に関する考察」 『日偏誤与日语教学学会. 日语偏誤与日语教学研究: 第六辑』 浙江工商大学出版社、171-186.
- 廖琳 (2022a) 「中国語を母語とする日本語学習者における『テ』と原因・理由を表す接続語の混用に関する考察」 『東アジア言語文化研究』 4、30-39.
- 廖琳 (2022b) 「中国語を母語とする日本語学習者における『並列節のテ』の誤用に関する考察」 『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究』 3、317-325.
- 廖琳 (印刷中 a) 「中国語を母語とする日本語学習者における『連用節のテ』の不使用について」 『東アジア言語文化研究』 5.
- 廖琳 (印刷中 b) 「中国語を母語とする日本語学習者における『テ』と逆接の接続助詞「ガ」の混用に関する考察」 『日偏誤与日语教学学会. 日语偏誤与日语教学研究: 第八辑』 浙江工商大学出版社、.
- 廖琳 (印刷中 c) 「中国語を母語とする日本語学習者における『テ』と条件表現『ト』の混用に関する考察」 『比較文化研究』 150.
- 渡部学 (1995) 「ケド類とノニ-逆接の接続助詞-」 仁田義雄・宮島達夫編『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』 くろしお出版、557-564.
- 和田由理恵・堀江薫・北原良夫・吉本啓 (2008) 「日本語学習者の依頼におけるポライトネスラテジー-日本語学習者の母語と日本語の比較-」 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 3、293-300.
- Brown, P. & Stephen C. Levinson. (1987) *Politeness: Some universals in language usage. Vol. 4*, Cambridge university press.

中国語文献

- 于康等 (2016) 《日语格助词的偏误研究 (上)》 浙江工商大学出版社.
- 于康等 (2017) 《日语格助词的偏误研究 (中)》 浙江工商大学出版社.
- 于康等 (2018) 《日语格助词的偏误研究 (下)》 浙江工商大学出版社.
- 于康等 (2019a) 《日语复合助词的偏误研究 (上)》 浙江工商大学出版社.
- 于康等 (2019b) 《日语复合助词的偏误研究 (下)》 浙江工商大学出版社.
- 于康等 (2020) 《日语副词的偏误研究 (上)》 浙江工商大学出版社.
- 于康等 (2021) 《日语副词的偏误研究 (中)》 浙江工商大学出版社.

用例出典

関西学院大学于康研究室

『YUK タグ付き中国語母語話者の日本語学習者作文コーパス』 Ver. 10

<http://yukang.org/index.html>

国立国語研究所

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>

謝辞

本論文を作成するにあたり、多くの方々のご理解とご協力、多大なるご指導とご助言をいただきましたことを、心より御礼申し上げます。

指導教員である佐藤暢治先生には、研究の進め方から研究の方向性や研究方法について、丁寧にご指導いただきました。博士論文の提出前には数度にわたりご助言をいただいたことに感謝申し上げます。ご指導いただいたことは、今後の研究活動の土台となり続けると思います。

博士課程後期の三年間は、一年目にして新型コロナウイルスの感染が広がり、海外からの入国は制限され、日本に来ることは不可能な状況が続きました。私を心配し、支援室と連絡してくださり、私が来広するまで入居予定の部屋を確保していただきました。また、渡日できないことにより生じた焦りや不安を解消するため、毎週ゼミの場でいつも温かいお言葉をかけてくださいました。二年目にして個人的な事情、家族の心配事、なかなか慣れない日本の研究環境からの疲れや不安までもが複雑に絡みあい、論文を書くどころか、熱意を持っていた研究に意欲さえ湧かなくなりました。やる気がまったく起きなかった私を見捨てることは一度もなく、支えてきてくださいました。研究においてささやかな成長や進歩があったら、ご自分のことのように喜んでくださいました。三年目にして佐藤先生はご自身も大変ご多忙の中、個人指導の授業で幾度に渡りご指導をくださり、また投稿論文の書き方から修正に至るまで非常に優しく丁寧にご指導いただきました。博士論文を書くにあたっての文章表現から、全体の構造、誤字脱字など細かな点までご指導いただきました。博士論文が完成できたのも佐藤先生のご尽力のおかげです。

佐藤先生には、研究の方法や論文の書き方だけでなく、一人前の研究者として、先行研究で述べられている議論や分析を積極的かつ批判的に捉え、それらの的確性を自分で考えてみることを、研究に向かうべき基本的姿勢や引用の仕方など研究者としての基本的なことを佐藤先生自らが模範となり、学生である私をここまで導いてくださりました。丁寧に方向性を示してくださったおかげで、三年間で博士の学位を取得できるまでになりました。感謝の言葉だけでは足りませんが、ご指導いただいたことを忘れず、今後の研究活動に活かし、少しずつでも恩返しをしていきたいと思えます。この三年間、終始暖かい支えとご指導をいただいたことに深く感謝を申し上げます。

副指導教員であり、副審査員でもある高永茂先生と荒見泰史先生、そして副審査員を務めていただいた関西学院大学の于康先生からも有益かつ貴重なご意見をいただきました。于康先生からは、于康研究室が作成した『YUK タグ付き中国語母語話者の日本語学習者作文コーパス』を使用させていただきました。誠にありがとうございました。また、共同ゼミに参加させていただき、長い間大変お世話になりました。共同ゼミでは、誤用に関する

研究のみならず、社会言語学を扱った分野にも触れ、幅広く勉強することができました。このような貴重な交流の場を設けていただき、深く感謝しております。高永茂先生には、予備審査の際、結論について建設的な助言をくださり、新たな研究の視点や問題点も見出すことができました。本審査においても、用語からグラフの作成など細かな点までご指摘いただきました。荒見泰史先生には、日本語の複合動詞をはじめ、中国語の複合動詞に関する定義や文法の説明などについて多大なご指導をいただきました。諸先生方に貴重なお時間をかけていただいたことに感謝申し上げます。

湖南大学の張佩霞先生にも深く感謝申し上げます。張佩霞先生には、博士課程後期に進学する前から現在に渡り温かく見守っていただき、推薦書を書いていただきました。

さらに、本研究の遂行にあたって、遅々として進まず落ち込みがちな筆者を支えてくれた先輩、後輩、友人の皆様にも、ここに記して、感謝の意を表します。

経済面においては、日本政府による「国費外国人留学生」に選ばれ、経済的に多大なサポートをいただき、生活に困ることなく研究に集中することができました。日本政府及び中国国家留学基金管理委員会にお礼を申し上げます。

最後に、温かい心で長い間の留学生生活を理解し、日本での勉学と研究生活を支えてくれた両親と妹にこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。本博士論文の完成を報告し、心からの感謝の印といたします。

令和5年2月20日 廖琳